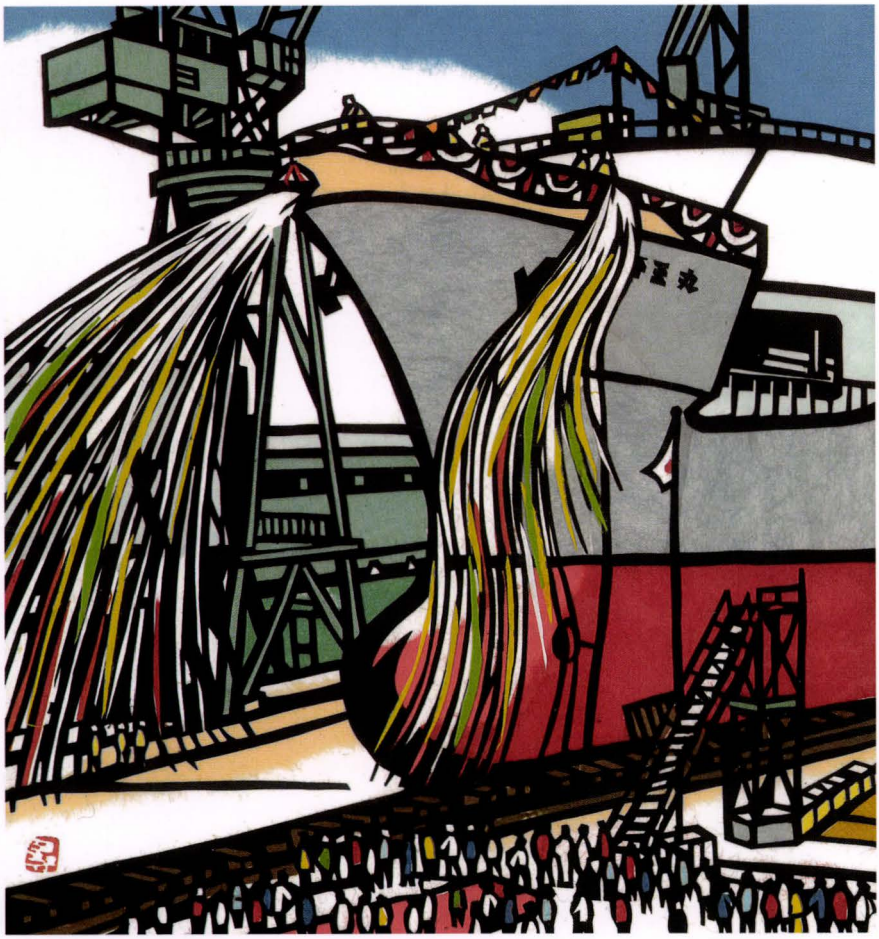
川柳塔

令和五年 六月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻一一五三号



日川協加盟

No.1153

六月号

第29回 川柳塔まつり

とき　10月7日（土）

ところ　ホテル・アウィーナ大阪

詳細は5月号111頁をご覧下さい。

残暑見舞広告

本誌八月号に掲載する残暑見舞広告を募集いたします。広告のスペースと掲載料は左記の通りです。同人・誌友ならびに各句会（川柳会）のアピール及び誌上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願い申し上げます。巻末の綴じ込み残暑見舞広告原稿台紙に原稿を貼付（又は記入）してお申込下さい。

★個　人　①1/9頁　一口　二〇〇〇円
　　②1/6頁　一口　三〇〇〇円

★団　体
①1/3頁　六〇〇〇円　③2/3頁　一二〇〇〇円
②1/2頁　九〇〇〇円　④一頁　一八〇〇〇円

▼原稿締切　6月15日

川柳塔社

心を尽くし　思いを尽くし　知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団　湯川胃腸病院

消化器科　放射線科　脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設

大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2　TEL 06-6771-4861
http://www.yukawa.or.jp

川柳文学賞

小島　蘭幸

令和5年5月12日、東京上野の精養軒において第16回川柳文学賞の最終選考会が開催され、私もオブザーバーとして出席させていただきました。今年の申請者は、令和4年に句集を発行された18名。その中から選考委員（雫石隆子・佐藤美文・新家完司・梅崎流青・荒川佳洋）の5名が1位から3位を選び講評を添えて事前に選考用紙を提出しています。

雫石隆子選考委員長を中心に最終選考の意見交換がはじまりました。選考委員の皆様の選考に対する熱い思いを聞いていると、私まで熱くなってきて、川柳の深さ、重さをしみじみと思うことでした。

最終選考の結果、川柳文学賞正賞に、赤石ゆう氏の句集「チドメグサ」、準賞に、たむらあきこ氏の句集「よけいにさみしくなる」が選ばれました。

正賞「チドメグサ」　赤石ゆう

菜の花よ人に生まれて息苦し
氷ですこころのように見えますが
わたくしを着ているサイズ合わぬまま

準賞「よけいにさみしくなる」　たむらあきこ

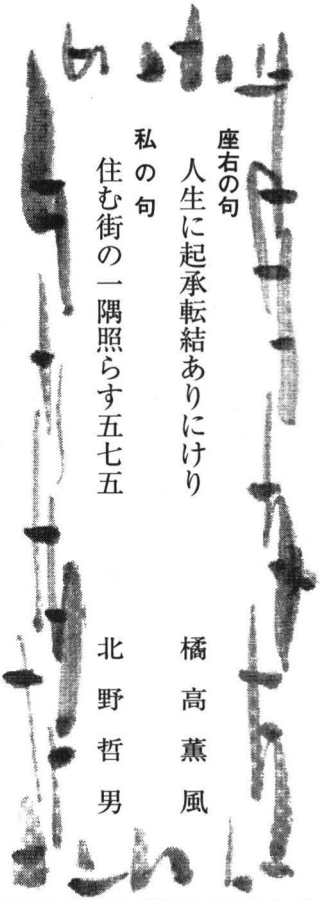
憎しみか愛かあなたをまださがす
計のあとを漂うわたくしのさくら
わたしの断層にはなびら入り込む

おめでとうございます。ただ残念なのは、今年の全日本川柳大会は誌上大会ですので、授賞式が出来ないことです。

令和6年6月16日、広島市のアステールプラザで第47回全日本川柳2024年広島大会を開催致します。令和5年に個人句集を発行しましたら是非、川柳文学賞への申請をお願い致します。授賞式も予定しておりますのでよろしくお願い致します。

石川県能登地方の地震により多大な被害に遭われました皆様にお見舞申しあげますと共に、一日も早い復旧をこころよりお祈り申し上げます。

川柳塔社



座右の句

人生に起承転結ありにけり　橘高薫風

私の句

住む街の一隅照らす五七五　北野哲男

川柳塔　六月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田　尋「進水式（'01）岩城島」

■巻頭言　川柳文学賞……小島蘭幸…(1)
一字……仁部四郎…(2)
川柳塔（同人吟）……小島蘭幸選…(4)
菠薐草の花⑥……野沢省悟…(36)
英語 de Senryu ⑱……吉村侑久代…(37)
誹風柳多留一三篇研究 34……(38)
自選集……(40)
句集の森……福島鉄児…(43)
温故知新……(43)
水煙抄……木本朱夏選…(44)
橘高薫風句集『肉眼』……(61)
愛染帖……新家完司選…(62)
檸檬抄「しつこい」……江島谷勝弘・永見心咲共選…(66)

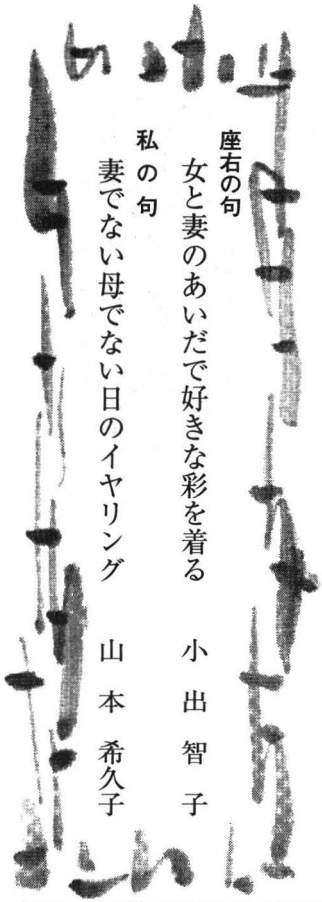
一字

仁部四郎

『新版川柳歳時記』（奥田白虎編・創元社）に、「地蔵盆宿題帳も持って寄り」という句が出ていて、作者は仁田四郎とある。鎌倉時代の武将「仁田四郎（にたんのしろう）」は、三省堂の『大辞典』に出ていて曽我十郎祐成を討ったと説明がある。お芝居では、いわば悪役であろう。編者か出版社か、どちらかのミスだろうが、仁部四郎としては、全くのオヤオヤである。

『サンデー毎日』に、「サンデー俳句王」という二ページものの読者文芸がある。二〇二一年の選者は、嵐山光三郎、奥田瑛二、川上弘美、戸田菜穂、やくみつるの五氏である。五人の他に、いわば元締役のような形の石寒太が毎回コラムを書いている。その六人での選者賞に、やくみつる選での私の「それぞれに四股名のありて雲の峰」が石寒太賞で入った。その選評に、「雲の峰がよく効いている。中七のては、でき

一路集（「あきらめる」「そろそろ」）……鈴木公弘選…(70)
初歩教室「雨」……森田旅人選…(71)
川柳塔鑑賞……平井美智子…(72)
水煙抄鑑賞……宇都満知子…(74)
■各地句会だより　川柳塔さかい……鴨田昭紀…(76)
インスピレーション・ナビ　印象吟……齋藤さくら…(77)
『麻生路郎読本』余滴(76)……大西泰世…(78)
せんりゅう飛行船(150)……桒原道夫…(80)
五月本社句会……新家完司…(82)
各地柳壇（佳句地十選／牧野芳光・出口セツ子）……(83)
柳界展望……(88)
六月各地句会案内……(101)
■編集後記（ひとこと／藤井智史）……道夫・国和・じゅん子…(102)
……(104)



座右の句

女と妻のあいだで好きな彩を着る　小出智子

私の句

妻でない母でない日のイヤリング　山本希久子

ればし・にしてほしかった。」とある。仁田四郎と仁部四郎では、オヤオヤで済ませたが、「て」が川柳的であるとすれば、「し」は俳諧的ということなのかと考えこむことになった。なお、年間大賞は「路面電車は向ふ八月九日へ」（長崎・主婦・田中和子・64）であった。

私は、高校の教員だったが、「教科書で・教える」と「教科書を・教える」のちがいを今もって理路整然と説明することができない。大仰に言えば、「で」には教える側の全人格が込められているべきなのだろう。

「合う」と「会う」の併用というか、混用というのか、メディアの文章にふえているように思う。

某日の某新聞の記事に、「映画との出合いも一つの縁」というのがあって、私は「出会い」じゃないかと思った。

『NHK俳句』に、「句合わせ」という三ページものがあるが、最後のところに、西村和子の発言で、「出合いに（季語との）即応した心の動きを句にする…」とあって私としては、「出会い」じゃないかと思ったことであった。（　）は仁部がつけた。

川柳塔

小島蘭幸選

王座奪還日本の春が活気づく
日の丸を背負う孤独の姿見る
大谷グッズばあばも自慢したいなぁ
かけ放題ひとり暮しも悪くない
卒業まで生きていてねと孫が言う
この先は地図のない道です　歩く

横浜市　川島良子

六月の嘘はしとしと付いて来る
長雨に思い出してはならぬ夜
雨音がノックしたかも貴方かも
水無月の雷さまにあるノルマ
約束を果たして虹は去るのです
紫陽花は魔女に少女に私に

枚方市　栃尾奏子

大江・坂本逝って良識揺るぎそう
同郷でも大江文学解りかね
ノーベル賞の森で私も遊んだが
ノーベル賞の死が老衰というショック
記憶から出るはたのしいことばかり
一斉に支援介護になる団地

松山市　宮尾みのり

十年を父ひとり住む台所
庭の石動かしミミズ困らせる
駅からは月が送ってくれました
末の子の机そのままある二階
いつの間にかミケのソファーになりました
古書に出せば読んでくださる人もある

尼崎市　山田耕治

気がつけば彬の歳の三倍に
原点は缶入りサクマドロップス
辛口の助言をありがたく受ける
誰にでも言えないことを君にだけ
弟に似てる　日銀新総裁
辞めたくても辞められないね照ノ富士

藤井寺市　鈴木いさお

借りたままになってしまったビートルズ
選ばれし苺 ジュースになる苺
独り遊びが上手になった大都会
「まあいいか」もう口癖になっている
周波数君に合わせて生きてます
花を愛で人を愛して風になる

大阪市 高杉 力

見るだけでサプリ元気になるらしい
結局は助走で終わるみたいだな
核ボタン握って今日もよく吠える
アラートが鳴った私にどうしろと
的外れの話なんだが和ませる
削除された声が本当だと思う

岸和田市 岩佐 ダン吉

抱きしめてあげよう今日は誕生日
雑踏は苦手酸素が少なそう
ベランダのトマト狙っているカラス
私小説みたいに長いメール来る
しょうが湯でほっこり春はすぐそこに
休肝日刻のたつのが遅い夜

松原市 森松 まつお

残り時間ひとり遊びがうまくなる
団塊も高齢何か変わりそう
ホーホケキョうちの庭まで来てくれる
ハナミズキ桜散るのを待っている
待っていた筍まずは木の芽和え
弾けるだけのピアノ隣の声援が

長岡京市 山田 葉子

これだけは言える悪いのはプーチン
「川柳の理論と実践」が座右
いまんとこ太っています元気です
アホですわ酔ったらすぐに奢るたち
俺の人生も王手がかかってる
偏屈だが根性だけは負けてない

大阪市 江島谷 勝弘

田舎ぐらしが好きうぐいすの初音
ヤングケアラーは大勢いた昔
ワクワクドキドキ忘れてた昂り（WBC）
感動を共有ラインでハイタッチ
探し物うろうろ運動にはなるか
モチベーション上がる久々の化粧

犬山市 金子 美千代

取得から乗らずに返す免許証
安全とファッション兼ねたヘルメット
サラリーマン止めても背広捨て切れず
経を読む長さで決めるのがお布施
雑念が次次浮かぶ長い経
自由だと言うのに電車皆マスク

三田市 多田 雅尚

唐津市　坂本蜂朗

明けたかと思えば暮れる老いの日々
さり気なく補聴器外す妻の愚痴
出て行けと言えば貴方が出て行けば
チャン呼びをした友人は皆故人
まだ酒と川柳がある老いの日々

熊本市　杉野羅天

鶯の初鳴き　弥生十二日
水郷のゆるき流れへわが憩い
祖母の背をわが背で返す米寿の日
スイーツを食べるスピード好きと言う
梅真白山渡る花皆真白

北九州市　小松紀子

年だからなんてワタシ言わないよ
良いことも沢山あった悔いはない
泳げずにプールで歩く一時間
お迎えは桜吹雪のようであれ
ボランティア輝いていた若き日よ

福岡県　本田さくら

青空のむこう戦がまだやまぬ
ナツメロに昭和の日々が顔を出す
孫たちの元気ジジババ生きかえる
わが家から山桜みる至福時
チューリップ植えた一つが「おはよう」と

札幌市　小澤淳

坪庭に植えた樹々いま手に負えず
万葉がなの時代からある七五調
言い訳はしない本日忙しい
九十も視野に入って立ちくらみ
来てたのかもう帰ったか波の音

塩竈市　木田比呂朗

紫陽花は六月の雨気にかけず
ねつ造がいつも気になる歩数計
やあやあと故人もかすむ通夜の席
マスクとりウィズコロナはまだ怖い
ママチャリもかぶれと指導交差点

男鹿市　伊藤のぶよし

温暖化笑う漁師に泣く漁師
金婚に皺がにあいの笑顔です
歩けるうちは今日も元気に医者通い
妙薬は元手いらずの好奇心
雑草で生きた証はど根性

黒石市　石澤はる子

里の家地域の絆という守り
あの豪雪跡形もなく消えている
記憶力の下方修正止まらない
おやつ代しぶしぶ削る物価高
コロナ収束マスク5箱のお役御免

黒石市　北山　まみどり

桜さくらサクラあっけなく過ぎる
ご機嫌を伺うように小さな芽
ストレスもたまに大事な活力剤
狂い咲きとは違いますひとり咲き
散り方も熟知しながら咲き誇る

弘前市　稲見則彦

花まつり疾うに青葉の中にいる
ジャンケンポン勝たねばならぬゴミ出し日
爺ちゃんに小銭を使う場所がない
ビートルズでもいいがバッハはなおいい
豪雪のあとは酷暑が気がかりで

弘前市　今　愁女

ワンダフルサクラ満開弘前城
B二十九に怯えた少女期昭和は遠く
大なる犠牲に平和いただく
老齢の現在穏やかに暮してる
狭庭には黄の水仙が並んでる

東京都　川本真理子

兵士の目に映る空　海　丘の色
飼い鳥と以心伝心春の夢
見守る蝶の羽化　静かなる祈り
消しゴムをちゃんと使って生きること
解体の家から一枝挿し木用

八王子市　川名洋子

脱マスク三年ぶりの紅をさす
春風に押されふらり見知らぬ街
いい味の皺を刻んで歳重ね
オンオフを使い分けして傘寿なる
新聞に旅のお誘いばかりある

横浜市　菊地政勝

覚えある言葉を聞いて自重する
あの頃は風呂敷でしたランドセル
性格のままにくしゃみが遠慮気味
艶っぽく注いだおちょこを一気飲み
健康に良い話なら拾い聞き

上尾市　中村伸子

寝る前の握手強い日弱い時
ヒントなしのクロスワードは強かで
サクラサクラ満開なのに雨が降る
三大桜のせめて一つでも見たい
京都駅の大階段を登った日

朝霞市　前田洋子

亡き猫の毛今日はクッションから見つけ
皆の遺影へ話しかけてる昨日今日
寒暖よ心伸びたり縮んだり
このままじゃアカン心が萎えてくる
あとは死ぬだけ好きなことの～んびり

越谷市　久保田　千　代

譲れない一線があり輪を拒む
ちっぽけなことだと悟るしまい風呂
迷うことが生きることかも八十路なお
いい出合いありそう春の靴を買う
にこやかな春に心をジャンプさす

名古屋市　山　本　三樹夫

散り際のさくらが見せる美しさ
一見にのれんが重い老舗店
異次元が続く総理の新語録
ふろしきを広げて赤字どう減らす
満開のさくらの幹が空洞化

豊橋市　西　郷　紀美代

悲観することもなかろう医の進歩
椿好き気性までもが潔い
師のことば想起をしては懐かしむ
案じても代わってやれぬ子の苦労
古い人も証拠となって救われる

愛知県　早　川　遡　行

気遣ってくれる友あり共に老い
妻病んで寂しい家が待っている
これからも生きていくしかない老後
一日中ぼんやり過ごすいい時間
ストライクにもリクエストしたくなり

石川県　堀　本　のりひろ

心中をつつかれでたの影の僕
ミスばかりなのに悠々八十路越す
老い哀し学ぶ尻から霧の中
覗きたや君の心の奥の奥
ずーと好きわかってくれよ朧月

可児市　板　山　まみ子

なれるならちょうちょ気ままにひらひらと
早咲きの聡太六冠孫に欲し
絶望と不安抱えて病む夫
立てないが口は達者な介護度五
断捨離も掃除も見ないふりをする

岐阜県　喜多村　正　儀

インフレもデフレも格差崩せない
苦笑してほろりとさせる子の電話
胸底にへばりついてるのは初心
夕暮れの路地が何やら秘密めき
転ぶコツ教える山の通学路

犬山市　関　本　かつ子

ムツゴロウさんのようにはいかぬ余所の犬
ちゃん付けで呼ぶ友がいる大切さ
窓埋める桜見ながら歯科の椅子
外国の人の多さよ東大寺
奈良巡り娘と一万六千歩

和歌山市　上田紀子

青空に映えて桜の大笑い
待ってます世を立て直す救世主
デジタル化進む世間に遅れとる
嫋やかに生きてみたくて身繕い
キャッシュレスお賽銭はどうしましょ

和歌山市　柏原夕胡

万引きをする老人のさびしい目
桜の根踏んでドンチャン騒ぎする
欠かせない日課なんです薬分け
駆け足で過ぎる引き止めたい春よ
人間としての強さは持っている

和歌山市　松原寿子

負の連鎖これって神のいたずらか
転ばずにいともたやすく骨折症
激痛に耐えて川柳詠んでいた
勿体ないほどの真心お受けする
激痛を乗り越え春の陽に出会う

岩出市　藤原ほのか

二度とない人生だから生きます
生きてれば暑さ寒さも感じます
名もない草にもやどるいのち
いわをくだき草のいのちにはげまされ
リハビリはすべてのことが自立です

橋本市　石田隆彦

また明日と元気をくれている夕日
菜の花が車窓に映える田舎発つ
渋味消えにこにこまるい爺の顔
飲みやすいワインで不覚千鳥足
満月の一夜限りのショーを見る

京都市　清水英旺

世渡りに少しは馬鹿にならないと
せせらぎと戯る春の娘たち
かみさんは外務財務に長けている
買い物はセルフレジでないスーパーで
紙コップの中身が秘める一大事

京都市　藤井文代

ベリーショート格好よりも楽が好き
ギブスはずれ動けた脚にまず拍手
鏡より影でリアルに老い自覚
スローペースなのにゴールで前に居る
もう一人の私の声で財布閉じ

京田辺市　北野クニオ

孫入試ブラボー聞いてまた金か
夜桜の遊びが過ぎて風邪を引く
転院の紹介状が泣いている
人間の寿命は神に任せとく
冗談を本気にさせる憎い人

八幡市　武田悦寛

ポケットに入れたしあわせこぼれ落ち
肩書きがとれ水平に泳いでる
明日のこと誰もわからん春の風
追伸に本音小さく草書体
一日の喜怒哀楽を洗濯機

大阪市　東敏郎

千羽鶴飛んで行けないもどかしさ
舌を噛むカタカナだけの丸薬
半額のすし大皿に盛り祝う
卒業の記念に友の素顔撮る
じいちゃんの期待膨らむランドセル

大阪市　石田孝純

生きてます私ゼンマイ式ですが
キッチンに妻の手品のタネがある
絶食の美女です妻は今日検査
いつか咲くプラス思考の草むしり
病院の帰りぶらぶら三〇〇〇歩

大阪市　磯島福貴子

ヘルメット努力義務だか馴染めない
生き生きと出で立ち見ればフレッシュマン
コロナ癒え空の引き出し満たさねば
聡太さん早や頂点へまっしぐら
脱マスクチークにルージュフルメイク

大阪市　井丸昌紀

五分五分と油断させ勝ついぶし銀
元気もりもりそんな男は苦手です
細かい字読んでるうちについ猫背
ドーナツの穴の向こうにアリ地獄
蔵書印押してすっかり読んだ気に

大阪市　岩崎公誠

自分から反対しない目立たない
抗老のストレッチして骨が泣く
二刀流メジャー本場で大人気
クール便里のピチピチどんと着く
駄菓子屋にばあちゃんが居て夢育て

大阪市　岩﨑玲子

主婦の朝チラシのチェックから始動
嬉しいわほったらかしの鉢から芽
人は皆スマホ頼って知恵出さず
記憶力おちて三回買いました
休刊日朝のリズムがちぐはぐに

大阪市　内田志津子

実らない判っていても恋をする
一瞬で孫はウルトラマンになれる
脱車小さな発見そこかしこ
初生りをお裾分けして春最中
特売品チェックをつけてお買物

大阪市　宇都　満知子

嬉しい日おさらいします呑みながら
置いたはず仕舞ったはずのかくれんぼ
半ベソの犬の粗相は叱れない
晩年の母と答え合わせをしてる老い
婆ちゃんも要る自転車のヘルメット

大阪市　榎本　舞夢

WBC大谷テレビ明け暮れる
野球見て学ぶ人生観も学びます
骨折ばあさんさくらにじっとしてられぬ
ささやかに近くのさくら散らし鮨
久しぶり曽孫一家の御訪問

大阪市　大沢　のり子

大皿に玉子一個のオムライス
かあさんの頬あたためてあげました
夕焼けに復活したと告げに行く
オオタニから魂を受け取りました
ホタルイカはおいしい春はいいものだ

大阪市　奥村　五月

お若いと言われ痛みを話せない
ヤケ酒も飲めぬ肝臓ガン手術
神様も戦争コロナ止められぬ
どこまでが薬か毒か酒に問う
若い時泣かせた息子母介護

大阪市　小野　雅美

精一杯君は生きよと散る桜
散り際の桜の涙見てしまう
もう誰も覗きはしない日記帳
ペンだこを忘れ筆順まで忘れ
部屋中のため息吸っているルンバ

大阪市　折田　あきこ

昨夜の悔い軽くふりかけ朝ごはん
花びらをコップに浮かしひとり酒
あだ花も心の中に残す意地
わけありの体になって知る元気
断捨離で寂しさ増した広い部屋

大阪市　川端　一歩

七冠取って奇跡の人になって欲し
人知れず咲いて散る花だってある
長寿の秘訣いよいよ喋る側に立つ
ケチとズルボクの中にも少しある
生臭い夢も見ているおじいちゃん

大阪市　古今堂　蕉子

ご近所の目が監視カメラという昔
文化の要新聞代がまた上がる
身体の声素直に聞いてまた寝てる
リセットボタン押したい頭腰に耳
句を作り服を着替えてからめまい

大阪市　近藤　正

トマホーク弾で保育所二か所建つ
大江さん言葉の森で眠り入る
被災地に被害押し付け汚染水
停戦に手を挙げる国名乗り出よ
戦支度専守防衛蹴っ飛ばす

大阪市　坂　裕之

出来るはずない事ばかり望んでる
危ないと言われながらもマイカーで
偉そうにしないあの人素晴らしい
好きな事やってるくせに不足言う
どっちから聞こえてくるか耳済ます

大阪市　髙杉千歩

戦争はごめん贅沢言いません
入選の日に新しい靴を履き
守られて時計の要らぬ施設です
思い出の引き出し全部空になる
この辺でお開き眠くなってきた

大阪市　田中廣子

通り抜けテレビで我慢しています
おし車一人外出無理ですか
ヘリ捜索早く解決のぞみます
北ミサイル民をおきざり何思う
手作りの祖母のおはぎが懐かしい

大阪市　田中ゆみ子

幸せは長く続かぬ銀の匙
そんなこと思ってたのか十五歳
ずらしても必ずやってくる別れ
楽しみは百均に行く小銭入れ
奨学金背負って走る新入社

大阪市　谷口　義

今にして思えば今年は暖冬だった
一日一日大切な二十四時間
歩きなさいと言われ行き先は病院
着付教室で習ったことは皆忘れ
散らかった部屋は生きている証

大阪市　津村志華子

笑うて泣いて吠えた日もある私小説
九十七年締めた箍です朽ち果てた
車椅子かり立てに来る旅冊子
旅も良いグルメも良いと夢のこと
午後三時ほっと息つく梅こぶ茶

大阪市　寺井弘子

痛いとこ突かれ石段踏みはずす
再会の笑顔盃酌み交わす
珍しい名前で記憶消えがたく
今が旬未だ未だ旬と星月夜
ベストセラー読んで老化を遅らせる

大阪市　寺本　実

マスク取りあんた誰やと止められる
できちゃった女王手をさしてくる
プライドは持たずうなずき役でいる
色と欲罪を呑みこむ北新地
狭き門お金次第で広くなる

大阪市　中井　萠

来年も桜見ようと誓う春
ヘルメット買うかママチャリやめようか
孫達の会話はまるで異星人
久々に朝ドラに聴く国訛り
嫁に来た頃を知ってるご近所さん

大阪市　原田　すみ子

全部好き言えなくなってから長い
出来るから励ましているのは自分
死ぬ迄にしたい事ふと書き並べ
戦争のテレビ子供さえ黙らす
猫連れの帰省でややこしさプラス

大阪市　平井　美智子

終りなき五欲を追うて春の闇
無いものを探し続けている両手
君とならまだ飛べそうな青い空
あと一歩進めば何か動くはず
来年も逢う約束をした桜

大阪市　平賀　国和

雨の中仲間と共に通り抜け
定年の義弟喜ぶ自由の身
古稀すぎて言葉の森を散歩する
戦後生まれ戦を知らず幸せだ
梵鐘も供出させていた昭和

大阪市　降幡　弘美

なぜだろうまぶしく見える転校生
丸まって寂しそに寝る子の背中
手帳書き結局見るの忘れてる
四月だけがんばっている外国語
おさがりを待ってる母の熱視線

大阪市　山本　加お里

人生は一度きりだよ振り向かず
翔平の笑顔大好き世界一
おはようと笑顔の写真ついほろり
七千歩歩いて自信つきました
悪筆は悪筆なりに傘寿の字

大阪市　横山　里子

しゃれっぽくボサノバとジン春うらら
子供らのはしゃぐ声して花見頃
来年は会えるか花に問うてみる
ペットの鶏玉子を生んでくれた
ローカル線乗り鉄婆さん一人旅

堺市　今井　万紗子

あなたと繋ぐ右手はいつも空けてある
物言わぬメダカも呼べば寄ってくる
地方紙に包まれ姉の荷が届く
亡母真似てふっくら炊けた豆ごはん
年の功か一皮剥けて笑顔よし

堺市　柿花　和夫

メモ帳になってチラシが蘇る
方向音痴通天閣の灯が頼り
取り取りのスープでわかるお国柄
字が声になってるような筆遣い
四月馬鹿愉快な嘘で座が和む

堺市　桒原　道夫

公園のベンチで見てる影法師
空を見たくて少年は樹にのぼる
悠然と桜の下を歩く猫
桜が散ったと空も思っているようだ
見越しの松の誘いをどうしたものか

堺市　源田　八千代

百二歳哲代さんに元気貰う
定年まで後数年を転勤に
老親を置いてきぼりで白状な
後四年現状維持に務めます
バイト代り祖母の手助けしてくれる

堺市　齋藤　さくら

やれやれとマスクはずして照れている
石頭こつんぐらいで治らない
ふる里を語り明かした若かった
隣国のミサイル恐くなってくる
しっかりと御飯食べてる有難い

堺市　坂上　淳司

孫娘に双子男児が授かった
双子用幅広バギー誇らし気
専守防衛を丸めて捨てたのは岸田
曽孫たちに赤紙などは来させない
台湾の有事無いこと祈るのみ

堺市　澤井　敏治

花冷えにまた一ねむり二ねむり
マスク解禁ポチが怪訝な顔をする
おしゃべりの周りにおしゃべりが揃う
車中メイクまた始まったノーマスク
結跏趺座まだまだ遠い無の境地

堺市　内藤　憲彦

ボケぬよう今日も朝からジム通い
ダイエットまたかと笑うミルフィーユ
あなたから先ずはピストル置きなさい
春風に土の香もらう道の駅
朝ドラのお国訛りに旅気分

池田市　太田省三

修復の金箔を貼るいぶし銀
政策の選択できぬ無投票
葬儀場一年前はラブホテル
身寄りなく国庫帰属の遺産金
無投票強固な地盤持っている

貝塚市　石田ひろ子

葉ざくらになってほっとする散歩
浮かんだ句電話のベルでふっと消え
ウォーキング兼ねて早朝のパン屋へ
ほどほどに自己主張して丸く生き
おおっぴらに生年月日言える齢

河内長野市　大島ともこ

善きも悪しきも軒を借りてる青い星
衝動買い止める機能は未だ無し
苦手な事見なかったことにして蓋
久し振りのルージュハートが震えてる
大らかの隙間に潜む淋しがり

河内長野市　木見谷孝代

マスク取る準備表情筋ゆるめ
淡紅のルージュ頬笑むコンパクト
光満ち私もゆるり発酵す
春うらら一時停止を忘れそう
わくわくと大地を起こす鍬を取る

河内長野市　中島一彌

兄弟が実家の処分語り酔う
新幹線来ても空き家が増える里
平和の世いつしか忍び寄るまさか
好評で妻のお抱えシェフになる
侍ジャパン歓喜の声と湧く涙

河内長野市　藤塚克三

未完成だからガンバルまだやれる
いい句浮かぶ書いた文字まで踊ってる
孫のため9条支持の気概持つ
老人会囲碁の途中で一眠り
窓際で人の情に浸ってる

河内長野市　村上直樹

筋金入りだぞピカドンも知る飢えも知る
菓子折りに潜む魔物にご用心
立ち飲みは物価高でも減らさない
禁酒百日やはり命が愛おしい
叡智と汗きっと地球は蘇る

河内長野市　森田旅人

失敗を重ねようまあ生きてきた
ようまあようまあと年寄りになった
穏やかな目覚めふつふつ生きている
幸せな日々は亡夫に守られて
思い出を掘り返すなど野暮なこと

岸和田市　雪本珠子

好奇心わたしを旅に駆り立てる
川柳で乱れた世相風刺する
人間が信じられない世の中に
温もりの中で溜息溶けてゆく
タイガース今日も観衆魅了する

吹田市　太田昭

身の丈に合わせ望みを書き換える
錆び付いた脳を荒砥で研ぎ直す
私のサイズで掘った落とし穴
身の丈に合った柩を予約する
帰りには送ってくれぬ救急車

高槻市　片山かずお

近所回りの桜で済ますプチ花見
4月の陽浴びて転た寝止められぬ
葉桜が園児迎えた入園日
春の真ん中だよと知らせる木瓜の花
しゃきっとせいと酸素ボンベが喝をくれ

高槻市　島田千鶴子

やぶ椿ぽとりぽとりと春が逝く
楽しけりゃ時代遅れもいいじゃない
朝を待とう夜はなんにも答えない
チャレンジする君にエールの花吹雪
今日の笑い明日を生きる糧にする

高槻市　初代正彦

子ら寄れば春の土鍋も嬉しそう
スーパーの昆虫食を試食した
ともかくも時世に添うているつもり
キャッシュでも混んでるレジについ気兼ね
横断歩道一時停止にありがとう

高槻市　富田保子

老人の戝まで奪う低利息
快復の気配まだまだ主人の死
マイペースおそらくこの子大物に
マネキンの似合うセーター買った悔い
快復の気配嬉しい瓜の色

高槻市　鳥居宏

うぐいすはまだ下手ながらうれしそう
娘にもやがて思い出桜道
中国が和解すすめるよい機会
遠方の友にプーチンそっけない
かたくなに戦は続き人は死す

高槻市　松岡篤

ネギ刻みながら鼻歌孫来る日
買い物と病院上手く時間割
逆上がり出来てどや顔孫可愛
ランドセル商戦4月から火花
孫のなぜに答える為に図書通い

母の忌にあふれんばかり桜咲く
しらさぎ城春はピンクに染まり建つ
子がはしゃぐ声に始まる春休み
ネェネの手しっかり握り初登校
奥様にどうぞとお菓子いただいた

豊中市　池田純子

亡き母に重ねてしまうその仕草
大病に無理を重ねた過去悔いる
予報士をライバル視する僕の膝
Z世代母親も来る入社式
元カノが知らん顔して去って行く

豊中市　上出修

風呂の中ワハハと漫画読む10分
落ち込んだ時は自分を褒めてやる
日に三度背伸びをしては歳忘れ
猿真似でまさか思わぬ欲が出る
よく笑う人と居るのも張りがある

豊中市　藤井則彦

よく使う右手痛むのは左手
ゆっくりと年の数だけスクワット
ベルト穴ひとつ縮めたストレッチ
よく働いた日はぐっすりと夢の中
さくらからさくらへ続く命です

豊中市　松尾美智代

乳製品買ってと牛が泣いている
お父ちゃん背中のバネがキシんでる
右手には薬左手には清酒
菓子折りで選ぶ大会スポンサー
当選の鐘鳴りもらう5等賞

豊中市　松田蟻日路

ふる里はやはりタンポポ春の野辺
三叉路はさくら並木の道を選る
常備薬数え直して旅支度
傘寿過ぎ夢はいつしか幻に
侵略者の言い分に腹煮えかえる

豊中市　水野黒兎

気付いたらこんなに遠くへ来ていた
何気なく座った椅子が温かい
明日一つあさって二つ笑うだろ
タイミング外して怒り見失う
躓いた石の話が終わらない

富田林市　中村恵

終章は帳尻合わせゼロで黄泉
あと四年生きたら父を超す寿命
落涙を蛇口全開聞かせない
湧き水を掬う両の手ごくり喉
聞こえない見えない振りで老いの背

富田林市　山野寿之

寝屋川市　川本信子

プーチンに三分の理などありません
マンションの墓にお布施の請求書
子供から席譲られる路線バス
花屑の押し花病臥す姉に
経験が何よりの価値老いパワー

寝屋川市　伊達郁夫

葉桜になれど忘れぬ自己主張
旨そうだきっと体に悪いんだ
デパートで欲しいものなし枯れすすき
居酒屋に今日の微罪を置いてくる
夢追った峠に何も立ってない

寝屋川市　冨山ルイ子

ウクライナの土地少しずつ取るロシア
死者多数悲しく家族ウクライナ
一年が過ぎた頑張れウクライナ
戦争犯罪逮捕状が行った
涙なくしてテレビは見られない

寝屋川市　平松かすみ

子育ては不眠不休の大仕事
娘や孫のお邪魔虫にはならぬよう
卒業を待って嫁いで来た母よ
百年誌クラス写真がありません
二泊してうちの茶漬けが恋しくて

寝屋川市　廣田和織

ネジ巻けばちょっと元気になる私
探してた言葉見つけた午前二時
飼い主も猫も互いに惚けてきた
延命はノーと書いては消す余生
大銀河地球はいまだ青いのか

羽曳野市　磯本洋一

六根清浄身の丈低く陽を拝む
思いやりいつも大事に持ち続け
美味い店尋ねてみれば妻が居て
バーゲン品タグ付いたまま六ヶ月
高級魚味も漢字も知らなくて

羽曳野市　宇都宮ちづる

よく笑う友が百人いてそうだ
毎月の写経お寺が近くなり
閃いた句想二分で消えている
〆切りに追われて出来る五七五
保育士の給与アップも少子策

羽曳野市　徳山みつこ

薫風ののち花粉ふる黄砂ふる
争いにならぬ様ぎりぎりの資産
泥田に輝く蓮根堀りの技
読みづらいけど味わいのある癖字
七十余年不戦しかとこれからも

羽曳野市　藤原大子

鳥はしゃぎ洗濯せよと告げている
口角の筋トレせよと脱マスク
もつれてる舌が嘘だと白状す
夫に歩調合わせて恙無い暮らし
国連の決議ロシアに通じない

羽曳野市　三好専平

酒やめてやっと普通の人になり
酒やめて静かに桃の花を見る
酒やめてホンマかいなと医者は言い
酒やめて家が三軒建ちました
酒やめて耳がきこえるようになり

羽曳野市　吉村久仁雄

駄菓子屋のつり銭さんすう事始め
まん頭と酒が私の活力源
しっかりと罪を認めてからの運
血と汗の努力見せない真のプロ
粒揃いすぎて議論が進まない

東大阪市　北村賢子

明日咲く蕾へこころからエール
ＷＢＣに沸き大谷に沸いた春
春うらら心に翼生えてくる
満開の桜散らすな小鳥たち
青空に映える桜を通り抜け

東大阪市　佐々木満作

６Ｂを握ると語彙が絡みつく
ＬＩＮＥとの交流止めどなく続く
断捨離の半ばで思い出に浸る
本棚の隠し金庫に金はない
期待感膨らむ虎の試合ぶり

東大阪市　西村哲夫

施政方針お次は誰が読み上げる
だらしない食生活で生きている
嘆くたび過去世で笑うボクが居る
一人だけだあれもいない喫煙所
弥陀となら地図が無くても目的地

枚方市　谷英也

薬草茶すぐには効かず頼りない
アルバムに今も住んでる祖父母たち
お若いと言ってほしいと歳を言う
大願へお札賽銭効果なし
しっかりと嫁が締めてる大蛇口

枚方市　丹後屋肇

呻吟下咳込む朝の正信偈
点滴の窓を横切る花吹雪
弱体ながら病院食を空っぽに
病床万歳エンピツノート虫眼鏡
窓際の手摺で軽いスクワット

枚方市　藤田武人

僕はここ君は君しかいないよね
じゃまくさいもったいないが四つに組む
生き様が熱い男はそっと逝く
心音のリズムは母の顔にする
注ぐことはしない令和のおもてなし

藤井寺市　鴨谷瑠美子

開いたら優しい花になる拳
この道をゆけば若返ると聞いた
春をくぐって少し遅れている時計
観覧車同じ景色はもう見えぬ
シナリオはもっと元気な筈だった

藤井寺市　吉田喜代子

コロナにも負けず可愛い花は咲く
やはり春竹ノ子御飯生きている
遺言状突然書けと言われても
マスクなし化粧出来るが金がいる
変らないそれでも投票だけは行く

箕面市　大浦初音

おもてなし寛げるのが一番だ
言いたいこと胸の中で言っておく
犬二匹ベッドに上がり眠れない
犬の寝息聞いてるうちに目が冴えて
そうだ寝れない時は句を作ろう

箕面市　酒井紀華

読経中赤ちゃんの声ほっとする
青春の思い出抱いて生きつづけ
今日もまた自問自答の日が暮れる
簡単にごめんなさいと言えたなら
春ウララこんない日に救急車

箕面市　出口セツ子

バースデーカードに釣られ白浜へ
プチケーキとコーヒーホテルから祝い
朝のモカゆっくり脳が目覚めだす
物価高のんびり老後夢の夢
皆健康平和なだけで良しとする

箕面市　中山春代

寂しくてキーホルダーに鈴を足す
遠い日に舌がおぼえた蕗のみそ
オフの日は洗い晒しのトレーナー
断捨離をしないと私捨てられる
ロボットがしずしず持って来るうどん

箕面市　広島巴子

賑わいに太陽の塔手を広げ
鳥も来て花見弁当至福なり
異次元の異次元にいる老夫婦
次々と値上げ脳トレ追いつかず
もやもやが吹っ飛ぶ友の笑い声

八尾市　寺川はじむ

上手下手なく無心に描く園児の手
むらむらもドキドキもしてボケ防止
作り笑顔で我慢持ち寄る嫁姑
うまくもない手品に拍手温かい
世界のファンに引く手あまたの二刀流

八尾市　村上ミツ子

老いるとはこんがらかるということか
もつれた糸が頭の中へ入りこむ
どうすればうまく空気をよめますか
歩かねば歩けなくなるかも知れぬ
木から落ちたサルを決して笑うまい

大阪府　米澤俶子

Gパンを履いたことないおばあさん
もの忘れ海馬に風を通すため
薄氷をそろそろ渡っている余命
風呂の湯が肌にはじけるまあだまだ
焦っても今更先は見えている

神戸市　上田和宏

日に三度ごちそうさまと妻に言う
老害と知りつつ今日も一家言
時間稼ぎなるほどなあと曖昧に
思い出酒鼓動が早くなって来る
年金さま今日もアリガトございます

神戸市　奥澤洋次郎

窮屈そうに制服が来る四月
乳母車へ乗せられ欠伸してる犬
非正規を泣かせ正規の高給与
仲好し小好し沈んだお日さん登らない
逆転の望みを妻が持って逝き

神戸市　輿水弘

ふらっとめまいちょっと気になる老いの朝
飲みすぎよ言われなくてももう飲めぬ
米寿感謝妻の叱咤で頑張れた
一日一度ストレス飛ばす大笑い
失礼しますトンチンカンで真面目です

神戸市　近藤勝正

主なき家にもつばめ嬉嬉として
主なき家の桜は寂しげに
選挙カー来なく寂しい過疎の郷
夢投票それでも託す地方自治
よく笑いたくさん怒り好好爺

神戸市　斎藤隆浩

内緒やと思っていたの私だけ
好きなもの最後に残し食べ切れず
何度聴いてもやる気の出ないお説教
ひとり酒この気楽さは天下一
川柳は十七音のミュージカル

曇天の日には心に甘味足す
夫婦ともスマホに夢中会話無し
父も母も桜散る頃逝きました
やりたいことあるから今日もスニーカー
イカナゴを今年も炊いた妻元気

神戸市　敏森廣光

メーテルも追悼してる星きらり
「撮りましょか」桜並木とママと僕
滋味豊か昭和の菓子でティータイム
スマホするママを見つめるベビーカー
助けてと言えるあなたでいて欲しい

神戸市　冨永恭子

百歳になりたくないとサバを読む
ハッピーバースデー歌ってくれたお友達
あんパンがあれば笑顔になるバアバ
寝る時間だんだん長くなってきた
残念ながらチューリップ皆散りました

神戸市　能勢利子

標本木年に一度の晴れ姿
庭の桜手折って父母の仏前に
公園のベンチで独り花見酒
グルメツアー終えてきっちりリバウンド
川柳の淵に填まって溺れそう

神戸市　松倉正美

春の雨草木の目覚め促した
探し物思わぬ物が見つかって
嫌われても杉懸命に花咲かせ
大声援戻り互いに出る元気
木の芽和え口にいっぱい春の香が

神戸市　山口美穂

好きな人いっぱい出来たどないしよ
今日からはひとりで生きる　鍋磨く
スッピンの君が好きだと決めゼリフ
あんたがいるただそれだけでいいんだよ
思い切り泣けば明日は晴だろう

神戸市　山﨑武彦

わたし見てと花弁ひらひら宙に舞う
晴れた日のミニスカ闊歩する古道
噂するところへ寄ってくる埃
輪の中にいては分からぬ風の向き
満開のさくらに満開の笑顔

明石市　糀谷和郎

入学式輝く顔のマスク無し
見えますか桜咲いたよお母さん
母ゆずり枯れる花にも水あげる
許す事学んだ夜はエンヤ聞く
会えるよねあの世の句会楽しみに

芦屋市　荒牧孝子

芦屋市　新阜義明

球場建てこれぞ生き金筒香さん
立ち呑みで一杯目酔う癖がつき
好き嫌い元首変われば変わる国
どっちなの中途半端な努力義務
パン麺にやっぱ落ち着く米を食べ

尼崎市　近兼敦子

控えめなぐらいがちょうどいいらしい
ありがとう私を好きでいてくれて
鼻歌がでるほど好きな人だから
ラーメンが来るまでスマホ見る親子
青空を隠す黄砂がやってくる

尼崎市　永田紀恵

元気かとたまの電話は子の無心
場の空気読めない奴の大くしゃみ
新カルチャー三途の川の渡り方
前を見ず器用に歩くスマホ族
ガラケーです何か文句がありますか

尼崎市　羽奈和子

甘いもん好きで自分を甘やかす
おいしいのは君と一緒に食べるから
ローソクのように脂肪を燃やしたい
授業抜けて食べたうどんは旨かった
お楽しみはこれからですと喜寿迎え

尼崎市　藤井宏造

七十七伊達や酔狂で生きている
涙涙涙　逆縁の葬儀
余計なこと言ってしまって薬増え
おふくろの味売りにする総菜を買う
見てるだけ監視カメラのもどかしさ

尼崎市　藤田雪菜

手こずったワインのコルク壮快よ
気のはらぬ友との絆深め合い
久しぶり自転車漕いで足が吊る
道の駅積んだ山菜即売れる
運河沿い花びら背にし犬散歩

尼崎市　森菊江

偶然に出会ったふりで会いたいな
残しておいた最後のチョコの深い味
おいしければひとこと言うてお父さん
用心のためにいつでも留守電に
好物も入れて荷造り進学地

尼崎市　山田厚江

孫の夢世界征服するらしい
刺し身とうどん有れば二晩泊まれるよ
ヌートバーママのおかげと感謝する
宝塚線ハイソな客が乗って来る
盆と暮母の施設に里帰り

加西市　山端　なつみ

今の世は自分らしくがいいそうな
介護を社会で支えられぬ少子化
少子高齢社会来るの早過ぎ
八十歳の壁を超えたら好きに生く
もう歳を諦めを捨て富士登山

川西市　山口　不動

余命延ぶ燕初見の嬉しさよ
伊予柑の当りはずれの甘さかな
桜咲くにわかに世間賑やかに
赤々と散らばる椿踏まず行く
妖しきは口紅塗りし枝垂れ梅

三田市　足立　つな子

やんわりよりもすかっと言える仲の良さ
大拍手待ってましたと登場す
誠実の筋の通ったほんまもの
癖のないりっぱな書体ほれぼれと
おいしそう目先をかえる器物

三田市　稲角　優子

さくら坂母が少女になる小路
夢を編む春には届く母の色
十指皆長い山坂節くれる
ノックしてみよう希望が見えるかも
スマホから君が翼をくれました

三田市　上田　ひとみ

ひとことふたこと交わすと分かります
ぼんやりと生きて後悔などはない
背中から何でも聞ける齢です
心配も不安も母さん聞いたげる
温かくしてねタップリ食べてね

三田市　大西　重男

良からぬ夢亡妻の遺影が睨んでる
酒タバコ許しておくれ後がない
行く末はどうなることかケセラセラ
ここマスクここははずすと迷います
スタッフの若さ貰いにデイサービス

三田市　尾崎　一子

三寒四温待っていました桜咲く
まだマスクコロナじゃないよ花粉症
人もまた寄り添いさいてゆく大樹
人も街もピカピカにして新年度
百生きる人の定めにさくら餅

三田市　九村　義徳

介護には見えない金がかかります
背伸びした踵なかなか下ろせない
しがらみを絶って自由へ大ジャンプ
考えが自由に言える国に住む
風になり自由気ままに舞ってみる

三田市　住吉　美和子

マスク取り桜吹雪を浴びて来た
春の陽気心もぽっと暖かい
翔平ちゃん私も入れてね花嫁候補
春は涙別れと巣立ちと花粉症
潮干狩り本まもんですこのあさり

三田市　中山　昭美

一票の重さに気付く多数決
如才なく動く人にもある本音
エンジンを切って続ける立ち話
老い二人ボンボン時計遅れ気味
ホームランやっぱり野球分かり良い

三田市　野口　真桜子

合言葉は平和　看板猫眠る
見つけたのはキューポラの街父の汗
マドンナになれる一夜限りのクラス会
まだあるかしら落とした夢のかけら等
罪悪感が目を覚ました宵花が散る

三田市　堀　正和

大丈夫今朝も体温三十六
月初めてんこ盛りする予定表
孫の顔テレビ画面の隅にチラ
お隣の名前なかなか出てこない
プーチンの我が儘迷惑な日本

三田市　村田　博

身の丈を大きく見せる低姿勢
朝令暮改トップ替えても直らない
物価高我慢増やせば乗り切れる
競い合う友がいるから血が騒ぐ
人間味丸くするのは寄せ豆腐

高砂市　松尾　柳右子

孫ひ孫揃い主人の七回忌
いたわりに馴れた米寿の鈍い足
スケジュールあれこれ今日も良い目覚め
テレビから知る雑踏の桜の下
それとなくグウチョキパーもリハビリに

宝塚市　丸山　孔一

右を見て左を向けば右は過去
リハビリは悪化防止だその程度
売った株未だ値動き気にかかる
裸木に春だ春だと新芽吹く
旅仕度常用薬から詰め始め

丹波篠山市　北澤　稠民

減反の話蛙は眠れない
汗ばかり拭いてる善人の薄利
ご先祖の美田見向きもせぬ世代
しわしわの手で渡される妻のお茶
川柳で磨いています脳の錆

丹波篠山市　酒井健二

怪談は怖くない街にあふれてる
この命優しい医者に預けてる
船頭の唄がお上手松江城
枯山水千円のコーヒーで見る
宍道湖に落ちる夕日はありがたい

丹波篠山市　藤井美智子

チコちゃんに叱られぬ様佳句つくろ
竹の子に旬の力と美味もらう
ストレスへひと呼吸置く技覚え
ぼちぼちが老いの暮らしに良いリズム
亡父無口もの言うペンを持っていた

西宮市　緒方美津子

客間より風と戯れたいスミレ
格好いい侍ジャパン胸がきゅん
孫達へ撒き餌しているへそくりで
好意だとわかればそれでいいのです
忙しい母の暮しに安堵する

西宮市　亀岡哲子

入学式待ってはらはら花吹雪
可愛らしい花ねお名前知らぬけど
花柄のコップでゴクリ空の青
一袋のスイトピー蒔き春がきた
野球好きのばあちゃんとなり出す元気

西宮市　福島弘子

母の背も祖母の背も越え頼もしい
孫目線球児のプレー肩が凝る
還付詐欺駄目押し注意娘の電話
もう三年炊かぬくぎ煮の鍋仕舞う
鍋終り手抜き手始めまず奴

西宮市　福田正彦

振り向けば辛苦がやけになつかしい
そろそろの時期を逸した娘に焦り
陽春の入学生に活貰う
応援を総身に受けた勝利戦
好きなのにわざと冷たくして涙

南あわじ市　萩原狸月

心配を杞憂に変えたレントゲン
高架駅エレベーターを探す膝
度忘れの内は笑って済む夫婦
耕して子の分わが分鹿の分
お若いと言われ出したら高齢者

奈良市　東定生

活断層の活を取りたい脱炭素
そそられる食べ放題の旅プラン
花便り日本各地でフライング
難儀するアクリル板の仕舞い先
鼻歌でスーツケースが歩き出す

冷蔵庫たまに押し入れ並みになる
思い切って捨てる5年前のアイス
旬は過ぎました熟成しています
ぶっきらぼうにスマンかったと言われた日
カニもメロンも産地の方が高い

奈良市　大久保　眞澄

翔平ロスペットロスにと続く春
猫が逝くがらんと広い部屋になる
喋りすぎ自分が軽く薄くなり
バンクシー戦地に描くメッセージ
候補者は代わり映えせぬ人ばかり

奈良市　加藤　江里子

惜しむかに夕陽桜を照らしてる
空き家に雑草嬉嬉と光浴び
案内どおり歩きまんまと遠回り
隣席の夫婦女の声ばかり
チューリップ可愛さ消えて散るを待つ

奈良市　高橋　敬子

今年また逢えた桜よまた逢おう
断捨離は一つ買ったら三つ捨て
見る見ない一話で決める新ドラマ
孫娘とリハビリ散歩至福期
ネット申し込みやっと出来たら終ってる

奈良市　辻内　げんえい

大の字になって疲れを解そうか
ノーコメント本音はそっと底の底
時どきの孫の息吹に腰も伸び
お駄賃が高くついたが大笑い
予定表すべて私の時間です

奈良市　山本　昌代

久しぶりえくぼを見せた脱マスク
脱マスク今更見せたくない素顔
毒舌家の初めて見せたおちょぼ口
アナログのパパラインから外される
連休の穴場さがしているアプリ

奈良市　米田　恭昌

晴れやかな音符奏でる花水木
あっけらかん過ぎてアドリブ通らない
右左違う痛さに苦笑い
言い張られしぶしぶながら自腹切る
素直さに拍手私は頑固です

生駒市　飛永　ふりこ

散り際の美学桜に憧れる
生きてさえいればと淡い夢を抱く
治癒力がまだ残ってたうまい飯
鈍感なわたしも気付く物価高
振り向けば泣いた笑うた長い道

香芝市　大内　朝子

香芝市　山下　じゅん子

知らんまに母を送った齢になる
言い訳を知らんふりして聞いた母
膝小僧プールの中はおとなしい
着なくてもそう簡単に手放せず
甘い言葉たくさん聞いたイヤリング

桜井市　安土　理恵

いろいろとあっても春は来てくれた
あこがれは地味で青春無彩色
今ならばさしずめヤングケアラーか
六人兄弟の長女だったの　わたし
母さんが一番辛かったと思う

奈良県　安福　和夫

ポッケには今日もメモ帳万歩計
朝メシが楽しみ八十路ど真ん中
終活の言葉我が辞書から削除
百歳体操欠かさず今日も仲間増え
元気印掲げて白寿号に乗る

奈良県　谷川　憲

女子マネのノック爽やか甲子園
青バッジ飾りになっている議員
外遊の首相バラマキ止められず
分断が深まっていく世界地図
学校に子らが溢れていた昭和

奈良県　中原　比呂志

アニメには夢中政治に寄りつかず
ヘルメット防空頭巾でありません
結婚にキャリアウーマン耳かさず
赤い花咲かせて空家が二三軒
子を産めぬ訳ありローン三十年

奈良県　中堀　優

コーヒーの時間親父のマグカップ
人恋し詐欺とも知らず話し込む
婆ちゃんと居るそれだけで温かい
畑仕事もう終れよとお月さま
住み馴れた田んぼの中の一軒家

奈良県　長谷川　崇明

猛稽古耐えて鍛えた大銀杏
物言いに力士も耐える徳俵
コロナ禍も過ぎて歴史の一ページ
暑い寒いボヤくが四季のある日本
「着用は任意」みんなマスクのまま会議

奈良県　渡辺　富子

体育館もホールも設計した指固し
ドーパミン使い果たした固い指
修羅越した記念にわたし描くという
越えた修羅刻んだしわはぼかしてね
春陽浴びわたし見つめる目は優し

広島市　岸本　清

抑揚をつけてエンジョイ老夫婦
「生きとるか」今では言えぬ歳になり
背後から歩きスマホがプッシング
サプリより頭使って惚け予防
逆らわずいれば楽だが物足りぬ

三原市　笹重耕三

無人駅の待合室に座る春
へ理屈も小言も爺ちゃんの十八番
轍から抜けると分かる風当たり
憧れを抱くと伸びてくる翼
痩せそうで痩せない失礼なサプリ

山口市　兼崎徳子

年ごとに顔も心も広くなる
幸せのすぐ足元にある危険
正解を探して細く長い道
〝知らんけど〟つけ加えるとやわらかに
死角等全く見てない絶頂期

岩国市　上村夢香

清方にようやく逢えた美術館
侍ジャパンやはり台本あったんだ
春まつりこども神楽に光る汗
マイナンバーわたしが透視されるだけ
紅一点チームの色も赤ですね

防府市　坂本加代

師を囲む輪の中にいる果報者
アルバムに誰と行ったか偲ぶ旅
人間の特権ですとよく笑う
脳トレをしてもアイデア湧いて来ず
オオタニを見るためだけの俄かファン

鳥取市　池澤大鯰

メモをして頭を空にしておいた
メモったがどこへ置いたか忘れちゃい
メモのまま渡しても通じっこない
模様がえ中身はいつも変らない
アルコール検査二日酔いならまだ臭い

鳥取市　奥田由美

幾度目も嬉しい孫のご入学
この恋の彼方暗示か花吹雪
年一度の安堵いただく異常なし
言い訳が枯渇しましたダイエット
中年も夢に浸った展示会

鳥取市　岸本宏章

山菜の香り漂う春の膳
ゴミ出しもなくて土日は朝寝する
しゃぼん玉風を誘ってよく遊ぶ
カラオケに行ってみようか四年振り
温い手で繋げば温い輪ができる

鳥取市　岸本孝子

夕食を終えてどっぷりテレビ漬け
蕗の薹食べて体の毒を出す
コロナも五類思えば長いお付合い
今はもう質より量は望まない
桜のシャワー浴びる花見も乙なもの

鳥取市　田賀八千代

太陽にウインクされてまた迷い
好きな色選って奏でる春の画布
花言葉さがしスィートピー君へ
緑のペン握れば春の天使舞う
春の案内人蝶が手を招く

鳥取市　棚田大

あちこちに悪事増えるも止めれない
思い出を熱く語って人目を引く
何故か俺週末迎え元気湧く
恋しいと語る人見てうっとりす
郷土愛あちこちが減りどうなるの

鳥取市　谷口回春子

気を遣う妻の優しさ春を呼ぶ
機転きく身の振り方は妻が上
揉め事は仲良くなれるワンチャンス
ワンチーム家族四人の合い言葉
日なたボコいつの間にやら別世界

鳥取市　永原昌鼓

挨拶をしなけりゃ笑顔生まれまい
黙々と積んだ稽古はうらぎらぬ
コロナ禍と戦争共に戦えぬ
それぞれに開花発表平和だな
早々と桜満開いい日和

鳥取市　中村金祥

様々な声が私を目覚めさす
朝焼けが私の背なを押してくれ
クルーズ船一つの町がやってくる
ＷＢＣロスを補う甲子園
週末は足を伸ばしてリフレッシュ

鳥取市　福西茶子

あわてまい今日も白紙のスケジュール
朝納豆昼は豆腐で膝元気
脱コロナどこへ行こうか旅プラン
マスク下三年分を陽に当てる
ウグイスと競うカラオケ平和な日

鳥取市　前田楓花

菜の花のお浸しピリリシャリシャリリ
ヒーローになれなくたって生きられる
蕗を炊くもらった人を思い出す
穏やかな一日を生きて整える
権利とやら魅力なくても選挙行く

鳥取市　山下凱柳

卵価高騰優等生の名を返す
断りも遠慮もせずに来る黄砂
お互いがつっかい棒です老い二人
クラシックＢＧＭに指を折る
結び目の一つ一つにある矜持

鳥取市　吉田弘子

去年より今年気がつくこともある
ヨタヘロの体修理でまだ動く
朝夕のお経だけになった正座
老犬と老夫婦に会うウォーキング
すぐそこに私も歩く終の章

倉吉市　大羽雄大

やれやれと見送ったあと振り返る
西暦を昭和に変えて振り返る
旅立って行く子どもたち振り向かず
石段を登ると数え始めてる
段数に尻込みをする膝小僧

倉吉市　田中紀美恵

誰も居ぬ振子時計が家守る
働かぬ横着者は貧乏だ
八十路でも色気まだまだあるつもり
山陰の雪の大山日本一
どんよりと生きて格差に迷い込む

倉吉市　牧野芳光

山桜自分の色で咲いている
ソメイヨシノ申し合わせたように咲く
野茨に手を突っ込んで蕨採り
弁当が出れば出席いたします
吐いて吸う間に歳をとっていく

境港市　藤原久直

誕生日少し見栄張りふぐ料理
軽い返事だった夜も眠れない
右脳左脳叩いてみるが留守らしい
優先席感謝の気持ち忘れない
どっこいしょ何をするかと猫が来る

米子市　池田美穂

ショーヘイのような子ならば孫ならば
春休み国の宝をおもてなし
四月一日昨日の倍の値のシール
娘が嫁ぐ「帰らんちゃよか」持ち歌に
あと少しコロナ最後の悪あがき

米子市　伊塚美枝子

おぼろげにかすむ大山黄砂来た
今日は雨欲しいが予報大ハズレ
旅に出た気分で歩く花回廊
ワクチンの副反応も無い私
エンドロール出るまで続くドキドキ感

米子市　後藤宏之

法にふれないイタズラ少しありました
降る雨がいやしてくれるわだかまり
あの出合いかけて貰ったあの言葉
請求書が来たウインクしてかわす
椅子座禅お蔭が少し薄くなる

米子市　後藤美恵子

老いた足弾むスキップまだ踏める
ストライクボールハートで受けて春
検診の結果うれしい夕の膳
春眠に活入れるごと鹿威し
コンビニに並ぶ自転車塾帰り

米子市　妹能令位子

福袋どこにも福は見当たらず
みどり児のあくびを覗く母と義母
猫は膝コーヒー飲んで野球見る
お見合も親の返事でゴールイン
やっぱりねこの親にして翔平あり

米子市　竹村紀の治

誰が吹くゲームセットのホイッスル
ポリープ一個入院は七日間
晩酌のない病院の長い夜
肝臓と祝杯挙げる退院日
タコ焼きが大暴れする口の中

米子市　中原章子

呆けぬよう恋が大事と言われても
川柳の魔力のとりこ止められぬ
手料理の飽きない味を噛み締める
健康法テレビで学び糧とする
失敗を味方と思い気が晴れる

米子市　成田雨奇

世が暗くなるとほっこり欲しくなる
返事には遅れましたといつも書く
体温計必死で振ったものだった
朝酒を三日でやめたいい子です
高熱が出て晩酌は缶ビール

米子市　野川宣子

野の花は場所わきまえて咲いている
花時に会いたい人が星になり
元気な声都会暮らしに慣れたんだ
もう少し焦らせば良かったな返事
お宝はあるかと聞いてくる電話

鳥取県　門村幸子

精米の三十キロが手に余る
骨量を増やす材料吟味する
荷物持ちに徹して今日はサービス日
試練などパワーに変えて春うらら
持て余す時間などない桜咲く

表情は明るく鼻歌は軽く
冷蔵庫がらんどうです旅帰り
花曇り窓の隙間のシャガの花
着信音さくらひらひら受信する
凹む日も家はやさしく包み込む

鳥取県　斉尾　くにこ

夜桜を池に映して別世界
足腰の鍛錬公園を歩く
疲れたら公園あちこちにベンチ
息子らは勤め老妻お買い物
残された僕は公園歩きする

鳥取県　竹信　照彦

マスク無く入学の子の可愛らし
コロナ三年マスクの在庫増えました
独り立ちあの子も街の人になる
人間ってすごい働く手を褒める
検診が近い好物は控え目

鳥取県　細田　裕花

喧噪の音が恋しい楽隠居
何の音誰も分からず残る謎
大声で叫びたいのよノー戦争
がっかりは次へのチャンスがん張れる
捨てなけりゃ思い出ばかり追いかける

鳥取県　本庄　ひろし

家族からやさしくされて老いを知る
ここは過疎子供の声を恋しがる
エレベーターあればと思う五階建て
ベルマーク集めた頃は元気出た
村中を集める所信表明日

鳥取県　山下　節子

こんなんじゃなくて何かが違う　今
どこをどう間違ったのかそこはアカ
雨降りの抜け殻手も足も溶けた
ハッカ飴舐めて一瞬の超人
足音を残しカシオペアは消えた

松江市　石橋　芳山

まな板のリズムで愛は成就する
大陸になってほしいとプロポーズ
陸だったような気がする亡母の胸
熱さまシート貼って貴男に逢いに行く
お味噌汁今朝は濃い目で妻の乱

松江市　藤井　寿代

脱コロナ超ピッカピカ一年生
一年半待って面会母笑顔
千年の楠に寄る熱田神宮
桜さくら孫五人との旅楽し
習慣は恐ろしマスク外せない

松江市　松本　知恵子

出雲市　伊藤玲峰

美術館心に御酒落して帰る
生かされて独り遊びの五七五
バス仕立て川柳塔まつり懐かしい
よく聞いて学べと耳が二つある
翔平くんよ孫に良く似て可愛いいよ

岡山市　大石洋子

マスク丸投げ自己責任にそれどうなん
マイナンバー数字で呼ばれそれどうなん
キャッシュレス財布いらないそれどうなん
原発の寿命を延ばすそれどうなん
影薄くなってく私それどうなん

岡山市　工藤千代子

曇天が続いて棘が抜けません
たっぷりと暇だ乾かない水たまり
人波に潜る地下街行楽地
本屋覗こうか病院へ行こうか
清張と知恵競べする午前二時

岡山市　丹下凱夫

酒を飲む仲間つぎつぎ死んでゆく
友の死にへこんでばかりいられない
マスキングテープで飾る僕の粗
五百羅漢の誰の顔にも似ていない
納豆の糸が自慢の髭に付く

岡山市　前田恵美子

春休み孫の昼食忙しい
孫娘好きな英語と踊る春
千年の時を見つめて桜咲く
タンポポの首飾りした幼い日
梅の花青い小さな実と変わる

笠岡市　藤井智史

愛の回線　シ　シバラクオマチクダサイ
旗日など知らない　ｅｖｅｒｙｄａｙ介護
めでたいはおつまみ　ビール三杯目
ストレスの浄化　喉焼く酒を呑む
全国大会　脇取をする夢

岡山県　髙岡茂子

菜の花が散歩に誘う川の土手
介護明け友との旅は喋るだけ
マスク外し外出前にメーキャップ
今年こそ作ってみよう桜の茶
現役を退いて気付いた花の色

岡山県　藤澤照代

老い集い褒めて褒め合い笑い合い
萎む日も開く日もありわたしです
五十年水と油がよく混ざる
良い国にしたい一票入れに行く
喋るほどこじれ黙れば誤解され

松山市　大内せつ子

番号札握ったままで骨になる
片えくぼのままで大人になりました
樹海には美しい虹湧くのです
さみしいねカラスがいなくなった森
欠けたハートだってすこしは揺れますの

松山市　栗田忠士

畑仕事今日も夫婦の四分音符
訥弁ではあるが信頼がおける
エコ派だが電気無しには戻れない
お隣の桜で済ます花の宴
掘りたてを茹でた筍なら美味い

松山市　柳田かおる

ピカピカの孫の笑顔にアリガトウ
慌てたりしないいつでも自然体
葉桜になって落ち着きとりもどす
なんだって見えるスマホの小窓から
泥んこ遊びできなくなっている大人

今治市　永井松柏

母の忌に母の愛した胡蝶花(しゃが)が咲く
後期高齢これから僕のラストラン
免許更新3年老けた顔がある
帰省子に免許返納迫られる
密談の跡だな部屋がキナ臭い

今治市　安野かか志

うんちくを喋りだしたら只の人
父さんの轍を探す霧の中
雑草の元気が覗くアスファルト
れんげ田の見ている夢は黄金波
霊峰を白装束が春にする

西予市　黒田茂代

四センチ先に手の届かぬ不便
動かぬのは体走り回っている思考
読み書きへストップかけてくる痛み
黒雲の間から日の射すこともある
人の木に寄り添い生かされています

西予市　西田美恵子

天気雨心変りを問うたとて
あの時雨が降っていたらとふと思う
任せると言うて結果が気に入らぬ
通帳のこれ本当に利子ですか
どこにでもある幸せで五十年

土佐清水市　辻内次根

畳には箒の音が懐かしい
形あるものが壊れていく時間
何時からだろう海鳴りが聞こえない
プッシュと一缶タラの芽の天ぷら
シンクの渦ゴーと一日が終わる

（三谷松太郎さん、川﨑ひかりさん、小畑定弘さんは42頁にあります）

菠薐草の花 ⑥

野沢省悟

「川柳触光舎」主宰

忘れたりしない青虫だった頃

柳田　かおる

我家に鉢に植えたみかんの木があり、春からは外に出している。すると毎年揚げ羽蝶が卵を産む。やがて青虫となり蝶となって飛んでゆく。青虫の育つ姿をみていると楽しい。葉をいっぱい食べた後、のんびりと陽を浴びている姿をみると、蝶になって舞っているときより、この青虫でいる時の方が幸せではないかと思ってしまう。我々が子供の頃を忘れないのは、たぶんこの青虫のようだったからではないだろうか。

跡形もない実家の鍵を持っている

太田　扶美代

作者のように、今は存在しないものの鍵を持っている人は多いように思う。僕も昔乗った車の鍵を今も持っている。捨てようと思えばいつでも捨てられるのだが捨てない。その鍵に特に愛着や思い出があるわけでもない。作者にとって、実家の鍵ということで郷愁などいくらかあると思うのだが、この句からそれはあまり感じられない。いつ捨ててもいいと思っているはず、物欲とは違う、自分の人生の欠片みたいに感じてしまっているかもしれない。

せめて息遣いメールより電話

原田　すみ子

電話はこちらが何処に居て何をやっているかに関係なくかかってくる、やっかいといえばやっかい。その点メールはたいへん便利である。この句を読んで、昔むかしのことを思い出した。妻がまだ彼女だったころ（彼女の家ではいつも母がすぐ出る）、電話にたまたま彼女が出た。その時の電話の声、そして息づかい、そして緊張とヨロコビが思い出された。今の若者はその感動を知らないだろうナ。ちょいと迷惑かもしれないが、タマには電話もいいかもネ。

効能書自信なさそう細かな字

上出　修

「細かな字」の一語に、実感そして共感を覚える。隣の句〈読めなくていいのですよと約款書〉も同様で、やはり細かな字。そして困るのが電化製品などの説明書。わかりづらい文にも腹が立つが、何であんなに字が細かいのか。アレは老人に対するイジメに他ならない。

罰金稼ぎしているような取締り

奥澤　洋次郎

腹が立つといえばこの句も。僕は過去、一時停止しなかったと捕まりました。白バイが塀に隠れてひょいと出て来ました。停止しなかったのは悪いのですが、隠れていなくたっていいと思う。白バイのあんちゃんにいろいろと文句を言いました。ところが敵はさらに上でした。ひと通り聞いて「もっとありませんか」とほほえんだのですヨ。マイッタ。

恥ずかしいところが増えて恥ずかしさが消える

谷口　義

見てる様で見てない見てない様で見てる

川島　良子

この二句、人間のある一面を、角度を変えて観ている句。他人の恥ずかしい所は、よく見なくても見てしまう。自分の恥ずかしい所は見えてるけど見ない。全く自分勝手な人間。であるため面白い。そしてそんな自分と他人を楽しく眺めるのが川柳。

英語 de Senryu㊳

麻生葭乃 『福壽草』 (1955)

英 訳 吉村 侑久代 Kim Horne

子を置いて朝湯へ来るも五年ぶり
leaving children at home
I take a public bath
for the first time in five years

愚痴を聞くまも忙しい四本針
listening of complaining
my fingers are busy at work
with four knitting needles

---

leave 残す 置いておく *at home* 家に *public bath* 銭湯
for the first time in ~years ～年振り *listen* 聞く *complain* 愚痴をこぼす
finger 指 *busy at work* 仕事で忙しい *knit needle* 編みもの針

～リバーウィローのため息～㊽ 郡山直(なおし)(東洋大学名誉教授)先生の創作活動③

郡山直先生再度登場です。先生の活動はすでに『川柳塔』No.1124 (2021.1) ①、No.1126 (2021.3) ②で紹介していますが、96歳の現在も反戦短歌を詠み、今もなお日英語で詩を書く日々です。今回紹介する「詩のパン」は、英語で *A Loaf of Poetry,* 中国語で「詩歌的面包」と訳されています。郡山先生は「詩のパン」で、創作の心、詩人の作品への向かい方を、ユーモアを込めて、まるで絵本の頁を開くように述べています。私は常に創作への指標としてこの詩を、心の中で膨らませています。

経験という粉と・インスピレーションという酵母菌を・混ぜて・愛情をこめて・よくこねなさい・それから　力一杯たたいて・しばらく放っておきなさい・それが自分の内側からの力で・大きく、膨らんでくる迄・それから　再びこねなおして・丸い形にして・あなたのハートの・オーヴンで・焼きなさい

You mix/ the dough/ of experience/ with/ the yeast/ of inspiration/ and knead it well/ with love/ and pound it/ with all your might/ and then/ leave it/ until/ it puffs out big/ with its own inner force/ and then/ knead it again/ and/ shape it/ into a round form/ and bake it/ in the oven/ of your heart

誹風柳多留一三篇研究 34

小栗清吾・細井龍夫
伊吹和男・高野範雄
山田昭夫
清　博美

270　**百八十四文さんまの膳へ出し**

小栗　「さんまの膳」は米搗きに出す食事だと思うが、「百八十四文」がわからない。米搗きの手間賃がどうなっていたか調べが付かなかったが、それにしては高すぎると思う。ご教授下さい。

細井　『江戸庶民風俗図絵』（中公文庫）に、搗屋の春賃がありました。一斗つくのに、十八文から段々高くなって「近ごろは六十四文、七十二文などにをの〳〵春する也」と志賀忍著『三省録』からの引用があります。一斗を六十四とすれば、三斗春いてもらえば、百九十二文になります。一斗いくらで契約したか、何斗春いたかで百八十四文が導き出されて来そうです。高すぎることは無いのです。

伊吹　細井氏説成る程と思います。しかしながら、大道賃搗きで、三斗もの米を日常的に搗いたのだろうか？

清　これも分からず。

271　**おかべやハ仕合ものと奥でいひ**

小栗　「おかべ」（御壁）は「豆腐」の女房詞。「豆腐屋は幸せ者だ」と御屋敷の奥向きで評判になっている情景と言えば、いうまでもなく仙台高尾の句。以下贅説は要しまい。

　御出入のとうふ屋かうらやましかり　七22

清　賛。

272　**三国を雪ころはしでおつふさぎ**

小栗　雪転ばしは、雪の小塊を積雪の上に転がして大塊にする児戯（「江」）。

　「三国」と「雪」だから、雪を戴く富士山を詠んだ句と思う。「おつ塞ぎ」の語感から見て、琵琶湖が抜けて富士山になったという伝説を踏まえたものかもしれない。

　近江から出て三国の地をせばめ　安九礼1

清　賛。三国は駿河と甲州と相模。

273　**末世迄あかしの浦で目をさまし**

小栗　朝起きの呪いの歌「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島隠れ行く舟をしぞ思ふ」（柿本人麻呂）の句。この歌を人麻呂が詠んでくれたお陰で、末世（のちの世）の人まで、早朝に目を覚ますことが出来る。

　てう法なものをあかして詠せられ　安五礼1

清　賛。

274　**一ト御殿斗古郷へはな見なり**

小栗　桜で有名な上野・寛永寺の敷地は、藤堂・堀・津軽らの大名屋敷があった所。川柳では専ら藤堂家が詠まれており、主題句の「一御殿」も藤堂家のこととしていいだろ

う。藤堂家が上野に花見に来れば、いわば故郷へ花見といった案配だというのである。

ただ、上屋敷跡を「故郷」と言うかどうか。「上野」の地名は、藤堂家の本国である伊賀上野の地形に似ているところから名付けられたとの説がある。「又上野と云は、此地始は藤堂和泉守殿やしきなり。草創のころあけさせられ、その地を染井に給ふ。藤堂在城伊賀国上野は三方より上りて小高き山なり。その土地に似たるによつて上野と呼」（「江戸砂子」）。この説を踏まえていると考えれば「故郷」がぴったりすると思う。

ついそこに古さとの有やしきなり　天二義2

清　賛。

275　**五百人げいの背中を見てかえり**

小栗　芝居小屋の「羅漢台」を詠んだ類句多数の一。「五百人」から「五百羅漢」を連想させて「羅漢台」を出し、羅漢台が舞台の向かって左手奥にあって、観客は役者の演技を背中から見ることになることから「芸の背中を見て帰り」と。

後ロにも目の小千ある大あたり　傍一48

清　賛。

276　**はかま礼たとへハ一ッ騎にてもすみ**

小栗　袴礼は、上下をつけないで、袴だけでする年始の礼（主題句引用）（「日国」）。

上下を着けない年始は略式だから、お供も連れない「一騎」で済むという意かと思う。ただ、「たとへハ」（「例えば」）か。あるいは別の読み方があるか）の語が何のためにあるのかわからない。文句取りではないかと思うが、謡曲にはなさそう。

山田　賛。例えば云々は軍記あたりにありそう。

清　賛。文句取のようだ。

277　**ちよきで小便千両も捨たやつ**

小栗　お馴染みの句で贅説を要しまいが、猪牙は細身の快速船でそれだけに安定性が悪いから、船上から小便をするのは難しいが、それを見事にやってのけるのは、猪牙で吉原に通い詰めて千両も使い果たした奴に違いないと。「千両」は日に千両の金が動くとされた吉原の縁語。

ひらり乗ル猪牙ハ元卜の手の入たやつ　五13

清　賛。

278　**やくそくの首とりに行大三十日**

小栗　大三十日の掛け取り。「首にかけても払いは済ます」などと言っている奴に限って怪しいもの。「では、約束の首でも取ってくるか」と出かける掛け取り。

大三十日首でも取ッて来る気也　三5

清　賛。

279　**つむりからまくる朝寐ハ女也**

小栗　朝寝坊を起こすのに、寝ているのが男の場は夜具を尻から引っぺがすところだが、相手が女性の場合はそうもいかず、頭の方から捲って起こす。日常よく見る光景を細かく観察した句ということか。

ただ、読み方によっては、女性が朝寝の人を起こす場合は、男が起こす場合と違って、優しく頭の方から捲るともとれる。これはこれで句になるとは思うが、やはり前説か。

おきてくりやれと朝ねを母おこし　安六礼5

清　前説賛。

自選集

柳歴も同人歴もまだ未完
ひょうひょうと鈍感力で生きて来た
耐えて勝つ男の目差しが熱い
妻は現職　金婚式まで四年
主夫歴を誇ることなどありません

小島蘭幸

マスクしている間にみんな歳をとり
マスク外すとなんだか気分落ち着かず
花粉症まだまだマスク外せない
今年突如ボクを襲ってきた花粉
俯くと水洟ぽたり垂れてくる

村上玄也

πの奥深く身動きさえ出来ぬ
仏事です榕は毒を出さぬよう
もう悪さしません毒きのこの嘘
進化したかな汽水湖で生きられる
火も石も木もマンモスと戦った

森山盛桜

栞師のこと

挨拶に出向いた八尾の社長室
栞主幹は七宝製菓の社長さん
情熱のすべてで塔を輝かす
次の世も水鶏(くいな)のご恩忘れない
それにつけても美与子夫人の慕わしや

八木千代

春寒し背骨骨折した不覚
コルセットに守られ縛られている
入院初日から退院の日を数え
五体動くこの幸せに気付かされ
友達も天も味方をしてくれる

山本希久子

明日の空どうあろうとも子を放つ
蝶蝶になって葉の花飛び立った
ただ独り咀嚼する音聞きながら
君が居る遥かから差す薄明かり
高額の本を見上げてまた帰る

居谷真理子

目の前の景色ばかりの世界観
気をつけろここから先はけもの道
良い日だねポテトチップス食べながら
時どきは本音を漏らす影である
自分史にこっそり埋めておく地雷

川上大輪

高齢で九割引きの医者ハシゴ
老け方に大分差があるクラス会
毎日が自己新記録です寿命
口と胃のほかは力のない体
散らかった書斎私のパラダイス

北野哲男

集団になればプーチン倒す蟻
わたくしが睨めば石になるアナタ
戦争に狎れてお茶の間評論家
時間ならたっぷりブリタニカと遊ぶ
昆虫食に慣れる時代はすぐそこに

木本朱夏

あなただけに咲きましたよと言う桜
満開の桜を胸に持ち帰る
作業着に軍手キリッと草むしり
脳天に松ぼっくりの直撃弾
浮気ならまだまだ出来る八十歳

新家完司

なれそうでなれない友の知恵袋
麻雀仲間まだまだすてたもんじゃない
親友と悪友多分同じ人
不自由なし小学校の算数で
銀行で背伸び体操しています

高瀬霜石

満開と大型鯉の姫路城
温度差に右往左往をする卒寿
君子蘭花芽ニョキニョキ春謳歌
桜見頃念願叶い彬の碑
鼻風邪か花粉かややこしい季節

津守柳伸

くたびれた羽繕いながら飛ぶとする
お隣はわたしをお婆さんと呼ぶ
寒暖差激し気まぐれ春の神
曾孫三歳早々とコケティッシュ
わたしって忘れ上手か下手なのか

西出楓楽

詐欺だとは出世払いは言わないね
補助金の種類で詐欺の手口ふえ
人情の研究はした詐欺の針
欲という罠を隠した詐欺の針
投票所詐欺にかからぬ筆づかい

仁部四郎

百歳が例外だったのは・む・か・し
蒔かぬ種は生えぬ政財官汚職
ハグをして米寿の妻を驚かす
制服は軍手地下足袋菜っ葉服
いい喧嘩だった絆が太くなる

平田実男

梅櫻つがるの春が開花する
蕾から花筏までサクラかな
観客の笑顔が好きで咲く桜
百年の櫻元気は負けてない
花筏風に逆らう事もなし

福士慕情

美しく咲いても皆んな枯れるのだ
魂がこわれるあの日あの時あの街で
嬉しいとすぐにカンパイしたくなる
祈り長く続く被災地の空へ
大空よ美しい儘いて欲しい

松本文子

WBC侍ジャパンに居た武蔵
ブラボーと大谷さんへ大ジョッキ
シャンパンかけもったいないが世界一
ノーマスクへ整えている化粧品
口喧嘩頭の体操として夫婦

三浦強一

川柳塔柳箋

3冊　送料共　1000円

事務所あてお申し込み下さい。

川柳塔

（つづき）

ちゃん付けで呼んだらえらい叱られた
男児ならどんと行こうぜL寸で
なんであれ右むけほいはさせないで
茹で足りぬ恋というのも昔した
この想い卍巴じゃ分かるまい

高知市　三谷松太郎

誰とでも仲良くなれる花の下
四ツ葉探しひと時春の野に遊ぶ
本音書く為に残している余白
新緑に囲まれ際立つ薫風碑
栞碑と自撮りショットの花見客

東かがわ市　川﨑ひかり

今はもうヘルパーさんが命綱
残高と相談しての余生です
アナログな恋が切手を貼ってくる
恋をして可笑しいですか喜寿ですが
年金を削る政治が許せない

阿南市　小畑定弘

句集の森

『福島鉄児遺句集』

福島鉄児

相槌へ話だんだん嘘になり
停電へうどんをすする音がする
どの鞄見ても盗られたのに似てる
あんただけ酔うていったいどうする気
十二月ネオンも癪なもののうち
雪の降る音を聞いてるしまい風呂
水に映って見れば我家も美しく
こおろぎよ俺も泣きたい夜なりけり
返事出来ぬのに歯科医師よく話し
てれくさいけれど見ておく股のぞき
蚊帳吊って寝てますここも大阪市
膝に手を置いて頑固な父であり
いのちとは何かと思う歳になり
結論を明日へ持ち越す酒になり
どう言うてやろかと受話器持ち変える

（昭和50年12月9日発行、弓削川柳社）

温故知新

田中正坊川柳句文集『ペンシル』から

たのしみは校了のペン摑いた時
コピーですお安くしますルイビトン
名場面なかった父の一代記
あの日からもう無理はせぬ信号機
欲みんな捨てると消える生命の火

古希の坂（一九九三～一九九五）

くたびれた軍旗が父の陣にある
図らずも同年だった名士の訃
しなやかに妻が手綱を握ってる
土笛が鳴るとくつろぐ埴輪たち
血縁は僕だけ兄の三回忌
冬銀河　多喜二が逝きて六十年
予定ない日があってよし春暦
父はまだ軍隊手牒持っている
滅びるは美学にあらず朱鷺の墓
古希古希と騒いでるのはお父さん

木本朱夏選

安来市　原　徳利

風が吹く前に一冊読み終える
玉子焼くたかがされどと卵焼く
花の下莫蓙を敷きましょ歌いましょ
焙煎の薫りおしゃれな雨が降る
爛漫の老いには老いの春がある
喧嘩する女が居るから生きられる

福山市　新庄芳春

生き様を勝手に推理訃報欄
平凡の言葉の重さわかる歳
アルバムの隣の友は出世した
初対面敵と味方に仕分けする
クラス会千紫万紅生きた道
絶頂期過ぎてのんびり遠花火

大阪市　森田遊子

雨の午後コーヒー過去を連れてくる
夫婦漫才もうライブではできないね
楽しんで生きや遺言守ってる
頼み事される自分はちょっと好き
リュックサック背負うと地図が読めてきた
鳥の名を知れば目線が上を向く

加古川市　石賀邦子

脇役になって出直す昼の月
貧しさは友を妬んでいるわたし
寛解と言われてないが生きている
微笑みで隠しつづける傷がある
脳トレをちょっとやり過ぎノイローゼ
自分らしく生きていることほめている

佐賀県　真島久美子

傷痕を何度も消して花手水
影だけが伸びてなんにも変われない
まばたきの数で測っている真意
肯定も否定もしない溶き卵
七癖はぜんぶ紙風船の中
君が来るまでは白詰草を編む

神戸市　城戸誓子

お天気が良過ぎひとりは淋しくて
「ごめんね」と花の絨毯そろり踏む
フキワラビツクシタケノコ春メニュー
陽も風もスパイスになる春ランチ
桜よりたんぽぽが好き子供達
くるくると疑問符浮かぶなぜなぜ期

神戸市　みぎわはな

姥捨ての山へ道草遠回り
鼻薬たっぷり効かせエンマ様
もういいかい まあだだよーとまだ生きる
もう少し見たい食べたい話したい
還暦の娘よ人生はこれからだ
熟成し本当の味は傘寿から

山口市　中前幸子

公園のブランコ別れ言葉が揺れている
ゆっくり歩いて自分の影ひろう
こころ鎮めるバッハのクラシック
信号を見守り眠らない街よ
真っ赤な苺口いっぱいに微笑めり
海月ゆらゆら幽玄の時を描く

和歌山市　倉橋悦子

再びのハグいのちがけウクライナ
叫んだら誰か助けてくれますか
コオロギが未来の食料難救う
無理しても無茶はするなと天の声
カーネーション見ると重なる母の顔
お日さまと対話こころの煤払い

交野市　山野双葉

車窓富士遺骨の母と愛でる旅
納骨を終えて六十路の乳離れ
愛犬と共に眠れる墓探し
壊れたらすぐには直せないこころ
猫舌のくせにあんかけうどん好き
新色のルージュを買ってリスタート

池田市　倉本一弥

大阪のおっちゃんもアメ持ってるで
いつからかそろりと家内　家のヌシ
「ハイおまけ」その一言に客が寄る
パソコン睨み脱がなくていい医者が言う
オーマイゴッド「保存」忘れて「削除」キー
朝の天国布団の中の十五分

東大阪市　青木隆一

幻は指の透き間をこぼれ落ち
美学など酒の肴になるものか
煮え切らぬ男が好きで苦労して
声明に心洗われ前を向く
水無月は酒の肴に雨の音
卵焼き機嫌ひとつで変わる味

神戸市　米田　利恵子

熨斗袋たくさん買って春ですね
退屈の殻を抜け出し蝶になる
春風を招く玄関から掃除
標本木の二輪に日本浮かれだす
冷蔵庫に任せた春の五目飯
肉じゃがも春人参を待っていた

神戸市　田本　古鈴

何度目の桜だろうか飽きもせず
造花には心がないと思いつつ
何もかもうやむやにする今日の雨
哀しみはあるべきものをなくした日
悩んでも心の景色いつも晴れ
生きている明日はあの木に叫ぼうよ

尼崎市　清水　久美子

松月に会いに造幣局へ行く
木の芽和え出来る素材を手土産に
朝採りの蓬で作る草団子
巣作りのツバメに取らぬ身かじめ料
大らかな筆致がナイス鉄斎展
ポイントで補う食費交際費

尼崎市　山本　百合

揉め事に口をはさんだ後遺症
肩の荷をひとつ下して松の膳
討論に勝たねばならぬ針ねずみ
すかすかの骨が支える自尊心
飛行機雲淡あわあわと恋終る
思い出を手繰り寄せてる春枕

三田市　生田　えい子

崩れゆく脳と体に要る諭吉
朝一の決意むなしく夕日差す
生き方を時々レシピ見て正す
ハイネック皺をかくすも肩が凝る
膝合わせ白寿の人の知恵借りる
亡母に似た顔に色塗る春日和

三田市　野口　龍

笑顔でしたおみくじ二つひいた時
プライドを横にずらしてバイキング
別れても時折り手紙書いてます
見あげれば綿菓子ひとつ青い空
今夜も一人私は酔って夢まくら
切手一枚どこでも届くありがたさ

高砂市　裕木　るい

カタツムリ喜怒哀楽を渦に巻き
母は子を忘れ子は母想い寝る
妻の留守何故か背中が痒くなる
かあさんと夫に呼ばれて春の鬱
老眼鏡かけても空気読めません
褒められて真に受ける犬受けぬ猫

宝塚市　岸田万彩

ひきこもりやっと解消さす句会
倍増の所得待ってるうちに死ぬ
ヒーローの夢二時間の西部劇
糾弾をされて気付いた古いミス
なんとなくロシアめいてる妻の言
八十路坂詐欺も賄賂も知らぬまま

尾道市　小川道子

自慢めく話のあとの陰の声
あの台詞メッキと知ってからの鬱
一粒の力寄せ合い百馬力
七光り無くていつもが自然体
草臥れた服が一番よく馴染む
悲喜劇を演じ人間らしくなる

広島市　松尾信彦

丹精と大中小の無人市
父の日に母の根回し恙無い
段取りに時間のかかる第二幕
長生きのリスクを趣味でチャラにする
知恵袋昭和古くも捨てがたく
ユーモアが人をまとめて春にする

美作市　岡本余光

転寝が増えて耄碌気にはなる
テーブルの文具が邪魔な夕餉時
新聞に支援の文字が美しい
冗談も言えぬ男に一家言
スッピンの人を羨む化粧代
春のうつ元気よすぎる庭の草

奈良県　室田行久

捨て犬が俺を仲間としっぽ振る
新芽踏み強く育てる麦畑
よく食べる多病息災今が旬
夫婦喧嘩どちらも折れぬ根比べ
物忘れうっかりミスが日々日課
なんとなく近寄りがたい場所と人

和歌山市　佐藤まき

桜咲く今年こそはとお城まで
咲き誇る花に酔い痴れ人に酔い
花に遅れず雑草達も目をさます
逞しいこんな小さな花咲かす
雑草と言わせず名付け愛でる人
朝ドラは佳境双葉より芳し

富士見市　中島通則

ポストコロナ　マスク外せぬ花粉症
三密を避けて仲間の輪が萎む
尺貫法廃止されても一升瓶
就寝中二度も自然が呼びに来る
職業欄柳人とでも書いてみる
花丸付きホームの母のお書き初め

生駒市　饗庭風鈴

豆つまむ手を止めて嗚呼花吹雪
桜守そんな生き方できたなら
百年の時間を抱いて逝った母
限りある時　細胞全部研ぎすます
あの道をまっすく行けば別世界

生駒市　永田芙美子

古里は山と河のみそこにある
鈍行に乗ってゆっくり見る桜
蒔かないと畑は草で駄々こねる
喪服脱ぎ畳む手止める雨の夜
旅鞄薬と紅と気楽詰め

和歌山市　北原昭枝

通り抜け見事に咲かせ桜守
若草の匂う日だまり猫昼寝
若かった日を懐かしむ絵の具皿
三文判宅配便に役に立つ
明日より今日が若いと老いてゆく

和歌山市　定松宏枝

長生きをしても未達のことばかり
生きるとは時の流れに逆らわず
生い立ちを話せば長いドラマです
お互いにほんの少しの思いやり
がまんせずおいしく食べて日日平和

和歌山市　鍋嶋澄子

杖ついて桜トンネル弾むこころ
春彼岸仏の客をおもてなし
花の下走りまわった無垢の頃
老いを鼓舞クロスワードで鍛練す
コンサート沖縄の風ビギンから

和歌山市　西川千鶴

ペットロス分かってくれる友がいる
ゾウガメになりたいなんてどうしたの
老い二人戯け楽しむ四月馬鹿
診断書書いて下さい夫源病
御喋りな父と無口な母が添い

和歌山市　まつもと　もとこ

カラメルの焦げも楽しくなるプリン
世話好きのオバチャンになり嫌われる
草も木も根性つけて笑う春
職場には「ファイト一発」差し入れる
アレルゲンは君か　左胸が痛い

海南市　山中閑

採れたてのひじき山盛り一仕事
予後のこと頭をよぎる菜種梅雨
ジャムにしよう苺手頃なお値段に
久し振りに逢えば遣らずの雨が降る
音感の良さ爺ちゃんに似たのかな

和歌山県　三枝眞智子

小兵でも勝てる相撲の面白さ
桜もち祖母の自慢の味がする
腰伸ばしエイエイオーと天を衝く
ふきのとう田舎暮らしの旬の味
ゆっくりと暮らす古民家独りぼち

鳥取市　上山一平

車窓からポツンと高い鯉のぼり
老介の支えにピンク桃の花
空耳に疑い深くなる茶の間
童心にかえるお祭りリンゴ飴
白壁の鏝絵左官の腕光る

鳥取市　大前安子

春の風聞いてと言える友を連れ
暮らし方△ばかり自由主義
傘寿です躰点検四股を踏む
友だから本音の土産置きに来る
墓守る娘の両手借りながら

鳥取市　狭武紫陽

桜にもおませ晩生もある個性
萌えだした草に丸葉やとんがり葉
山生まれＤＮＡは山を恋う
春の風物申すのか吹きやまず
ゆったりと無事を見届け日は沈む

鳥取市　山野すみれ

散るまでは咲く事ばかり想う日々
もてなしは桜の花と甘酒と
頂上を目指して低い山登る
少しだけ役には立っているらしい
雑草と呼ばれているが花は咲く

倉吉市　宮田風露

桜並木散る花びらを追うひ孫
老い忘れひ孫と遊ぶすべり台
気分転換今日は草取り止めました
春寒にまだまだ冬を仕舞えない
準備よし後は煮込んで夜カレー

倉吉市　若松由紀子

もの忘れこころあたりを探す日々
胸に抱き投稿ハガキポストまで
八十年洗って落ちぬシミ多し
美容院違う私になりたくて
雰囲気にうっかり口の滑る夜

米子市　川本美津子

問いかけて花に元気を貰う朝
社長でもクラス会ではちゃんと呼ぶ
雪の日は煮込みうどんで暖を取る
春風に声かけられて散歩する
鏡見て優しい顔で友と会う

鳥取県　田中重忠

元日と三男の葬儀重なった
記念写真みんな平和な顔をして
あと少し生きると白寿の誕生日
九十六まだ噛んでいる蛸の足
九十六に気合をいれる杖の音

松江市　中筋弘充

敵地攻撃つまりは仇を討つのです
尾骶骨の存在意味を知る痛さ
嵌め殺しされて悔しい飾り窓
どん底に鞍馬天狗が住んでいる
盲腸を盗られたくない八十二

津山市　髙橋由紀女

思い出の写真が止めたもえるごみ
腰下ろす場所決まらないむこう脛
世の人に笑顔を送る山ざくら
川柳と遊び泣かされノーヒット
一粒の種と結んだ青い空

広島市　森田博之

当てもなくラジオ体操今朝もする
うっかりを微笑み返しカバーする
月一の医者と元気の話する
胸の内にあるもの何れ噴火する
笑うけどやはり残した蟠り

尾道市　小畑宣之

スポーツマン乱れた髪の逞しさ
「初めてのおつかい」どこへ行ったかな
雪激し新聞届く朝六時
八十路坂しっかりやろう出来ること
履き心地良い靴履けば鼻歌も

尾道市　村上和子

ふる里の風に癒やされまず一歩
新天地へ巣立つ子の空日本晴れ
気分一新春を着てショッピング
カーテンもパステルカラー春の色
新築の病院まるでホテル並み

府中市　岸田武

新幹線満開を串刺しにして
目を入れたダルマ転んだままでいる
彼岸法座講師は孫と同い年
玉子生む機械が哀れ殺処分
考えておくとは望みないのなり

三次市　伊藤寿子

傘寿過ぎのわたしは店の招き猫
白衣に赤のエプロン若く見せ
歳ですが猫ですよとボケておく
「だってだって」3歳から店番していたよ
背すじピンソプラノの声まだ出ます

山芍薬あっという間の白でした
デパ地下の花見弁当ひと周り
ハチマキを外して花の下にいる
春色にしました今朝のマグカップ
和やかにこれで良かった家族葬

松山市　郷田みや

幸せは汗もお金も足りている
いくつ壁越えたのだろう向こう傷
認知症のまだ手前です物忘れ
春なのに前頭葉はまだ休み
ファッションのひとつに使うサングラス

大洲市　花岡順子

年波の波を断ち切るウォーキング
相槌の「ああそれそれ」が物忘れ
語り部の叫ぶ心に聞き浸る
もて囃され踊ってきたも又事実
水溜り昔なつかしケンケンパ

唐津市　前田廣幸

田の畔の蛙に呼ばれ立ち止まる
父と子の思い出語る捕虫網
子に代わり猫が夫婦を出迎える
アウトローぶって飼猫傷だらけ
少女らに恋愛ごっこさせるチョコ

宮崎県　惠利菊江

年季もの持ち手ほど良い缶バケツ
足湯してふやけのぼせて笑いの句
手間いらずブーゲンビリアたくましく
立ち姿見返り美人ユリの花
夜ふかして右脳左脳もごっちゃまぜ

那覇市　宮すみれ

川柳で人生航路進み行く
雨宿りふれ合う肩にしずく落ち
桜散るセーラー服よサヨーナラ
強くなれ試練与える神の声
どの花も凛として咲く自己主張

豊見城市　あらさくら

春と桜離れられない名コンビ
小公園雨も静かに新学期
喜怒哀楽母にも欲しいふと思う
思い出を残したままで母眠る
笑顔ひとつそっとみがいておきましょう

弘前市　小山内真由美

このまま駆けていく赤い靴抱いて
いつの間にアナタわたしに紛れ込む
虹をもてあそぶ　陽炎の悪戯
今更の恋にも酔いしれる目眩
罪の意識を柔らげる雨宿り

船橋市　中嶋常葉

小田原市　虎澤昭久

散歩道季節移れど同じ草
サクラ色青空攻める春の陣
風は春アリの一匹右ひだり
何よりの酒のツマミの野球漬け
赤いハムやはりこれだと昭和の目

横浜市　巌田かず枝

本好きの孫の年間二百冊
サツマイモ親子三代好物で
確かめず手紙の誤字に赤面す
七十五寝具ピンクにぐっすりと
新聞の明るいニュース探す日々

横浜市　加藤佳子

四年ぶり解き放たれて花の下
逸速くマスク外して春に酔う
様子見のマスク外さぬ人の群れ
ノーマスクルージュ一本お買い足し
忘れてたお洒落心に火をつける

神奈川県　小田幸子

この場所でうかんだ名句なんだっけ
記念写真笑顔できないお年頃
思っただけなのにこちらを見る子犬
気がつけば私のイスに眠る犬
愛犬が調律三度に返事する

東京都　宮田栄子

萎れても捨てぬ退院祝い花
四月ですスーツはもはや捨てましょう
目覚ましはもう要りませんリタイヤで
清謐な姉妹の如く二輪草
散策で花韮を知る春の土手

豊橋市　小松くみ子

木彫の集まりみんな寡黙
暖冬でだまされました春の花
五〇〇〇歩の数字でるまで遠まわり
貧乏ゆすりいつも地震と間違える
コインランドリーデビュー敷布団

白河市　鈴木たけし

老いの身に浮力の効き目知るお風呂
浦島の気持ちを醸す里の基地
ヘルパーさん時間通りに来て帰る
ちょっと嘘入れて散髪屋で話す
花前線速度違反のように咲く

大阪市　今村和男

盛り上がる桜の下に知らぬ顔
そういえばここにもあった桜の木
花びらふわり昭和の春を超えていく
廃校の老いた桜にまた若葉
葉桜が若き兵士を出迎える

大阪市　岡田恵子

おままごとみたい独りの夕支度
真夜中に爪を切ってる人恋し
百均の笑い袋を抱きしめて
愚痴つめてはちきれそうなエコバッグ
浪人の名前返上華になる

大阪市　尾崎文子

アナログの母の言うことごもっとも
原発もあちこち痛い高齢者
お彼岸に御先祖さんも戦争反対
マスク廃棄自己責任の春がきた
春の花植えて家にもおしゃれする

大阪市　阪本秀子

マゼンタのキャリーバッグで旅グルメ
オープンのカフェに我が街活気みち
家守るいうてもヤモリ気味悪い
ハッピーが増えて憂いが消え失せる
価値観に個性あふれて良いのです

大阪市　白谷よしみ

切り株が指定席ですティータイム
モダンジャズピアノが招くレトロビル
忘れてる見えないトゲが顔を出す
笑ってる自画像今も仮面つけ
さくら散り猿回し見る西の丸

大阪市　滝井えみこ

「はじめまして」妻の手にぎるケアハウス
幸せの分だけベルト緩めてる
母を聞くただそれだけの古スマホ
赤飯にぎり二つ買ってる普通の日
鍵ひろい途方にくれる人思う

大阪市　田原康雄

悠久の奈良大仏に孫お辞儀
仁王像孫達ポーズボクシング
奈良公園弁当鹿と知恵くらべ
ポカポカ陽気鹿煎餅かドングリか
疲れ出た三日も続く足の張り

大阪市　中村峰子

おせっかい半分ぐらい丁度よし
行動とことばちぐはぐ楽しそう
「年だから」すぐにブレーキ悪い癖
ペットロス隣りの猫を手なずける
運が良い思える時が偶にある

大阪市　松田聰

けしからん閣議決定増えている
40兆もう話題にもあがらない
統一もエホバもみんな愛をとく
幸せは自分自身で決めるもの
かけがえのない家族すぐそばにいる

梅の香はやさしい思い乗せて来る
草引けば蟻の家族を破壊する
生き延びた命か一つ蕗の薹
有頂天その辺りだけ騒がしい
取れそうなボタンみたいな不誠実

大阪市　森　廣子

眼鏡拭く幸せそこに見えるよう
カルチャーに才能あると誘われる
抱く猫が心の傷の常備薬
同じ事考えていたロダン像
故郷の海の匂いとハグをする

大阪市　吉積栄次

来世では手ぐすね引いて友が待つ
よそ行きの声で電話の妻元気
いい人と言われ生きるのしんどいな
ケーキより清酒一献元気出る
目を閉じて地蔵黙って世を見抜く

堺市　古川光雄

心無いおだてに乗って恥をかき
お勘定そんな頃には居ないヤツ
冗談が通じるうちは呆けてない
うちのじい釣り具一流腕二流
座を沸かす話術の巧みさすがプロ

泉大津市　葛城隆雄

丁度来た各停に乗るぶらり旅
返事ない送信ボタン忘れてる
何もかも加齢ですからむかつくわ
ポストまで歩いただけの今日でした
半袖もマフラーもいる花曇り

泉大津市　助川和美

留守しますチキンカレーありますよ
酔ってません楽しかったと千鳥足
逝くなんて会う約束をしてたのに
白か黒私グレーで生きてます
物忘れ忘れたいこと覚えてる

泉佐野市　樫葉良子

パステルのストール弾む街の春
核心に触れると壊れそうな人
粗挽きの珈琲がいい午後三時
君のこと決め手は笑顔いまもそう
君の横ただそれだけで凪になる

柏原市　神崎江

潔く花が散るのもそれもいい
蹴躓く石に時おり諭される
微睡んで亡母に抱かれる春の午後
細胞のひとつひとつに湧く命
耳朶のダイヤのピアス恋を知る

河内長野市　坂野澄子

河内長野市　穂口正子

桜降る顔も綻ぶ巡回車
老いの目に桜輝き死を思う
町会長挙手してなった渋い方
たこ焼きに粉もん愛がぎゅっと有る
インスタ映え狙いラーメンのびている

吹田市　岩口のぞみ

飲み会を知らぬ若手に酌をする
母上る階段三歩後を行く
断捨離後売れると言われまた迷う
ニュースよりベースボールを見てる朝
春だなぁランドセルが歩いてく

吹田市　西沢司郎

勝ってこそ自慢話ができる今
早咲きの桜眺めてする昼寝
これからと言う時なのに入る茶茶
七十五年付き合う友はまだ元気
焼夷弾空染めた夢今も見る

摂津市　荻布律子

頑張ったご褒美だらけ腹の肉
クマノミのジェンダーフリー先進か
新学期肩肘張らずゆるゆると
電線に音符の如く昼の月
夫に出す明日のパンは値引品

高槻市　三谷白黒

桜咲き入学までは持ちません
早過ぎて花見の予定組めません
血圧と体温計り予定組む
この齢で我慢をしてはいけません
散歩かい返った答えウォーキング

豊中市　石橋優明

五十年モビールのごと過ごしくる
明かり漏る窓辺のような人でした
迷彩模様秘め通す恋心
爪切りのパチンの音で会話する
海技ゼロメートル空気の濃さに目まいする

豊中市　貝塚正子

少女と女同じ景色が違う色
どこでとは分からないけどつけた知恵
着地点見つからぬうち陽が沈む
一目惚れ胸が勝手に乱気流
お高い値ついてブランド薩摩芋

豊中市　齋藤奈津子

春兆し笑いがふえる家の中
最後まで諦めないと神降りる
両隣お向いさんもデイケアー
切手不足たして受け取るラブレター
春の目覚め別れと出会い入り交じる

寝屋川市　長尾千賀

天使二人育てた二冊の母子手帳
子沢山がプライドだった昭和の日
少子化へあの手この手のエンドレス
人生には祈るしかないこともある
令和の世にもきっと微笑む鬼子母神

阪南市　藤岡笑三

秋の杜五色の落ち葉踏み祈る
振った賽良い目出るまで子のまなこ
夢に見る仕事の失敗汗だくに
その人の眉間の皺に歴史見ゆ
山の神優しくきつく五十年

藤井寺市　松井正義

隣の国日本の島を取らないで
この春は素顔で勝負マスクなし
三年振りかくした顔を見せる春
マスク美人街から消えるこの春は
なたね梅雨やはり雨降り気がめいる

東大阪市　青木ゆきみ

看板の「こころの内科」多くなり
すれ違うシトラスの香に胸騒ぐ
木製の指輪みやげと子にもらう
水溜まり踏まないように手を繋ぐ
卒婚は見守ることが愛になる

八尾市　田邊浩三

曾孫たちスマホで大きくなっていく
人生のこれが最後かディサービス
疎開地で手作りバットでした野球
次々と先輩たちが往く早桜
仲人の祝い時計がまだ動く

大阪府　浦上恵子

神様の采配幸せな余生
鉛筆を握ると欠伸出る難儀
亀マーク付けてシニアのヘルメット
捜しもの記憶の底とバトルする
靴箱にスニーカーしか無い暮らし

大阪府　奥野健一郎

人は人ヒントにならぬ体験談
補助輪が取れたと孫の得意顔
うれしいが買い被られも疲れます
言い勝ってどれほどのこと理屈など
せっかちじゃ花は育たん人もまた

大阪府　高木道子

文久の祈りの数見る百度石
体力の温存をして長電話
踏んづけても蹴っても雑草へこたれぬ
懐かしい本を開けば紙魚と会う
鷹参上に鴉弁え控えおり

人間の価値を振り子は知っていた
こしあんと粒あん意外なライバルか
水割りが効いたか眠気取れました
色メガネ外せば世界丸く見え
敗者復活を待つ野の焚火

神戸市　青木公輔

朗希くんいーよいーなの背番号
うつ気分侍たちがぶっとばし
実力もさることながら神がかり
そこかしこ「春は此処よ」と花が呼ぶ
国民をプロパガンダで縛りつけ

神戸市　石川克美

左遷地に陽だまり見つけ生きている
街の灯に背を向け今は土いじり
捨てようかもう着ることもない背広
タワマンの売りの一つにこの夜景
投句する桜の花の切手貼り

神戸市　酒井宏

三分だけ勇気下さいウルトラマン
言い返す言葉を後で思いつく
なかなかに一筋縄でいかぬ孫
行き止まりならば戻って最初から
大勢に靡く我が身が疎ましい

神戸市　村松久江

良い知らせ泣いたことなどすぐ忘れ
もう一杯追加を頼む祝い酒
ご無沙汰がすぎて会話がぎこちなく
納得ができぬ理由で叱られる
川柳で老いの人生楽しまん

神戸市　山根弘華

軍服が似合わない子に育てたい
医療費が嵩み命がすくんでる
入学期前歯の欠けた子の笑顔
早起きの猫を非難の目でながめ
言いたいこと言える日本はまだ平和

尼崎市　板谷賢二

生きてるとメールの友は引き籠り
出会いの春妻はピアノを習いだす
桜咲くそれはさておき居酒屋へ
クラス替え愛別離苦を学ぶ孫
遠からず表彰される子沢山

尼崎市　宗和夫

逢えるかも知れぬ別れた橋の上
記憶から消えた人から来る電話
本人の独り合点に救われる
三年をずっとマスクの生徒たち
選択のできぬ未来に歩き出す

尼崎市　八木幸彦

小野市　藤原泰宏

ふっきれて食事の味を噛み締める
春の海キラリキラリと笑み浮かべ
更新日認知テストが気にかかる
ひと呼吸おいた返事で恥かかず
感情を作り笑顔で隠されず

三田市　木村マユミ

幾つでもハグして欲しい時もある
物価高冷蔵庫内スッキリと
喜寿すぎてペットカー押し母となる
我が子には血となり肉が遺産です
目前の八十の壁も健脚で

三田市　幸田厚子

最初で最後顔見る卒業式
標本木お待たせごめん今日五輪
妻と旅かわいさ残るレンズ越し
高値でもくぎ煮欠かせぬ春日和
自販機が西日を浴びた過疎の村

三田市　松下英秋

コロナ明け再開できぬものがある
計画を持たぬゴリラの幸福感
散れば散れ頑張らなくていいんだよ
ご近所の社交場になるゴミ置場
至近距離でカラスと出会うゴミ置場

三田市　森玲子

雨戸開け脳に春だと言い聞かせ
庭の実も食べつくしたか鳥も来ず
主婦業も週休二日夢の夢
朝は時短野菜炒めに卵乗せ
ストーブの前で陣取る猫二匹

丹波篠山市　河南すみえ

高齢者自分のことだが忘れてる
待っていたつばめに逢える青い空
満ち足りた青葉の風がやわらかい
いつまでも溢れる涙父母のこと
百寿まで心まっすぐ今生きる

西宮市　髙橋千賀子

春の陽がしぼんだ心ノックする
チャンスだよ旅行支援がノックする
改良でバラに負けないチューリップ
野良猫も飼えば愛しいわが子です
あんパンでしあわせになる安あがり

西宮市　藤原みよし

誘われて高野参りで心澄む
冬仕舞よっこらしょと声も出る
後戻りする気ないのに足萎える
五類でも隣コロナで身構える
古木前毎年ここで写真とる

雨ひと日化粧もしない緩んだ日
落葉樹落ちきるまでの掃き掃除
電話出るノーときっぱり詐欺退治
シャクナゲにツツジ満開縁でお茶

広島市　田桑恵子

月曜日気合いを入れて家事をする
惚けとるか嘘がだんだん上手くなる
風呂位掃除しなさい肚で言う
要支援それに甘えてどうするの

竹原市　土井輝恵

名を呼ばれマスク外して見詰めあう
根は真面目ムードメーカー演じてる
夢追いて十五の春に旅立ちを
人生の喜怒哀楽は誰にでも

那覇市　禱モモト

泣く時はベッドの上か風呂の中
うちの猫目で何事も済ますとは
白髪染めカットしたなら少女A
右指が痛く書けない読みにくい

東京都　尾畑なを江

在宅がやっと終わるよ羽根伸びる
日常を離れて一人空港へ
仕事辞め散歩増えたら友に遇う
渡米の子ウェルカム我が家一年後

東京都　髙岡弥生

外すマスク女子の唇紅をさす
満開の桜の宴も温暖化
知らぬのに知った顔するおばあちゃん
物価高生活出来ぬとカップ麺

大阪市　前川善之

脳ゆるり時間ばかりが去っていく
古稀過ぎてますますはまるフラダンス
孫の世話キャラ弁づくり ああしんど
被告妄想これは確かに病気です

大阪市　宮本千恵子

指や手の動きはんなりハワイアン
茶会席濃い茶解禁五類待ち
神様が居ると思ってお賽銭
通夜明けは喪服姿でパンを食べ

河内長野市　三輪くにお

車窓から心ほっこり山つつじ
子供らに席を譲られ照れ笑い
割烹着面倒がらずにおしゃれさん
楽しさを求めて訪ね笑顔増す

摂津市　野々村レイ子

八重桜に自慢川柳つりさげた
女人高野石段長くのぼれない
えんどう御飯山盛食べてお腹泣く
来年一〇〇家族で祝う誕生日

寝屋川市　坂本ミヨノ

時の世の出来事を説く知識人
空家にも季節は巡り花が咲く
春光を浴びて枇杷の実育ちゆく
知恵絞り守り抜きたいこの地球

羽曳野市　黒木　ひとみ

娘の好意ふわふわ布団幸せだ
記念の日贅沢しようと娘の誘い
春日差し元気で動けルンルンだ
ストレスは買物行こかが取ってくれ

三田市　辻　開子

平和なり老いの二人は日向ボコ
口喧嘩貶して褒めてワッハッハ
ため息は終日雨の春まつり
雨模様山車の宮入り中止トサ

三田市　馬場　貴美江

引き際を知らない記憶隅に置く
あなたには一生平行線辿ります
舞い込んだ庭の落葉を掃いている
精一杯生きた足跡自画自賛

丹波篠山市　澤　良子

花みずき春の嵐の後に咲く
冬型の予報に注意夜の冷え
台所脳は全開がんばる場
久し振りカレーコロッケ作り置き

西宮市　高瀬　照枝

怪文書捏造交え姦しい
米中露正義それぞれ一つ持ち
渡り鳥南西諸島を避けて飛び
隠密にシャモジ手にして飛ぶ慰問

京田辺市　加山　勝久

「川雑」語録 ⑲

短詩時代来る

喜多（きた）　一二（かつじ）（鶴（つる）　彬（あきら））

石川啄木がその短歌を人生の一秒の詩と言つた。

川柳は今や私の人生の一秒の詩とならんとし、亦なりつゝある。

正宗白鳥氏は藝術の世界を『国家にもそのもろ〳〵の制律にも支配されぬ心の安息所』といつたが、私の川柳も何物にも支配されぬ短詩王国の花園たらんとしてゐる。

あゝ、内的にも外的にも新しき短詩時代が来た。一二よ、自愛せよ。（一九二六、十、十八）

（「川柳雑誌」昭和2年4月）

川柳句集『肉眼』

橘高薫風

大文字　酔醒めるよりはかなしや
大文字　夢の多くは夢で終る
松島のふた月たちてなつかしや

入院手術　十句

入院や　わが来し方の土埃
天井が未来へ移行　担送車
麻酔より醒めて必ず夜なりけり
鷺一羽身じろぎもせぬ手術熱
粥を噛む　乳児噛むよりおそれをなし
秋の雨　しずかに粥がこなれゆく
手術後の白髪いつまで抜かざるや
胃を切除りし秋　犬抱けばあたたかに
焼跡に似た傷抱いて冬近し
胃半分　肺半分の湯呑かな
額縁を出て薔薇捨てし夫人像
朝顔にロマン生まれるべくもなし

嗚呼　清水白柳氏　四句

大輪のぐわらりと菊の散りざまや
悲報来　金魚　鮒　鯉　水の底
病床に聞く訃へ水を飲んですます
菊の香よ　親切心は引継がん
ジンフィーズ　美人は美徳だと思う
なお会わず　冬木は黒い血管図

霜月悲唱　五句

ハラキリ由紀夫へ　雪降らず　花散らず
死にに行く鉢巻の尾を長垂らし
由紀夫の首といくばく距つ焼林檎
まどうなく胃を切除りわれのながらうに
終焉や　裂けてくれない増す柘榴
毛皮着て女にめぐる獣の血
風花す　雪子が髪を梳くらしく
長男の頭へ手を載せやすき背丈
人を待つ茶房の壁の古城の絵

愛染帖

新家　完司　選

（投句２４５名）

鈍感をコーティングして胃は丈夫

大阪市　森田　遊子

（評）繊細で傷つきやすい人は、こころだけではなく胃まで調子が狂ってしまう。その点、「鈍感力」はこころも内臓も守ってくれる。

譲られた優先席でナンパする

宝塚市　岸田　万彩

（評）優先席を譲られたら老人らしく畏まっていたい。だが、足腰は弱っていても色気だけはまだまだ健在。困ったものである。

しがらみを捨てたらお腹空いてきた

寝屋川市　川本　信子

（評）しがらみとは「引き留め、まとわりつくもの」。そのようなものと縁を切れば胃腸も快調になるだろうが、これがなかなか至難。

カラス来ぬ今日は缶ビン収集日

高砂市　松尾柳右子

（評）ニワトリやアヒルよりも大きな脳を持っていて抜群に賢いカラス。缶や瓶には食べられるものなど無いのは先刻ご承知。

わびとさび体感しよう物価高

美作市　岡本　余光

（評）あれも欲しいこれも欲しいと手を出すとたちまち残高ゼロになる物価高。足ることを知る「侘」「寂」の精神性を今一度。

自転車にいつも雨傘積んでいる

大阪市　宇都満知子

（評）用意のいいことである。だが、自転車の傘差し運転も器具固定も道路交通法違反、都道府県条例違反になるのでご注意を。

心配の種と埃は無尽蔵

鳥取市　谷口回春子

（評）癌に罹ったら…、ボケてきたら…、地震や火事になったら…等々、生きている限り舞い上がる埃のように心配の種は尽きない。

肝臓よ心臓よ今日もヨロシク

和歌山市　まつもともと

（評）二十四時間休むことなく働き続けてくれている肝臓や心臓、そして胃腸等の消化器。不行き届きもありますがヨロシク！

疲れたなぁ蛇蝎のように生きたいなぁ

土佐清水市　辻内　次根

（評）蛇蝎の如き奴は「嫌われ者」だが、この場合は「ヘビやサソリのように人を避けて隠れ棲む」だろう。疲れたときはそれもアリ。

体裁はどうあれ生きていれば勝ち

米子市　竹村紀の治

（評）蛇蝎のようであろうがボロを着ていようが「生きているだけで儲けもの」だ。お迎えが来るまで此の世を眺めて楽しもう。

黒石市　石澤はる子

春風に唆される若づくり

大洲市　花岡　順子

ぽかぽかへ桜も藤もゴーサイン

三原市　笹重　耕三

桜前線もうコロナ禍を過去にする

広島市　羽城　裕子

さくらさくら春を愛する人ばかり

奈良市　加門　萌子

さくらサクラいい国だなあ日本よ

鳥取県　斉尾くにこ

平凡でいても飽きられない桜

箕面市　中山　春代

ふる里の桜がどっと来るライン

高槻市　初代　正彦

散るサクラ笑顔で送るハナミズキ

鳥取市　田賀八千代

童謡が飛び交っている春日和

和歌山市　北原　昭枝

花びらを酒の肴に友と飲む

神戸市　城戸　誓子

せっかちに花追い立てる温暖化

神戸市　酒井　宏

小走りに来て小走りに去る桜

大阪市　磯島福貴子

花見ツアー予想はずれて散った後

神戸市　能勢　利子
チューリップ咲いたが母はケアハウス

京都市　清水　英旺
妻丹精の春の花ばな客迎え

大阪市　森　廣子
竹の子ご飯ぶらさがってるドアのノブ

羽曳野市　吉村久仁雄
スーパーに土筆が売っている都会

黒石市　北山まみどり
散り方が決まらないので回り道

豊中市　水野　黒兎
バンクシーは世界の壁を画布にする

大阪市　谷口　義
変わり者実は独創的な人

売りそこなった株と長生きしています
死亡記事何の病気で死にはったん

三田市　堀　正和
独身に戻りましたと言う老婆

松山市　郷田　みや
赤飯を食べております年金日

川西市　大坪　一徳
菜の花にはやっぱりオルガンの音色

尼崎市　藤田　雪菜
自転車に乗りたくなった春の風

賢妻で賢母だけれど甘え下手
漢字から仮名を作った和の心

スクワット十回やって座ろっと
一日中いろんな人を見詰めます

豊中市　藤井　則彦
ぽつねんの至福味わう喫茶店

松山市　柳田かおる
好きになる人はおんなじニオイする

札幌市　三浦　強一
クロスワード語彙の不足を知らされる

佐賀県　真島久美子
全開にすれば窓から見える墓地

石川県　堀本のりひろ
ほろほろと風に舞い散る自尊心

交野市　山野　双葉
納骨を終えて姉妹の花見酒

神戸市　槇田　次郎
新色に迷うも楽し春の紅

越谷市　久保田千代
辛抱の秘密のパワー母手本
入園式お口の中は歯がいっぱい

生きること楽ではないと知る介護
放心の目に雲ひとつ動かない

弘前市　高瀬　霜石
飲兵衛のまあおしゃべりとむっつりと
しあわせな音を奏でる腹時計

和歌山市　柏原　夕胡
猫撫でる夫の腹も撫でておく
おーいお茶　ペットボトルを買いなさい

倉吉市　大羽　雄大
万博へ石段登り降り開始
おばちゃんの喋りに仁義買いをする

米子市　野川　宣子
メロンパンぽろぽろ零し睨まれる

岡山市　丹下　凱夫
春愁はなんだったのか粒あんぱん

箕面市　大浦　初音
朝はパン晩に納豆食べてます

海南市　山中　閑
どうしよう初シロウオのおどり食い

堺　市　今井万紗子
厄介な国から黄砂飛来する

男鹿市　伊藤のぶよし
ピンぼけも黄砂のせいにできる春

唐津市　仁部　四郎
質問がしつこく本音ついポロリ

岡山県　藤澤　照代
首肩背腰膝指の反抗期

大阪市　滝井えみこ
動けない誰か背中のネジ巻いて

松江市　石橋　芳山
大声を上げて淋しい人なんだ

堺　市　内藤　憲彦
スマホが溢れ郵便局が退化する

河内長野市　大島ともこ
金塊だけは持っていきたいあの世まで

神戸市　斎藤　隆浩
忘れたと気付く間は大丈夫

米子市　妹能令位子
電球を替える時には亡夫思う

三田市　野口　龍
どん底の人生だけど平気やで

加古川市　石賀　邦子
私にも差別意識がまだ潜む

東大阪市　青木　隆一
すごいこと借金の無いギャンブラー

大阪市　古今堂蕉子
ぬるま湯の育ちじゃ牙は生えませぬ

安来市　原　徳利
ロレックスと同じ一秒打つ時計

大阪市　平井美智子
息子から微妙ににおう加齢臭

神戸市　敏森　廣光
老けたねと人に言われりゃ腹が立つ

桜井市　安土　理恵
見渡していずれなるだろゴミ屋敷

尼崎市　山田　耕治
寝るまでは此の世あしたは分からない

尾道市　村上　和子
手の平を飛び出しそうな生命線

弘前市　福士　慕情
訃報欄七十代じゃ若すぎる

那覇市　禱　モモト
心技体百歳めざし鍛えてる

大阪市　坂　裕之
我が儘を許してくれた仲間たち

三田市　上田ひとみ
デパートは物産展にまっしぐら

高槻市　松岡　篤
電子機器消耗材と意識変え

横浜市　加藤　佳子
大真面目喪服に合わせダイエット

笠岡市　藤井　智史
緊張が解けて急行するトイレ

枚方市　栃尾　奏子
煮崩れて愛嬌のある芋になる

西宮市　高瀬　照枝
久し振りカレーコロッケ作り置き

大阪市　今村　和男
来た道をゆっくり戻る落とし物

生駒市　飛永ふりこ
もてたのよ女が言えばダサくなる

枚方市　藤田　武人
野と山と川にもあった秘密基地

津山市　高橋由紀女
トラ刈りのダサい畑を省みる

池田市　太田　省三
夏布団去年買ったぞテレショップ

大阪市　島田　明美
音痴のウグイスとソプラノのカラス

奈良県　中堀　優
魂のグーどんなチョキにも負けぬ

大阪市　小野　雅美
アプリで加工したい免許証の写真

松山市　栗田　忠士
足し算はできるが引き算が苦手

大阪市　内田志津子
おじさんも挨拶がわり飴くれる

大阪市　岩崎　公誠
生き過ぎて遺産はゼロという軽さ

鳥取県　山下　節子
しぶしぶと使った杖に助けられ

神戸市　近藤　勝正
弱くても笑い暮らせる国がいい

香芝市　山下じゅん子
家事育児　息子とっても好きらしい

横浜市　菊地　政勝
温室の野菜が旬を見失う

神戸市　みぎわはな
ゴキブリの貌も忘れた高層階

松原市　森松まつお
越後屋の看板オッと二度見する

丹波篠山市　澤　良子
朝昼と酒粕入れたお味噌汁

今治市　永井　松柏
満身創痍ながら不死鳥でありたし

豊橋市　八甲田さゆり
デイサービス　ジェンダーフリー闊歩する

河内長野市　中島　一彌
やはり来たそろり海馬の液状化

鳥取市　岸本　孝子
かなり無理しているようなのし袋

三田市　大西　重男
自分のこと僕と言うのに照れる歳

翔平の背に乗っかって空を飛ぶ　橿原市　居谷真理子

夢の中では大谷と添うている　尼崎市　清水久美子

大谷の後継たぶん100年後　芦屋市　新阜　義明

しゃあしゃあと正義を叫ぶ侵略者　藤井寺市　鈴木いさお

ラストエンペラーくり返し聴く雨の午後　西宮市　高橋千賀子

ロケットは失敗ヘリは墜落し　鳥取県　竹信　照彦

汚染水タンク戻せと海叫ぶ　河内長野市　藤塚　克三

軍費増し南海トラフ置いてけぼり　京田辺市　加山　勝久

ポスターの笑顔信じて一票を　和歌山県　三枝眞智子

「君が代」を習ってるらし幼稚園　川西市　山口　不動

公園のエサやり人に集う猫　那覇市　宮　すみれ

猫が逝くもう飼うことが出来ぬ齢　奈良市　加藤江里子

性格は猫科に属す私です　大阪市　江島谷勝弘

抜け出せないのは孤独という迷路　富田林市　中村　惠

五七五上手くもならず飽きもせず　尼崎市　宗　和夫

五七五ちょっと楽しい夢の中　弘前市　小山内真由美

天寿まで川柳愛し越える坂　神戸市　山根　弘華

孫離れ妻を相手の句に戻る　神戸市　奥澤洋次郎

塔誌来るヒット期待しまたアウト　三田市　尾崎　一子

ドキドキと初めて使うランドリー　豊橋市　小松くみ子

妄想の恋にときめくときおんな　香芝市　大内　朝子

煩悩を抱いて迷子になったまま　奈良市　米田　恭昌

ハイキング埋蔵金のある山へ　大阪市　岡田　恵子

グルメだと自称して摂る昆虫食　奈良県　安福　和夫

寄せて上げスポンジだけのCカップ　鳥取市　奥田　由美

立ち漕ぎのブランコ片方も揺れる　河内長野市　森田　旅人

県知事も市長もコロナ禍の餌食　熊本市　杉野　羅天

マスク顔親だか子だかわからない　鳥取市　前田　楓花

マスク取る美女にわずかな髭が見え　大阪市　岩崎　玲子

自己判断と責任転嫁するマスク　箕面市　出口セツ子

マスク取るチャンスに春は花粉症　鳥取市　狭武　紫陽

マスクとれ顎はずすほど爆笑す　岡山市　大石　洋子

マスクせず校歌を歌う晴れ姿　鳥取市　大前　安子

バッカスに先ず検診の結果告げ　福井市　伊藤　良一

遺伝子が今夜も酒を所望する　三田市　北野　哲男

ワイフより長い付き合い酒の虫　河内長野市　村上　直樹

飲み会が夜から昼になる齢　尼崎市　永田　紀惠

全身のネジを弛める燗徳利　富田林市　山野　寿之

ぼくも二刀流まんじゅうアテにコップ酒　堺　市　澤井　敏治

生ビールうますぎるのも困ります　大阪市　井丸　昌紀

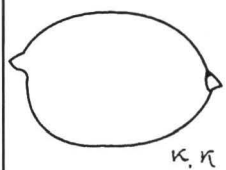
甘酒で始まる今日の万歩計　鳥取市　山野すみれ

休肝日の前の晩にはかなり飲む　府中市　岸田　武

共選欄　檸檬抄

（薫風書、カットとも）

（投句302名）



「しつこい」　江島谷　勝弘　選

ノーモアとしつこく言うよプーチンへ　尼崎市　藤井　宏造
トランプのしつこさアメリカの落下　尼崎市　八木　幸彦
今日もまたミサイル遊び北のドン　尼崎市　永田　紀惠
尖閣をうろつく船がまだ続く　横浜市　菊地　政勝
原発回帰しつこくNOと意思表示　大阪市　宇都満知子
基地の島今日も来るくる外来機　那覇市　宮　すみれ
コツコツとしつこい日本の野球　三原市　笹重　耕三
見てもないのに払え払えとNHK　神戸市　斎藤　隆浩
何に使われるかとくどい銀行　羽曳野市　徳山みつこ
いいかげんにしてください杉花粉　神戸市　酒井　宏
豪雪も酷暑も津軽しつこいぞ　弘前市　稲見　則彦
ノーベル賞はしつこい人が取るのです　神戸市　能勢　利子
こつこつとしつこい人が出世する　箕面市　酒井　紀華
またかいなんぼ歌えば気がすむねん　神戸市　敏森　廣光
深夜便また追いかける五木さん　岩国市　上村　夢香

「しつこい」　永見　心咲　選

触るなと言ってるんですさっきから　尼崎市　藤田　雪菜
コロンボのような妻には勝てません　大阪市　寺本　実
青春の蹉跌まとわりついてくる　土佐清水市　辻内　次根
反戦を叫ぶしつこいほど叫ぶ　鳥取市　岸本　宏章
判ったと強く言われて気がついた　尼崎市　山本　百合
いつまでも私をあおる花吹雪　生駒市　饗庭　風鈴
施設案内あの世の夫にまだ届く　奈良市　髙橋　敬子
しあわせな話ばかりに大欠伸　広島市　松尾　信彦
葬儀社のCMちょっと多過ぎる　尼崎市　藤井　宏造
気がつけば刻み込まれたコマーシャル　松山市　柳田かおる
通販の一度がずっと付きまとう　香芝市　山下じゅん子
ピンポンがしつこいばれたかな居留守　大阪府　浦上　恵子
あのしつこさは多分ミサイル依存症　神戸市　松倉　正美
飢え死にを放りしつこい飛翔体　三原市　笹重　耕三
尖閣をうろつく船がまだ続く　横浜市　菊地　政勝

今日中と繰り返し言うコマーシャル　三田市　堀　正和
不用品ないかないかと買取り屋　寝屋川市　平松かすみ
しつこい電話ボケたフリでもしてみるか　米子市　伊塚美枝子
通販の攻略術にまた負ける　鳥取市　奥田　由実
何度でもカメムシ網戸潜り抜け　鳥取県　竹信　照彦
おい薮蚊ワタシは老婆なんだから　大阪府　米澤　俶子
あのカラスしつこい程にアホと言う　鳥取市　山野すみれ
獲れるまで鷺が一本足で立つ　倉吉市　牧野　芳光
まだ眠いのに散歩だとクゥーンクン　加西市　山端なつみ
しつこさと可愛さに負け野良に餌　美作市　岡本　余光
しつこいぞ蛸がキスして放さない　鳥取県　田中　重忠
しつこいのが好きだ豚骨ラーメン　大阪市　古今堂蕉子
とんかつにケチャップソースマヨネーズ　大阪市　折田あきこ
しつこさが好き長芋も納豆も　西予市　西田美恵子
朝カレー昼トンカツで夜うなぎ　神戸市　冨永　恭子
かっぱえびせん空になるまで許さない　大阪市　井丸　昌紀
しつこい話は水割りにして聞く　富田林市　中村　惠
赤提灯座席は空けて待ってると　西宮市　福田　正彦
居酒屋のトイレにまたもみつをの詩　郡山市　安藤　敏彦
何回もトイレが僕を呼びに来る　寝屋川市　廣田　和織
駆逐したドクダミがまた庭の隅　枚方市　栃尾　奏子
ごめんねと何回言えばすむのかな　大阪市　寺本　実

コロナのしつこさ戦争のしつこさ　尾道市　小川　道子
しつこいコロナ人間さまは強いじゃろ　三次市　伊藤　寿子
チャンネル回し何度も観てる翔タイム　羽曳野市　吉村久仁雄
第九波あるかコロナの粘り腰　大阪市　高杉　力
選挙カー連呼連呼でさくら散る　八幡市　武田　悦寛
駆逐したドクダミがまた庭の隅　枚方市　栃尾　奏子
お似合いですよピタリ張り付く店の人　河内長野市　大島ともこ
かっぱえびせん空になるまで許さない　大阪市　井丸　昌紀
口きけばグチグチグチと菜種梅雨　石川県　堀本のりひろ
夜が白み釣果がなくてまだ竿を　羽曳野市　磯本　洋一
豪雪も酷暑も津軽しつこいぞ　弘前市　稲見　則彦
こってりとマスカラ仕上がる下車駅　三田市　幸田　厚子
おつかいを頼み何度も念を押す　鳥取市　前田　楓花
同じこと言うな言わすな口喧嘩　豊中市　齋藤奈津子
ファミレスのチーズ盛り盛り年令を知る　和歌山市　佐藤　まき
水虫の方が薬に強くなる　岡山県　藤澤　照代
しつこい人が一番先に逝きはった　堺　市　今井万紗子
死ぬ迄に当ててみせると宝くじ　大阪市　折田あきこ
コマーシャル十分毎に念を押す　宝塚市　岸田　万彩
妻の留守あっちこっちに注意書き　三田市　九村　義徳
しつこくてうざいと思う人が夫　和歌山市　定松　宏枝
血圧に睨まれながら油物　堺　市　坂上　淳司

命は一つしつこい位気を配れ　出雲市　伊藤　玲峰
鍼湿布灸にも負けず痛む膝　交野市　山野　双葉
止めませんリハビリしつこくつづけます　岩出市　藤原ほのか
鈍い痛みしつこく残るオペの跡　岸和田市　雪本　珠子
しつこいほど切っても伸びる指の爪　高槻市　初代　正彦
しつこいなあ染めてもすぐに出る白髪　奈良市　加藤江里子
水虫は妻より長いお付き合い　高槻市　松岡　篤
褒めなけりゃ味がだんだんひつこなる　尼崎市　宗　和夫
胸焼けする味つけ濃いかったかな　東大阪市　北村　賢子
こってりの味が美味しいまだ生きる　大阪市　森田　遊子
お似合いですよピタリ張り付く店の人　河内長野市　大島ともこ
諦めずしつこく粘り値引きする　豊橋市　西郷紀美代
酔いしれたジェームスディーンが付き纏う　寝屋川市　川本　信子
重い腰しつこい妻の指示に上げ　南あわじ市　萩原　狸月
しつこいと言うがあなたの子供です　広島市　羽城　裕子
初恋はきっとあの世で実らせる　西宮市　亀岡　哲子
しあわせな話ばかりに大欠伸　広島市　松尾　信彦
しつこいと粘り強いは紙一重　尾道市　小畑　宣之
しつこいとしぶといの間を行き来する　東大阪市　青木ゆきみ
男前でもしつこい人は嫌いです　藤井寺市　鈴木いさお
しつこいと言ってくれたら諦める　桜井市　安土　理恵
輪の中にしつこい奴も居て和む　堺　市　内藤　憲彦

見てもないのに払え払えとＮＨＫ　神戸市　斎藤　隆浩
許しても忘れはしないあの言葉　明石市　糀谷　和郎
払っても払ってもなお五月蠅　松山市　栗田　忠士
カモとみたな還付金だとまた電話　河内長野市　村上　直樹
またかいななんぼ歌えば気がすむねん　神戸市　敏森　廣光
しつこく粘り劣勢を立て直す　大阪市　森　廣子
顔見たら免許返せと子も孫も　川西市　大坪　一徳
しつこいな息子も孫もおらんのや　堺　市　澤井　敏治
前後左右上下カメラの包囲網　大阪市　石田　孝純
しつこいは応援だった母の舌　富田林市　山野　寿之
監視カメラしつこい奴とほめられる　鳥取市　上山　一平
しつこいと言うがあなたの子供です　広島市　羽城　裕子
二杯目を注いでしつこさ加速する　米子市　妹能令位子
しつこいぞもう風呂場では寝ないから　松江市　中筋　弘充
縺れ糸解いて元へと戻す五指　大阪市　岩崎　公誠
捜索にしつこいなんて言わせない　鳥取市　中村　金祥
しつこさに酒が入って輪をかける　越谷市　久保田千代
しつこい話は水割りにして聞く　富田林市　中村　惠
頷いてしかしと持論展開し　防府市　坂本　加代
しつこいなあ僕も酔うたらああだろか　高槻市　松岡　篤
電話口根掘り葉掘りのアンケート　奈良市　東　定生
あきらめが悪くて絡みついた糸　黒石市　北山まみどり

愚痴聞かせ自慢を聞かせエンドレス　丹波篠山市　酒井　健二
社長の椅子何だかんだと離さない　尼崎市　山田　厚江
しつこいぞもう風呂場では寝ないから　松江市　中筋　弘充
終わりなき主婦の仕事の台所　豊中市　松尾美智代
ピンポンがしつこいばれたかな居留守　大阪府　浦上　恵子
クレーマー又あの客だ今日も又　大阪市　岩崎　玲子
しつこいと言われようとも志　香芝市　大内　朝子
しゃべっても静かにしても怒られる　和歌山市　まつもともとこ
久し振りフルメイクして濃ゆくなる　箕面市　大浦　初音
触るなと言ってるんですさっきから　尼崎市　藤田　雪菜
落ちていた財布何度も蹴ってみる　寝屋川市　伊達　郁夫
根性があってときどき嫌われる　佐賀県　真島久美子
ねちねちのねちの部分の中にいる　土佐清水市　辻内　次根
人差し指がねちねち君を責め立てる　大阪市　小野　雅美
あーでもないこうでもないと意地を張る　丹波篠山市　澤　良子
しつこさに負けた保険に助けられ　犬山市　関本かつ子
耳寄りな話に耳は傾けぬ　弘前市　髙瀬　霜石
ポケットの底でウジウジする妬心　大阪市　平井美智子

秀　句

いい医者だしつこいまでに問診す　鳥取県　山下　節子
しつこいな息子も孫もおらんのや　堺　市　澤井　敏治
コロナのしつこさ戦争のしつこさ　尾道市　小川　道子

金メッキ私きれいと問い続け　橿原市　居谷真理子
虹の橋渡る野心を持ち続け　箕面市　出口セツ子
復縁の絵馬に辟易してる神　佐賀県　真島久美子
オレの酒が飲めんのかオイ飲めんのか　奈良市　大久保眞澄
しつこい蚊いま短パンのふくらはぎ　大阪市　宇都満知子
ゴシゴシと揉んで汚点が黒くなる　和歌山市　まつもともとこ
人差し指がねちねち君を責め立てる　大阪市　小野　雅美
追伸の一語でとどめ二度刺され　岐阜県　喜多村正儀
納豆の粘りで愛をゲットする　笠岡市　藤井　智史
しつこいと母を叱って眠れぬ夜　寝屋川市　廣田　和織
ポケットの底でウジウジする妬心　大阪市　平井美智子
耳よりな話に耳は傾けぬ　弘前市　髙瀬　霜石
解毒剤飲んでも消えぬ過去がある　大阪市　大沢のり子
獲れるまで鷺が一本足で立つ　倉吉市　牧野　芳光
何に使われるかとくどい銀行　羽曳野市　徳山みつこ
もう・もう・もう・聞きあきましたジンフィーズ　松山市　大内せつ子
ウイルスにつきまとわれているらしい　郡山市　安藤　敏彦
ベトベトのダリの時間が離れない　松江市　石橋　芳山

秀　句

執拗に墓参促す蝉しぐれ　三田市　松下　英秋
何度でもきいていいのよ　お母さん　三田市　稲角　優子
後悔を煮たり焼いたりしています　大阪市　島田　明美

「あきらめる」

（投句　213名）

鈴木公弘選

ゼロ並ぶ九回裏のホームラン　寝屋川市　長尾　千賀
月旅行金がないので諦める　岡山市　丹下　凱夫
叩いても撫でても伸びぬ首の皺　大阪府　米澤　俶子
しつこいと三度言われてあきらめる　三田市　九村　義徳
あきらめて悟る数だけ増えた老い　松山市　宮尾みのり
血糖値あきらめ余生ケセラセラ　倉吉市　大羽　雄大
投票所入れたい人のない政治　川西市　大坪　一徳
高齢だからとあきらめること多くなる　東大阪市　北村　賢子
あきらめるこの世のことはままならぬ　丹波篠山市　酒井　健二
マネキンの服はまずだめ見てるだけ　大阪市　岩崎　玲子
あきらめを置いていきます他人です　富田林市　中村　惠
横にしか振らぬ頑固な父の首　大阪市　宇都満知子
もういいか出しそびれてたラブレター　生駒市　饗庭　風鈴
あきらめたブラウス今日は半額に　尼崎市　藤田　雪菜
あきらめるために大泣きしています　岡山市　大石　洋子
春一番女はあきらめが早い　西予市　黒田　茂代
諦めて心すっきり五月晴れ　和歌山市　上田　紀子
入らないスカートやっと捨てました　東大阪市　青木ゆきみ
結婚を諦め目指す管理職　宮崎市　惠利　菊江
イケメンをあきらめすぐにゴールイン　神戸市　能勢　利子

何もかもデジタルになり手を出せぬ　大阪市　岩崎　公誠
あきらめが良すぎて今も独り者　今治市　永井　松柏
美人でもないし頭も良くないし　大阪市　平井美智子
吹き流しみたいな人とあきらめた　三田市　稲角　優子
金刀比羅宮　千段越えにギブアップ　大阪市　古今堂蕉子
ならぬものはならぬと思いあきらめる　米子市　中原　章子
財布みて体調悪いことにする　大阪市　原田すみ子
本望でござる死ぬまでキリギリス　弘前市　髙瀬　霜石
坂の上見上げただけであきらめる　大阪市　折田あきこ
諦めたとたんに消えた蕁麻疹　佐賀県　真島久美子
食べたい物食べるグッバイダイエット　河内長野市　大島ともこ
ねばるだけねばりあっさりあきらめる　越谷市　久保田千代

佳　句

夢半ば跡継ぐ家へUターン　犬山市　金子美千代
あきらめが肝心　空は日本晴れ　弘前市　福士　慕情
諦めると何か得した気になれる　神戸市　上田　和宏
養毛剤あれこれ試してはみたが　堺　市　村上　玄也
楽ですよあきらめ癖が身につけば　三田市　北野　哲男

人

ウインクに気付かぬ彼はもうキライ　神戸市　みぎわはな

地

成るようになるさと欲を捨てました　和歌山市　柏原　夕胡

天

ハサミでパチッあきらめるって簡単よ　松山市　大内せつ子

軸

老病死いのちの道とあきらめる

「そろそろ」

（投句　212名）

森田旅人選

筍蕨里の初生り届くころ　大阪市　内田志津子
戦争の記憶が少しずつ消える　丹波篠山市　酒井　健二
留守電が五件許してあげようか　大阪市　小野　雅美
くしゃみ三回そろそろアレの季節だな　橿原市　居谷真理子
膝ジンジンそろそろ雨の降る気配　大阪市　岡田　恵子
夫急かし内見会のケアハウス　鳥取市　奥田　由美
鉄砲玉そろそろ帰る夕御飯　豊中市　齋藤奈津子
この辺で飯にしようやとりあえず　生駒市　饗庭　風鈴
いいかげん覚えて欲しい顔と名と　神戸市　冨永　恭子
ナメクジの辿った跡は抽象画　三田市　村田　博
そろそろかいやまだ困る免許証　松山市　宮尾みのり
そろそろと惚けてゆくのが老いの知恵　加古川市　石賀　邦子
走りなや転けまっせそろそろでっせ　大阪市　江島谷勝弘
雪の道そろりそろりと万歩計　札幌市　三浦　強一
杖ついて試歩はあせらず大地踏む　岡山県　藤澤　照代
病む翼そろり広げて夜明け待つ　河内長野市　大島ともこ
杖に頼り春陽さんさん桜道　石川県　堀本のりひろ
そろそろと思うまだまだとも思う　藤井寺市　鈴木いさお
そろそろと水が恋しくなる頃だ　鳥取市　永原　昌鼓
社長訓示そろそろ欠伸噛み殺す　豊中市　水野　黒兎
反省会そろそろ酒の出るころや　堺市　澤井　敏治
お開きの耳打されている幹事　鳥取市　岸本　孝子
宴たけなわ一本締めで参ります　横浜市　加藤　佳子
声出して山がそろそろ笑いそう　岡山市　丹下　凱夫
後期高齢本音で生きていいですか　堺市　内藤　憲彦
派手な服そろそろ着てもいいですね　東大阪市　青木ゆきみ
そろそろ翔ぶか恋の最中の孫娘　羽曳野市　徳山みつこ
そろそろと思うと他人めく娘　岐阜県　喜多村正儀
ゆっくりと亀は亀なり走ってる　越谷市　久保田千代
そろそろ往くと来たばっかりの春が言う　東京都　川本真理子
ひとり居がさみしくなった家族の輪　三田市　尾﨑　一子
午前二時そろそろ星が星を産む　佐賀県　真島久美子

佳　句

さよならがやってきそうな朧月　松山市　大内せつ子
黄昏の恋は赤児を抱くように　富田林市　中村　恵
百回は泣いた　そろそろ夜は明ける　大阪市　大沢のり子
春だもの会いに行かなきゃ探さなきゃ　黒石市　北山まみどり
予兆はあった　ブランコは揺れていた　大阪市　島田　明美

人

生き様の染みた暖簾を抱いてやる　尼崎市　山本　百合

地

摺り足で所狭しと能舞台　奈良県　室田　行久

天

おもいっきり泣いたら飯の時間です　弘前市　髙瀬　霜石

軸

そろそろと開けて覗いてみる明日

初しぐれ教室

題 ― 雨

平井 美智子

見た事、した事を、そのまま十七音字に纏めるのでなく、そこに思いや感情といった自分ならではの感覚を詠み込むとオリジナリティのある句に仕上がります。今回の「雨」という題では、雨に心を託した佳句が沢山ありました。

★まず下五の（座り）についての三句。

原 やらずの雨飲み直そうよもう一杯　名都子

ドラマ仕立ての興味深い発想ですが、下6音の座りの悪さが少し気になります。

参 飲み直しするかと窓の外は雨

原 雨の中かまわず遊ぶ幼子や　のりひろ

参 雨の中駆け回ってる幼い子

原 雨宿り甘い匂いのする軒で　風露

着想に意外性もありますし十分佳句ですが、下五の座りが良くなる言葉選びにも目を向けて下さい。

参 良い匂いする軒先の雨宿り

★大切な一文字に心を配りましょう。

原 ローソンに傘かコロッケどっち買う　歌子

一字違うだけですが、助詞によって句姿が変って来るので注意を払いましょう。

参 ローソンで傘かコロッケどっち買う

参 ローソンの傘かコロッケどっち買う

原 雨宿りドラマは起きず雨上る　博之

間違いではありませんが（上がる）の方が余韻を感じる表記のような気がします。

参 雨宿りドラマは起きず雨上がる

★参考にしてください。

原 雨降らし親に仕上げた子の根気　照枝

作者の想いが強かったり言いたいことが沢山あると句をわかりにくくします。作者の意図と違うかもしれませんがシンプルに纏めてみました。

参 親も子も労りあって慈雨の中

原 菜園に待ちわびていた恵み雨　開子

恵み雨という表現が少しぎこちないので（雨が降る）（春の雨）などでは？

参 菜園の芽が待ちわびていた穀雨

原 応急中雨を含んだシート屋根　えい子

シート屋根の表現を変えてみました。

参 応急の屋根のシートに滲む雨

原 雨音は心模様に胸に落ち　智恵子

助詞の使い方に少しぎこちなさが・・。

参 雨音は心の機微を映し出し

原 雨待てず長靴おろす新入児　くにお

新入児は新園児？

参 雨待てず長靴をはく孫五歳

原 雨の中こいだ自転車懐かしい　弥生

懐かしいは言わなくてもわかりますので

参 雨の中自転車こいだ青春記

原 雨音で今日の予定を組み直す　静恵

共感の一句なのですが、事実を報告しただけの形ではどこか物足りません。今日の予定の具象などで場面設定を！

参 病院は明日にしようか春の雨

参 白い服着替え直して春の雨

原 雨の音消して止った救急車　一平

少しずつ状況を変えてみました。

参 雨の音消し走り去る救急車

参 救急車止まり激しき雨の音

原 雨上がるもうあの事は無しにする　不二夫

参 過ぎたことみんな流して上がる雨
参 ご破算にすればいいさと上がる雨
原 用も無いのに氷雨の中を会いに行く　和　夫
素敵な句ですが（用も無い）が少し説明的ですので
参 逢いたいを抱いて氷雨の中を行く
原 後腐れ雨が流してくれること　風　鈴
参 後腐れみんな流してくれた雨
原 ひとりぼち退屈しのぐ雨もらう　幸　子
雨もらうという表現は少しいいすぎでは？
参 ひとりぼち退屈しのぐ雨の歌
原 週末の手帳に斜雨が降っている　えみこ
斜雨という言葉を使いたかったのでしょうが、句をわかりにくくしています。
参 週末の手帳に雨が降っている
原 日々追われたまにはしたい雨宿り　良　子
心の休息を雨宿りとした表現に◎。
参 （家事育児仕事背負って雨の中）の表現も。
原 知ってます降り過ぎるから嫌われる　る　い
面白い表現で大好きな句なのですが雨という題がなければ雨か雪かもわかりにいですし少し題に凭れていると思います。
参 嫌われているのは知っている黒雨

★このままでもいいとは思いますが参考までに再考してみました。

原 雨上がり空を仰いで虹探す　ひとみ
虹を探すのに空を仰ぐのは当たり前では？
参 雨上がり私の虹を探す空
原 雨の日はじっとしている退職後　栄　次
老いてゆく悲哀が伝わってきます。
参 雨の日はじっと耐えてる退職後
原 雨音が静かに心満たしゆく　律　子
参 わたくしの心を満たす雨の音
原 雨垂れに蛇口の雫コンツェルト　閑
参 雨垂れに蛇口の雫響き合う

★添削不要の句

○は佳句　◎は優秀句

○迎え傘雨が止んでも待ってます　玲　奈
切なさが胸にしみてきます。
○ぽっと燃え驟雨に消えた青い恋　誓　子
ぽっと燃えと驟雨の取り合わせが成功！
○雨上がり夢のかけらをそっと抱く　さくら
涙と一緒に流した雨も止み、恋の未練がポタポタリ。夢の欠片は思い出の欠片。
○雨もりの音が記憶の底にある　百　合
雨もりの音は、何となく楽しくて、何となく切なかった記憶があります。微かなる記憶は百合さんの原点なのかも。
○雨降って更に崩れる夫婦仲　徳　子
雨降って地が固まるのが普通ですが逆手に取った発想が面白いです。
○大雨でやっと気づいた樋のズレ　双　葉
大事件が起こるまでズレに気づかない振りをしていた関係。樋の具象が◎。
○雨乞いに神の気紛れ慈雨豪雨　行　久
神様も人間たちの行いに呆れかえっているのかもしれませんね。
○引っ越しの馴れた手つきを笑う雨　龍
菜種梅雨の頃は引っ越しのシーズン。雨さえも苦笑いしているという心優しい見つけにホッとする佳句。
○小糠雨電話で済まぬ義理がある　芙美子
厄介な用事と霧のように細かい雨に義理を重ねた感覚が素晴らしい。
◎わだかまり少し残して雨上がる　邦　子
雨がすべてを流すという句は沢山見ますが、少し残してに人生の妙を感じます。

川柳塔鑑賞

同人吟　宇都　満知子

―5月号から

不味いとは言えず苦手ですという

田中　ゆみ子

好き嫌いもあり味付にもより、口に合わない時は苦手ですと言う。私の料理も気を付けなくてはと思う。

許す気でいるのに言い訳が長い

髙杉　力

神妙な顔で来たので許そうと思っているのに長い言い訳。まず謝って欲しい。

出なかった思いが風呂でふと浮かぶ

菊地　政勝

覚えがあります。心に引っ掛かっていた事や句が、湯舟の中で浮かんできたりする、そんな時は忘れないように急いでお風呂から上がってメモをする。

ほめられてこっそり泣いてしまったよ

安土　理恵

年齢に関係なく褒められると嬉しい。解ってくれていると思うとあたたかくなってくる。そしてまた頑張ろうと思える。

今日も幸せだったとつぶやいて眠る

金子　美千代

今日一日に感謝をする、そして明日も元気に起きられますようにとつぶやいて眠りについている。

一聞いて飛び出す癖がなおらない

古今堂　蕉子

蕉子さんの気っ風の良さが伺える句です。これからも蕉子さんらしくそのままで願いします。

善悪を必死で見てるかすんだ目

折田　あきこ

歳とともにかすんでくる目、でも心の目は善悪をしかと見極める。同感です。

春が来てもカゴの鳥では飛び出せぬ
バナナ一本私のなのに許可がいる

宮﨑　シマ子

九十八歳になられたシマ子さん、いつも塔誌にお名前があり、本社の投句もお名前を聞きました。嬉しいです。

そこらへんにある幸せで足りている

早川　遡行

平凡なくらしがなによりではないか

初代　正彦

平凡に暮らせているありがたさ、何よりの幸せだと思う。

好きなもの数えて五番目にあなた

鴨谷　瑠美子

「あなた」はご主人のことでしょうか。酸いも甘いも共に歩んできた二人、余裕の五番目なのです。でも五番目というの

は内緒にしておきます。

青空の下でわたしを丸洗い

大　沢　のり子

いい天気の日、青空を見上げてこんな気分になります。運動靴と帽子で軽く一万歩を目指したい。

友達は減ったが医者は増えている

藤　塚　克　三

コロナ禍で友達に会う機会が減ってしまった、齢とともにお医者さんへ行くことも増えている。内科、眼科、歯科、整形外科、耳鼻科と診察券が増えても身体のメンテナンスをして、元気に川柳を続けていきたいものです。

値上げラッシュごはん食べてと米農家

山　端　なつみ

朝はついついパンになってしまう。小麦粉の値上げ、追随して麺類も軒並みの値上げです。若い人もパン好きが多く、米を研ぐ炊飯の手間を遠ざける。炊きたてのご飯の旨さは知っているのに。

味噌汁の冷めない距離にある遠慮

村　田　　博

親には親の、子どもには子どもの暮しがある、良い意味での遠慮をしている。この距離は、いざと言う時の心強い距離なのだと思う。

飴玉をほおばり孫と手をつなぐ

山　本　昌　代

幼い孫と手をつないでいた。今は孫が道路側で気遣ってくれる。飴を食べながら、これも幸せです。

予定表に新規加入の白髪染め

奥　田　由　美

髪染めの新規加入、この表現に惹かれました。鏡を見た時若く見えると元気になれます、少しいい気分になって出掛けます。続けるのも面倒ですが、やっぱり染めています。

客用のふとん日に当て息子待つ

永　原　昌　鼓

久し振りの里帰り、息子の顔を見るだけで安心と嬉しさがある。ふとんを干して好物を作って、親心満載です。息子は当り前の顔をして感謝しているはずです。

二十一年猫と居た日は走馬灯

前　田　洋　子

長生きの猫だったのですね。ペットロスでしょうか、寂しさが伝わります、今から猫を飼うのも難しいし。看取った猫も感謝していると思う。

つきあいは物音だけの両隣

村　上　直　樹

コロナが希薄にさせたおつきあい、回覧板もポストイン。雨戸の音がしている、車や自転車の音、時々おいしそうな匂い。お互い元気だと感じられる。

つないで欲しくって空けてある右手

廣　田　和　織

この右手は誰と繋ぎたいのだろうと思ってしまう。愛する人と繋げばあたたかさが伝わってくる。待っていないで自分から繋いでみると喜んでくれるかもです。

水煙抄鑑賞

―5月号から

鴨田昭紀

笑わねば免疫力が落ちてゆく

吉道　あかね

笑うことは健康を保つ最大の秘訣です。折角の一度の人生、大いに笑って楽しく長生きしたいものです。

物語溢れる褪せたベビー服

城戸　誓子

当時はいろいろ大変だった子育ての記憶が蘇える。しかし今にして思えば、あの頃が懐かしく一番幸せだった。

操作法習う側から抜け落ちる

村松　久江

そうなんです。老いを実感する毎日です。特にＩＴ関係についてはアナログ人間には理解し難いことが多い。

闘うより付き合うことにした病

助川　和美

全く同感です。誰もが年相応での病が付きまといますから、落ち込むよりもこれらと仲良く付き合いたいものです。

幸せは一行のみの日記帳

定松　宏枝

平凡な毎日を貫くことは極めて難しいことです。特に何も書くことのない平穏な一日が一番幸せなのです。

頷いてもらえる話だけ選ぶ

裕木　るい

円満な世渡りの秘訣ではありますが、あまり度が過ぎると逆効果になる恐れがあるので注意したい。

コーヒーとジャズが心の常備薬

岡本　余光

コーヒーを飲みながらの音楽鑑賞はストレス発散に効果的ですね。ちなみに私の場合はコーヒーと演歌がよく合います。

あちこちで「三年ぶり」が動き出す

前田　廣幸

やっとコロナも落ち着いてきて挨拶はマスクのことばかり。久し振りに川柳大会で柳友の皆さんに会いたいものです。

徘徊か散歩か迷う靴の底

喜多村　正儀

歩数計を持って毎日のノルマに挑む。同じ歩くのなら、しっかりとした歩調で散歩だと靴に言い聞かせておこう。

再生へひなびた過去を天日干し

武田　悦寛

酷使して疲弊した心だが落ち込んでばかりはいられない。同じ干すのならふる里での天日干しがよく乾く。

ゆっくりとフリーサイズに出合う春

郷田　みや

厳しい冬を乗り切りやっと心身が弾む季節がやって来た。フリーサイズに出合うとは何と素晴らしい言い回しか。

どの杭も隣りの杭を意識する

中筋　弘充

どうしても世間体とかライバルの動きが気になるものです。しかしこれらを励みにポジティブに捉えると頑張れる。

現実は生きるも死ぬも楽じゃない

小川　道子

誰もが人生における夢と現実とのギャップに見舞われる訳だが、特に終章でのピンピンコロリは願って止まない。

■各地句会だより

川柳塔さかい

齋藤　さくら

ふるさとは大仙陵のあるところ　摩天郎

堺市の仁徳天皇陵前に句碑を昭和四十八年に建てられた八木摩天郎が初代会長です。

川柳塔さかいは、54年の歴史があり、今年で650号になります。結社以来、熱意と愛情を持って句会を支え、後輩を指導して頂きました河内天笑元主幹はじめ諸先輩方のご尽力の賜物と思っております。

4月句会は、参加者数は46名（出席33名、投句13名）でした。昨年発足した「狭山川柳勉強会」からも4名の初出席があり、ワイワイガヤガヤ大変盛り上がりました。

川柳塔さかいの特色の一つに「折句」があり、大事に受けつぎ続けております。折句に当てはまる言葉が出てこず四苦八苦することもあります。しかし、とても折句とは思えない、思わず上手いなあと声が出る作品に出合うことも度々です。

最近の折句の作品をご紹介致します。

折句「し・や・こ」

失態をやらかしてから来なくなり　玄　也
試験日の山が外れて声も出ず　じゅん子
シロですよやっていません殺しなど　いさお
心配事山ほどあるが肥えている　楓　楽

折句「す・み・れ」

済んだこと水に流して零にする　満　作
過ぎ去れば見事に変わる歴史観　時　雄
好きな道未来育てる練習着　憲　彦
スマイルで見送る父の霊柩車　進

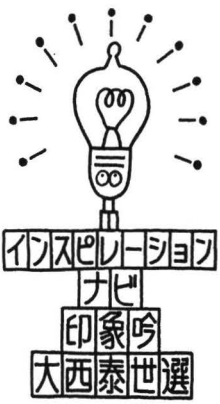
今後とも、良き伝統をしっかり引継ぎながら、「明るく楽しい句会」をモットーに進めて行きたいと思っております。

句会は、毎月第2火曜日、堺東駅北へ2分の東洋ビル2階にて、13時開場です。

一昨年から会長を村上玄也さんから内藤憲彦さん、副会長を矢倉五月さんから齋藤さくらが引継ぎながら、奥時雄さん、澤井敏治さん、高木世紀子さんの7名の世話人で句会の運営をしております。

皆々様には、ぜひ堺東へお立ち寄り頂きまして、私たちとさかいの川柳をお楽しみ頂きたく思っております。

心よりお待ちいたしております。



（投句　172名）

ゴールデンウイークも瞬く間に過ぎてしまい、無駄に過ごした時間の大きさに唖然としています。

まあ、毎年同じような事をおもっているのですけど。サッサと桜は咲いて散り、花水木もまたサッサと咲いて散ってしまいました。

後に残ったのは大雨に地震、コワイことばかりです。

では、ナビを。

春の夜は敵も味方も隙だらけ　藤井寺市　鴨谷瑠美子

（評）何だかほっこりしますね。ふだんならキビシイ敵味方も、春の夜ともなれば気持ちもゆるゆるしますから。

取り説を読まず夫にしてしまい　大阪市　古今堂蕉子

（評）夫にも取り説があったとは、でもアレはものすごーく細かな文字で書かれていますもの、してしまいそう。

どの道も戦に至る交差点　羽曳野市　吉村久仁雄

（評）平和へと通じる道はないのでしょうか、今どきの世界情勢が思われます。人間の叡智を願わずにはおれません。

大切なもの預って固くなる　大阪市　坂　裕之

（評）普通ならどうってこと無いのに、大切なものですからなどと念を押されると、おっと、手が滑りそう！

損得で世の中みんな見てしまう　丹波篠山市　酒井　健二

（評）これ、世知辛いようだけど、意外とシンプルでいいんじゃないですか。人様のご批判も頂けそうですけど。

ジェンダーのとばりさっさと除けなさい　松山市　栗田　忠士

（評）うーん、難しい。そんなものさっさと除けてほしいけど、残念ながら日本ではまだまだ、男女差の意識は濃厚。

ハンドルを握ると変わる私です　箕面市　大浦　初音

（評）こういう人、私知っています。ハンドルを握ると「オラオラ退きやがれ」とのたまうカワイイ顔をした女子。

占い師一人占いひまつぶし　神戸市　上田　和宏

（評）占い師は自分のこととなると分からないって聞いたけどホント？　だとしたら、一人占い、大丈夫？

信号は青になるまでちゃんと待つ　大阪市　内田志津子

（評）当たり前の様でもこれがなかなか難題。青になる前から全身をムズムズさせている人、けっこういます。

異次元の世界へ変わり行く令和　東大阪市　佐々木満作

（評）異次元というコトバの意味がすっかり変わってしまった思いです。大いなる皮肉を感じさせてもらった一句。

不協和音ずうっと鳴っている海馬　堺　市　澤井　敏治

自販機の悲劇ボタンを押し違え　大阪市　石橋　直子

AIは人工　人間は叡智　熊本市　杉野　羅天

ミサイルが飛んできそうな範囲です　松山市　柳田かおる

踏み出してみるかゼロ番線ホーム　大阪市　髙杉　力

知恵の輪が解けない箱を出られない　松江市　石橋　芳山

ボタンホールゆっくりくぐる老いの日々　東京都　川本真理子

捜しもの確かにここに置いた筈　鳥取市　谷口回春子

きっちりとゆるみ無く生き真正直　東大阪市　青木　隆一

弘前市　稲見　則彦
スペアのまま捨てられそうで不安です

唐津市　仁部　四郎
ナムアミダそれにつけてもカネが要る

黒石市　北山まみどり
性格が出ているせんべいの焦げ目

佐賀県　真島久美子
素麺はどちらに流れても此の世

米子市　八木　千代
山の神自由の女神より強し

那覇市　宮　すみれ
満月にリフレッシュするかぐや姫

倉吉市　牧野　芳光
ロシアにもウクライナにもクリスチャン

橿原市　居谷真理子
潮騒を秘めてパジャマの貝ボタン

弘前市　髙瀬　霜石
甘い汁吸ったとバレた苦い顔

東大阪市　青木ゆきみ
前髪は大切なのよミリ単位

豊中市　水野　黒兎
掛け違えしたボタンでも共白髪

尼崎市　近兼　敦子
ちょっとだけ欠けていたって大丈夫

箕面市　出口セツ子
縛っても心は自由天翔る

松山市　郷田　みや
逆立ちをすれば答えが出てきそう

藤井寺市　鈴木いさお
昼食も妻に締められワンコイン

枚方市　藤田　武人
胃カメラに写る昔の悪巧み

箕面市　酒井　紀華
脱炭素植林すんだ青い空

大阪市　今村　和男
内緒ですお好み焼きの裏表

神戸市　みぎわはな
第一釦きっちり留める石頭

大阪市　森　廣子
春の穴毛虫芋虫ダンゴ虫

枚方市　栃尾　奏子
神様になったつもりの核ボタン

西宮市　緒方美津子
DJポリスのいるあの交差点

米子市　後藤　宏之
世代交代邪魔が入ってまとまらぬ

犬山市　金子美千代
マニュアルに書いてなかったどうしよう

大阪市　小野　雅美
見る角度変えて長所が分かりだす

八幡市　武田　悦寛
自販機でしあわせ行きの切符買う

香芝市　山下じゅん子
故郷の空家を守る鬼瓦

池田市　太田　省三
モノクロの怪獣倒すアーカイブ

奈良市　山本　昌代
迷ったら元に戻れと通せんぼ

大阪市　宇都満知子
トンネルを二つ抜けたら隣村

尼崎市　藤田　雪菜
リーダーの腕でまとめてゆく試合

横浜市　菊地　政勝
鉄骨を入れ頑丈なヘルメット

生駒市　飛永ふりこ
脳内も回転させて錆を抜く

松山市　大内せつ子
一生ついて来いなんて真っ平ごめん

防府市　坂本　加代
筋トレにアコーディオンのおじいちゃん

鳥取県　本庄ひろし
どっちなの間違えそうな信号ね

河内長野市　木見谷孝代
ボタンだけはずして出した資源ゴミ

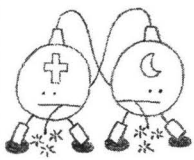
寝屋川市　廣田　和織
困ったら消去ボタンを押してみる

宝塚市　岸田　万彩
神の手が残す小さな手術跡

大阪府　髙木　道子
すぐ曲げる信念向きが定まらず

鳥取市　上山　一平
地球儀に砂丘のらくだ西を向く

8月号発表
(6月15日締切)



(平本　霧石人　画)
柳箋に2句

『麻生路郎読本』余滴(76)

「雪」⑤

棄原道夫

「雪」3号（大正4年10月）から、麻生路郎は、路郎と日車の作品を「新短歌」と称して発表した。

東野大八は、「麻生路郎物語(7)―新短歌運動の〝雪〟発刊―」で、次のように述べている。

〈＊1路郎が川柳を新短歌と銘打ち、川柳における新傾向を目指したのは、鵜平をパイプに碧梧桐を信奉したのだとの説があるが、誤りである。現に路郎は「雪」誌上で碧の講演に反発し、碧の俳壇制圧の態度を激しく非難したあと、彼自身の新短歌観を次の様に述べる。

「今後の自分は何處迄も自己の作品の上には、眞と新との尺度を用いる計りでなく、自己の藝術、自己の生活に對しては飽くまでも眞摯な態度であり度いと思つてゐる。自分は常に藝術を職業としてゐる藝術家や藝術を模倣する水平線以下の藝術家がするやうに一種の隋力によつて創作を續けしかもそれ等の作品を何等の苦痛もなく發表して行くやうな輕擧を甚しく惡むものである。少なくとも自分自身は自己を欺くやうな藝術に生きて行かうとは思はない。此意味に於て自分は何處迄も新短歌の上に不斷の努力を續けて行かなければならないのである。新短歌は要するに自分の日常生活の呼吸其ものであり更に自分の信仰が把持する所の祈禱なのである。」（「雪新短歌會記事」、大5・1「雪」№6）

＊2この主張は子規が明治三十一年短歌革新に手を染めた頃の主張を背景としている。路郎の「雪」における新短歌運動は、子規に焦点を定めていたことは明らかだ。

（＊3「川柳雑誌」昭和32・7・5古稀特集号）〉

＊1　日車の「大阪川柳小史（9）」（「番傘」昭和32年6月）に、〈路郎は一時〝新短歌〟と自唱していたが〉とある。

＊2　正岡子規は、明治31年2月12日から3月4日にわたり、新聞「日本」に「歌よみに与ふる書」を発表した。

＊3「川柳雑誌」同号所載の路郎「川柳五十四年」に、松山で講演をするのに「ワレ柳界の子規たらん」という演題にしようと葭乃に言ったところ反対され、「子規を通して川柳を語る」に落ちついたというエピソードが記されている。

東野大八は、「この主張は～背景としている」と書いているので、正岡子規の『歌よみに与ふる書』を読んでみたが、子規の主張に、路郎の言う「自分の日常生活の呼吸其ものであり更に自分の信仰が把持する所の祈禱」と同じような内容の記述は見られず、なぜ「背景としている」と言えるのか理解できなかった。また、「川柳雑誌」の「川柳五十四年」を見ると、子規に倣って路郎が川柳を革新しようと望んでいたことは確かだが、なぜ、路郎が「新短歌」として川柳を発表したのかが説明されていない。子規は短歌を革新したが、自身の作品を「新短歌」と呼んだことはないのである。

そこで、インターネットで「新短歌」を検索したところ、光本恵子の「口語自由律短歌の歴史と運動」（「うた新聞」2019

年2月10日号）という記事が見つかった。そこに、〈西出朝風は、「新短歌と新俳句」（大正3年）を出す。はじめて「新短歌」ということばを使った〉とあったので、『日本近代文学大事典』（講談社）で、西出朝風と「新短歌と新俳句」を確認してみた。

西出朝風（一八八四～一九四三）

石川県生まれ。明治34年初めて口語歌を作り、雑誌「ミドリ」に発表。42年頃から主として口語歌を「文章世界」「太陽」「早稲田文学」等に発表。大正3年、「新短歌と新俳句」創刊。10月から12月まで全3冊。定型律口語歌運動の最初の雑誌。第4号から「明日の詩歌」と改題。

中野嘉一『新短歌の歴史』（一九六七、昭森社）から、「口語歌の発生」の部分を抄出する。

〈短歌を現代の口語で書けという声は明治二十年頃の言文一致の運動とともに起った。明治二十一年二月に林甕臣が短歌にも口語を用いなければならないとして「言文一致歌」というものの主張をしているが、その試作は甚だ幼稚なもので、歌壇に反響を与えるようなものではなかった。短歌を作る人々の中で、言文一致の運動というものを実行し、口語歌を提唱したのは、明治三十年代頃からで青山霞村、西出朝風の二人の先覚者であった。

（中　略）

歌の世界に「言文一致歌論」も当然起るべきであったし、この林甕臣の主張が出たわけである。また歌の世界では用語の上で特殊の困難な事情があった。二葉亭の苦心を見ても分るように、散文を言文一致にすることさえむずかしい事であった。まして短歌のように、古い伝統と一定の形式をもつものでは、より一層困難な作業であったことは当然で、そのために、小説とか、詩が現代口語になってからでも、短歌は古語、文語的表現から容易に解放されず、いわゆる口語歌運動という険わしい徑を辿ったのである。

口語歌の先覚者西出朝風は明治三十四年に七首の口語歌を「ミドリ」という雑誌に発表している。その一首をあげると、

あすからあそこに光るあの星にいたで
語ろうよ、君とながめて

といったような歌であった。〉

「早稲田文学」（大正2年8月）所載の朝風の「墜ちる飛行機」から三首挙げる。

非運、非運、非運どこまでおちてゆく
空中すべる飛行機に似て。

日の暮れも人の姿のはつきりと
見える五月は、青く、かなしい。

飛行機のやうに蜻蛉がとんで來た、
青い眞晝の疊のうへへ。

光本恵子によると、西出朝風が初めて「新短歌」という言葉を使ったのが大正3年。「雪」の創刊は大正4年8月。ここからは、筆者の推測である。路郎は俳人とも交流があり、当時は古書店を営んでいたので、「新短歌と新俳句」あるいは、「明日の詩歌」という雑誌を目にしていたのではないか。

路郎は朝風の新短歌を見て、自分の生活を真摯に詠む口語歌に共感していた。「雪」創刊号と2号で、路郎と日車の作品を「川柳」として発表していないのは、「新短歌」という言葉でいずれは作品を発表したいという思いがあったからではないだろうか。

（次回に続く）

150 大阪を詠う（2）

大阪は商都とも呼ばれてきました。商都とは商業都市の略ですが、ウィキペディアの「世界の主な商都」には22都市が挙げられ、アジアでは大阪、上海、香港、シンガポールが含まれています。中でも大阪は「大坂」の江戸時代から経済の中心「天下の台所」として発達してきました。

道頓堀の雨に別れて以来なり　岸本　水府
道頓堀コイさんそっと泣いたとこ　片岡　湖風
京橋と鶴橋だけで用は足り　青木　隆一
焼芋に栗の値が付く北新地　髙杉　力
北新地歩いて判る好不況　碓氷　祥昭
大阪城一周りして梅を愛で　油谷　克己
ライトアップ大阪城も残業だ　徳山みつこ

その「天下の台所」も、現代では東京一極集中によって影が薄れてきた気配無きにしも非ずですが、道頓堀や心斎橋や鶴橋の賑わいを見ていると、まだまだ大丈夫と思えます。

北区にある「北新地」は、東京の銀座に匹敵する歓楽街。小遣いで通うにはちょっと敷居が高く、もっぱら社用族が利用しています。それだけに好不況に左右されるのでしょう。

大阪を代表する目玉の一つが大阪城です。そして、その庭園の一角には鶴彬の句碑が建立されています。建立のいきさつや句碑にまつわる作品等について詳しく述べるにはスペースが足りませんので改めて記す予定をしています。

大阪弁の優し豆さんお芋さん　米澤　俶子
まけといて大阪人の口癖よ　足立つな子
値切るとき大阪弁になるマダム　柿花　和夫
大阪弁のトーク泣かせて笑わせて　木本　朱夏
大阪弁ロマンティックに語れない　片岡　加代
オバチャンの大阪弁が闊歩する　竹中たかお
旅たのし大阪弁は全国区　田中　螢柳
飴ちゃんは大阪弁の潤滑油　中山　春代

大阪弁は柔らかで優しくてほんわかさせられます。たまには「けったくそわるい」とか「しばいたろか！」と言うガラの悪い人もいますが、感情を大袈裟に言っているだけで本気で怒っているのではありません。また、しばしば耳にする「アホやなあ」は、馬鹿にしているのではなく「そんなあんたが好きやねん」という親しみが込められています。

息子との段差を埋めるタイガース　伊達　郁夫
大阪で六甲おろし歌わされ　太秦　三猿
カラオケは六甲おろしだけの人　堀　正和
始まらぬ内が花ですタイガース　古今堂蕉子
あと一打また出なかったタイガース　井丸　昌紀
好きなように負けたらええでタイガース　村上　玄也
タイガースグッズに化けたパート代　清水久美子

阪神タイガースの本拠地は西宮市にある甲子園球場ですが、大阪人にとっては兵庫県も大阪圏です。また、通称「六甲おろし」は「阪神タイガースの歌」で、12球団の応援歌の中では一番人気があります。あと一打が出ず「あかんたれが！」と毒づきながらも離れないのがタイガースファンです。

本社 五月句会

◇五月八日（月）午後一時
アウィーナ大阪

ゴールデンウイークが明けた8日、本社句会は、113名（うち投句者25名）の参加で開催された。初出席は西来順子さん（寝屋川市）。今月のお話は内藤憲彦さん。題は「肩と腰のストレッチ」。太極拳の公認指導員でもある氏は昨年の塔まつりの記念句会で、休憩時間を利用してストレッチを指導してくださった。今回はその効用を説明していただき、句会参加者に、実際に体を動かして実感してもらおうという試みである。悪い空気を吐き出し、いい空気を一杯吸う、肘の開閉で肩甲骨を伸縮させる、腕を伸ばして肩で天を突く、腰の上で背骨をねじる、など、力まずに動かす場所を意識しながら行うことで肩こりや腰痛、延いてはビール腹対策にもなるというストレッチを軽妙な話しぶりで指導してくださった。

元気で句会に参加したい私達には、大変身近で有効なお話でした。（眞澄）

月間賞は初代正彦さん（高槻市）
（司会―武人・真理子）（脇取―奏子・勝弘）
（受付―優・ふりこ）（懸垂幕墨書―耕治）
（清記―憲彦・勝弘・国和）

「気」　山野　寿之　選

子は涙気丈装う母ひとり　藤田　武人
元気そう聴こえる雑魚の吹き溜まり　輿水　弘
魂に触れると明日へ湧く元気　出口セツ子
気にしない繰り返すから気にしてる　谷口　東風
日本の大気を吸ってこいのぼり　居谷真理子
底深い人だ鬼とも気を合わす　吉村久仁雄
気ごころがわかりかけたらあの世逝き　鴨谷瑠美子
気のせいか風があまいね脱マスク　木本　朱夏
気持だけいただきますに何出そう　矢倉　五月
気取らずにトライしてます生きてます　柴本ばっは
気散じな質で元気にひとり生き　中村　惠
気がつけば真夏日春を通りすぎ　油谷　克己
通院のできる間はまだ元気　山﨑　武彦
気がつけば妻がわが家の総理です　水野　黒兎
蚊を叩く和尚の殺気見てしまう　伊達　郁夫
気兼ねなく八十歳のどっこいしょ　山田　耕治
気をつけろ白いうなじと京ことば　髙杉　力
気が小さいところは酒でカバーする　新家　完司
義母からの同じ話で気が滅入る　今井万紗子
気のせいか夫婦茶碗が見当たらぬ　加藤江里子
あの娘への視線べったり気を揉ます　小野　雅美
迷惑と気づいていないお節介　澤井　敏治
気位は高いが財布火の車　村田　博
気休めに傷は浅いと言っておく　藤井　宏造
呼気吸気地球が苦しがっている　居谷真理子
裏方が力をつける気働き　青木ゆきみ
気合い入れたら逆に空気が洩れ出した　大久保眞澄
削除ボタン気付いた時は押した後　斎藤　隆浩
草っ原にごろり天地の気をもらう　西出　楓楽
勇気出しきっぱりノーと言う礼儀　内藤　憲彦
異分子が来たので空気入れ替える　木本　朱夏
時々は転びもするが気は確か　森　廣子
好きですと言えば泣かずにすんだのに　島田　明美
姑を施設へやっぱり気が晴れぬ　島田　握夢
気分良く土と触れ合う里帰り　柿花　和夫
足の先まで外気吸い込む雨上がり　石田　孝純
気の抜けたビールのようで頼りない　油谷　克己

佳

入会は気軽 仕事は闇バイト　松岡　篤
夏の気配に若い水着がはしゃぎだす　廣田　和織
淋しさに気楽を混ぜてカップ麺　平井美智子
若葉から気合い入れられ弾み出る　飛永ふりこ
何故かしらあなたと居ると眠くなる　上田ひとみ

人

百歳の元気も昔粗衣粗食　長谷川崇明

地

つばくらめ夏の気配の空を飛ぶ　水野　黒兎

天

陽気です森の小人と喋れます　澤井　敏治

軸

さり気なく空気寄り添う老い番

兼題「通す」　廣田　和織　選

話し合い一方通行さけたいね　福田　正彦
意地通す度に薄れる羞恥心　東　定生
犯人も通した自動ドアの罪　米田利惠子
通し抜く意地を崩した酒二合　津守　柳伸
言い分を通して最後「しらんけど」　岸田　万彩
我を通し生きただけある棺の顔　藤井　則彦
秘め事も全て見通すレントゲン　今村　和男
腕力と詭弁で通す横車　萩原　狸月
悪人はすつと通れる地獄門　今村　和男
医者嫌い灸と鍼で押し通す　北野　哲男
我を通す座り心地の悪い椅子　木本　朱夏
ガラス戸を通して見える幸せ度　東　定生
カラオケは四季を通して「なごり雪」　山下じゅん子
病む母に隠し通している余命　平井美智子
無器用でただ真っすぐな父でした　上田ひとみ
五月晴れ老いの暮しに風通す　山田　耕治
場の空気無視して自説押し通す　伏見　雅明
あの人を通すと広い法の穴　萩原　狸月
正装で通すといつもヘマをする　酒井　紀華
的外れ平気で通す大器かも　安福　和夫
シュレッダーも通してくれぬ古き罪　柿花　和夫
押し通しなさい結果を恐れずに　糀谷　和郎
輪から抜け男の意地を通し切る　伊達　郁夫
すんまへん言い出すと引かない私　江島谷勝弘
呑気で通し喧嘩したことありません　内藤　憲彦
現役を生涯通す脳を練る　川端　六点
亡母を待つ仏間に少し風通す　今井万紗子
オーダーに無いがお通し五百円　藤田　武人
巣の下を通らせてねと声かける　青木ゆきみ
金出すと通れる門が裏にある　松岡　篤
無理難題通した後の孤立感　加藤江里子
かたくなに白のまんまでカスミ草　島田　明美
無理矢理に持論通して苦い酒　松岡　篤
無料パスもらい淋しくなりました　小島　蘭幸
美しいお客は窓際の席へ　居谷真理子
ポロポロと穴あきバケツからウワサ　石田　孝純
嘘八百貫き通し大往生　加藤江里子

佳

我を通し心ザラザラしています　宇都満知子
筋通し肩の湿布が外せない　冨永　恭子
沈黙を通して波を低くする　柿花　和夫
金がある人は奥へと通される　新家　完司
どんな日も笑顔で通す生き上手　中井　萠

人

湯通しをしたら笑顔の春野菜　初代　正彦

地

通せんぼマイナカードを見せなさい　居谷真理子

天

春風を臍まで通す深呼吸　新家　完司

軸

バレてても知らぬ存ぜぬ押し通す

兼題「バランス」　原田すみ子　選

男性が足りませんのと声かかる　山田　耕治
粗食でもちゃんとバランスとれている　片岡　加代
得手不得手晒し人間らしくなる　小野　雅美
シーソーの軸のあたりで疲れてる　髙杉　力
核兵器でバランスとっている平和　川端　六点
号泣の後でもお腹ぐーと鳴る　上田ひとみ
シンメトリーこだわりの家建てました　野口　龍
横道に逸れそう妻が肘で突く　安福　和夫
バランス良い食事と無縁空財布　立蔵　信子
議員数男女バランスまだ遠い　川端　一歩
押さないで片足立ちで見る夕焼け　森田　旅人
塩すこし振れば甘みが増す西瓜　平井美智子
気弱な息子しっかり嫁に守られる　山下じゅん子
猫カフェの翌日に行くドッグカフェ　谷口　東風
忖度に忖度返す凭れ合い　上田　和宏
叱っては褒めて目配り気の配り　糀谷　和郎
身の丈に合ったお人で背伸びせず　阪本　秀子
一年生ゆらりふらふらランドセル　稲葉　良岩
バランスを取るため雑魚も入れておく　伊達　郁夫
バランスの悪さに沈む試着室　冨永　恭子

精神のバランス保つチョコアイス　宇都満知子
五十年傾きながら廻る独楽　山﨑　武彦
バランス良くゆるんで来たわ父と母　柴本ばっは
手話の指素早いバランスあるらしく　矢倉　五月
家業も趣味もそれなりにオンとオフ　初代　正彦
神さまはごほうびくれる唐突に　上田ひとみ
それとなくバランスをとる聞き上手　稲葉　良岩
天国は善人ばかり詰らない　木嶋　盛隆
バランスよく食べ過ぎ目方更新中　森　菊江
気苦労ばかり誰も気づかず竹トンボ　輿水　弘
母の手は愛の天秤半分こ　山野　寿之
妻の入院中は肥えないようにする　石田　孝純
玉の輿の反動しんどく生きてます　島田　握夢
ここという時は夫の顔も立て　森　菊江
父母のバランス我慢くらべと子は悟る　野口真桜子
ひとつがい片方逝ってから転ぶ　古今堂蕉子
大木を支える根っこ地へ沈む　饗庭　風鈴

佳

グーチョキパーそれは平和というかたち　髙杉　力
走ってる間は倒れない二輪　糀谷　和郎
バランスは崩さぬ骨のない男　柿花　和夫
ぎこちなく立っている春先の案山子　石田　孝純
バランスが崩れた母と手をつなぐ　今井万紗子

人

子悪人たまに仏の顔をする　饗庭　風鈴

地

笑いこけ一度バランス崩したい　安福　和夫

天

愛します君が愛してくれたなら　居谷真理子

軸

支出大　我が国ほどじゃないけれど

兼題「湿る」　内田志津子　選

割り切れぬ思い煎餅まで湿る　大内　朝子
湿り気味の打線に活のホームラン　福田　正彦
生傷の癒えない膝に湿布薬　東　敏郎
指先を湿らせめくる札の束　今村　和男
せんべいも心も湿る梅雨の午後　敏森　廣光
高齢化祭り太鼓は湿りがち　廣田　和織
湿っぽい話は明日乾杯だ　齋藤さくら
泥沼に命かがやく蓮の花　酒井　紀華
孫が来て湿る心に陽を照らす　吉村久仁雄
少子化に日本経済湿り出す　水野　黒兎
雪残る尾瀬湿原の山開き　宇都満知子
カラカラの肌にたっぷりヘチマ水　冨永　恭子
祝賀会苦労話に座が湿る　加藤江里子
無礼講湿った話酒で濾過　出口セツ子
湿っぽい話は止そう空は青　中井　崩
モリアオガエル湿気多い日美声出す　西出　楓楽
お湿りが欲しいね真夏日が続く　鈴木いさお
湿っぽい話はよそう宴の席　佐々木満作
妻の手を借りて背中の湿布貼る　今井万紗子
曇天に心の芯が湿り出す　森　廣子
立ち座り助けてくれる湿布薬　柴本ばっは
湿っぽい話をひょうきんが救う　川端　一歩
素肌美人たっぷり叩く化粧水　酒井　紀華
湿っぽい話は止そう花の下　坂上　淳司
湿っぽい話はやめて酒や酒　斎藤　隆浩
くよくよを生駒登って天日干し　内藤　憲彦
カサカサの胸をビールで湿らせる　新家　完司
春ですね月もうるんで物思い　居谷真理子
負け試合応援団も湿りがち　西上　遊二
たっぷりと保湿それでも増えるシワ　片岡　加代
湿っぽい話ご法度縄のれん　長谷川崇明
狛犬の苔むす背にもカタツムリ　饗庭　風鈴
からからの詩嚢にたらり酒二合　山﨑　武彦
湿っぽくならない白寿の弔い　宇都満知子
嫌やなあ下履き湿す咳くしゃみ　坂上　淳司
学生寮二合の釜と湿気た海苔　青木ゆきみ
湿っぽい話は春の天日干し　山野　寿之

佳

お湿りに明日は雨だと疼く腰　惠利　菊江
傷ついた孫へことばの温湿布　初代　正彦
カラフルさ競うあじさい梅雨最中　佐々木満作
うるおいを保つ秘訣は恋をする　木嶋　盛隆
湿った木火を付けたのは名コーチ　萩原　狸月

人

かびぬよう心の窓を開けておく　冨永　恭子

地

湿り気を帯びて女が出来上がる　青木ゆきみ

天

つないだ手じっとり湿る十五の春　古今堂蕉子

軸

湿っぽい話はゴメン春だもの

兼題「景　色」　新家　完司　選

ひた走る汽車が紡いでいる景色　古今堂蕉子
ほっこりとサザエさんちのいい景色　大内　朝子
波打ち際テトラポットが幅きかす　山下じゅん子
海に崖ありて終ったサスペンス　野口真桜子
三合を越えると天国の景色　鈴木いさお
マンションのグレード左右する景色　清水　英旺
部屋代に加算されてるいい眺め　北野　哲男
水車小屋メイン地元の観光課　荻野　浩子
落ち葉にも景色を飾る位置がある　伊達　郁夫
星々が飾ってくれる過疎の村　酒井　紀華
旅立ちと真逆の景色見る帰郷　吉村久仁雄
ハルカスが倒れてきそう僕の家　柴本ばっは
いつか見た景色ひとりで見る景色　髙杉　力
新緑の長居公園気が晴れる　坂　裕之
学び舎はリフォームされてケアハウス　糀谷　和郎
まだ見たい景色あるのでスクワット　森田　旅人
天辺までは眺めたジェットコースター　小野　雅美
リサーチで満点とった星の村　野口真桜子
白内障術後の景色３Ｄ　山下じゅん子
地獄極楽バンジージャンプから見えた　小島　蘭幸

おはようもごはんですよも無い朝だ　栃尾　奏子
ふらここあの子とボクはセピア色　稲葉　良岩
股覗きすると新鮮ビルの街　柿花　和夫
股のぞきしている人を写メに撮る　森松まつお
自販機がポツンと過疎の交差点　平井美智子
旧き佳き浪花が変わるＩＲ　木本　朱夏
出張と旅行で変る町の景　水野　黒兎
柿の木が消えて迷子になる故郷　藤田　武人
いい景色妊婦に子ども席譲る　川端　一歩
背をかがめ子の高さから街を見る　森　菊江
見る人の心で変わる万華鏡　阪本　秀子
レンコンの穴から覗く死後の景　木本　朱夏
特急に乗ると見逃すいい景色　藤井　則彦
あの山の向こう戦争まだ続く　内藤　憲彦
景色を物語るウクライナ国旗　江島谷勝弘
スマホから顔をあげたら春だった　岸田　万彩
グルメツアーだあれも景色見ていない　川端　六点

佳

春がすみ輪郭溶けた人ばかり　大久保眞澄
チャリンコが乗り捨てられている広場　平井美智子
ヤボな男をキザな男にする夜景　島田　握夢
新しい戦前なのかこの景色　居谷真理子
栄転と左遷で違う富士の顔　柿花　和夫

人

オーシャンビュー聞こえは良いが崖っぷち　斎藤　隆浩

地

養花天京都は円い山ばかり　稲葉　良岩

天

逆上がりできた地球がころがった　島田　明美

軸

草原の隅にゴマ粒ほどの僕

兼題「自由吟」　小島　蘭幸　選

値上げラッシュに何思う啄木忌　緒方美津子
秀才と才媛の子がこのワタシ　米田利惠子
「知らんけど」付けて話を軽くする　片山かずお
叶うなら桜吹雪と逝くあの世　新阜　義明
理由ありの二匹が暮らす金魚鉢　長尾　千賀
悪いことできて死ぬ気が起らない　岸田　万彩
いい余生酒と川柳駒の音　川端　一歩
コロナ禍に広げた畑持て余す　村田　博
出だしだけさびだけ歌うのが得意　古今堂蕉子
食べてみたいお勧め料理時価ばかり　斎藤　隆浩
今日も感謝天声人語声出して　今井万紗子
ふるさとを描けば父の水車小屋　平松かすみ
敵兵も愛しい人が居るんです　松岡　篤
破顔一笑どなただろうと美しい　上田　和宏
さわやかな朝いただいた昭和の日　山田　耕治
ヘタな字でいい平和と書いてみよう　青木　隆一
キムタクと同じ台詞を言ったのに　糀谷　和郎
座ってるだけで疲れる古希の坂　齋藤さくら
外国人Ｔシャツの文字「四面楚歌」　青木ゆきみ
消しゴムをあげよう前を向けるよう　栃尾　奏子

筍に蕗に蕨と腕が鳴る　冨永　恭子
雲を掴んで父は夢見るひとだった　木本　朱夏
ジャンケンは強いがババ抜きは弱い　鴨谷瑠美子
蜉蝣のような誇りが邪魔をする　森田　旅人
エゴサーチしている真夜の影法師　木本　朱夏
楢山が近いと足腰が叫ぶ　荻野　浩子
ノーコン病トミージョンでは治せない　安福　和夫
秘境の湯にまだ生きていた丸ポスト　坂上　淳司
子も巣立ち田舎移住のチラシ選る　内藤　憲彦
若い日の主題歌でした「神田川」　鈴木いさお
オッサンになるとクシャミがでかくなる　大久保眞澄

補聴器は尖った声をよく拾う　山野　寿之
凄い原発をすべて止めたドイツ　江島谷勝弘
老いて今透明人間になろう　西出　楓楽
ネモフィラの海で泳いだ気になった　谷口　東風
ミサイルは飛び交い鳥は睦み合う　吉村久仁雄
抱きしめてあげる幸せ分けたげる　中村　恵
喋り出すまでは訊かないことにする　高杉　力

佳

春の町ポップコーンが欲しくなる　新家　完司
停戦合意休肝日ほどのこと　大久保眞澄
生きるって嬉しいことよタンポポポ　居谷真理子

カーナビに桃源郷を入れておく　伊達　郁夫
ヘルメットがおしゃれチャリンコおばあちゃん　油谷　克己

人

まんまるい月のかたちをした孤独　平井美智子

地

渚にてこころの粒粒を拾う　桒原　道夫

天

転ぶのは神の戒めではないか　**初代　正彦**

軸

風上に立つと仁王に見えてくる

２０２３年度　川柳研究誌上大会

課　　題（各２句）　二人選
「ばらばら」　佐藤　孔亮・林　　はな　選
「清々しい」　平井美智子・河合笑久募　選
「滑　　る」　髙瀬　霜石・齋藤由紀子　選
「性　　分」　安藤　波留・安藤　紀楽　選
投句方法　応募用紙(コピー可)、または便箋へ一行置きに。住所、氏名、電話番号を明記。一人１口まで。
投 句 先　〒353 － 0006
志木市館２－３－６－1403
のべ　ふゆは方
川柳研究誌上大会事務局
投 句 料　１０００円（切手不可）発表誌呈
締　　切　**７月３１日（当日消印有効）**
問 合 せ　電話 048-472-8885　のべ　ふゆは
賞　合点５位まで楯･30位まで記念品
発　　表　「川柳研究」誌１０月号
主　　催　**川柳研究社**

第23回　四万十川川柳全国大会

日　　程　８月２６日（土）　午後１時～
会　　場　幡多信用金庫　本店会議室
四万十市中村京町１丁目
式 次 第　講演、講評、表彰式、席題入選作披講等
【募集要項】
選　　者　木本　朱夏
投　　句　雑詠２句１組１０００円、何組でも可　未発表作品に限る
投句用紙　所定用紙（コピー可）
投句締切　**６月２６日（月）**
賞　大会賞、四万十市長賞等
問合せ先　四万十川川柳全国大会事務局
岡村　義史
電話・FAX　0880－３５－４８６３
主　　催　**幡多信用金庫**

柳壇

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願いいたします。
編集部

川柳塔打吹（鳥取）　斉尾くにこ報

コロナ禍でどこへ行くのもマスク友　悦子
自己判断マスクはずすかつけとくか　久芽代
マスクした女性は皆んな美しい　石花菜
マスクしてキチンと並ぶ日本人　富隆
今付けておきたいマスク桜色　三津子
こととととマイペースです生きてます　大鯰
エンドレスこととこっとん水車小屋　照彦
こととこの内緒話がよく聞こえ　陽之助
真似てみることこと煮れば母の味　滋
コトコトと春の陽気が戸を叩く　清
こととこととと雑音聞こえ邪魔をする　貴恵
聞かすふりしてこととこととひとり言　美知江
こととこととと隣の部屋で詐欺の指示　義人
グループの中で浮いたら致命傷　余光
浮き沈みあって人生面白い　重忠
浮玉よ一緒に浮いていいですか　紀子
夫には浮気心でさらわれた　紀美恵
川面に浮く花びら恋はつかめない　みゆき
微笑みも不敵に浮かぶ独裁者　紀の治
雑念を忘れ落ち着くお茶の席　芳江
爽やかな笑顔で席を譲られる　重利
シルバー席に納得出来ぬまだ卒寿　節子
日溜りの席に睡魔が棲んでいる　芳光
友だちはいいなわたしの席がある　宣子
我が家には何処にでもある自由席　龍枝
原っぱの自由席にも春が来た　完司
微動だにしない座席のうす衣　美ッ千
春の川水鳥たちの談話室　くにこ

城北川柳会（大阪）　近藤正報

婆ちゃんのプライド最後まで自立　満知子
王手掛け見事掴んだ世界一　賢子
わたくしの背筋支える自尊心　朝子
「アイシテル」耳の残って眠れない　千恵子
プライドをくすぐっている誉めことば　克己
裏の裏読んでははまった落し穴　北舟
寂しいがほっと一息子の巣立ち　廣光
虎落笛囁くように春を呼ぶ　野鶴
出来た方いや運ですとご謙遜　篤
春うらら風の囁き聞くテラス　隆浩
凄いねえ翔平さんと聡太さん　一歩
退院ですと医師が囁く耳もとで　万紗子
大阪弁囁き出来ぬアクセント　正彦
囁きが千里を伝播する怖さ　満作
ほんまならここらで膝を崩したい　繁子
譲られた席でプライド痩せていく　郁夫
憧れをやめて誇りをもって勝つ　章
情かけ一手待ったら逆王手　榮子
期待背に王手がかかる三浪目　俊雄
フンフンと聞いているだけ人の愚痴　峰子
終焉は「王手」と言ってポックリで　千賀
爺は孫に王手を取らせ花もたす　福貴子
ズワイ蟹内緒話はロシア語で　博
囁きに負けて膨らむ猜疑心　亜成
プライドを捨てて足腰弱くなる　和織
プライドを捨ててやさしい風に逢う　星雨
年金に王手をかける物価高　和夫
人間が地球に王手核装備　黒兎
湯の中で揺れる桜も春を呼ぶ　ゆきみ
それはあれあれはあれやと酒を呑む　隆一
恐いものなしほど恐いものはない　宏造
動物園行かずも熊は町に来る　五月
優しいかどうかは人が決めること　恭子
回復のみこみ絶対ない老化　こみつ
満開で花壇の時計役立たず　久美子

川柳塔みちのく（青森）　稲見則彦報

華奢な父ちょっと心配肩車　孝子
幸せな父子の構図に肩車　真由美
肩車一本決めた金メダル　一呑
肩車技が決まった柔道家　龍馬
女性でも肩車する優勝者　柳子
子は嫌い父さんだけ好き肩車　和香子
高所恐怖症肩車でも大嫌い　のぶよし
騎馬戦の勇猛果敢かた車　風来坊
親と子の絆の一つ肩車　ふさゑ
孫を背負い肩車する祭り好き　重虎
孫連れてパンダ見ようと肩車　友二
ネプタ観る特等席は肩車　慕情
縁日の父の肩から見た景色　則彦
観桜会バナナ片手に肩車　英子
花の迷路孫と戯れ肩車　洋子
弟だけ肩車されむくれた日　ひろ
年金の未来予想図肩車　規子
肩車娘がはしゃぐ花火咲く　初枝
ねぶた見る肩車してと手をのばす　澄子
貧乏神としていたらしい肩車　霜石
肩車北斗七星近くなる　隆樹
真冬日のハウス苺は話好き　劦
足腰を和式トイレで鍛えてる　義明
雪女よりも寒気のするこの世　美鈴
自由席雪が勝手に降り積もる　ひとし
実はねえ私の母は雪女　吹喜

和歌山三幸川柳会　西川千鶴報

戦争にゲルニカの絵が泣いている　敏照
絵に書いた餅でも餅は美味しそう　一雄
ストーブの風送りたいウクライナ　まき
芽を出した生気あふれる野菜くず　宏枝
すれ違う風にいのちの音を聞く　俶子
理不尽も呑んで浮き世の風に乗る　純子
本物の絵だ落款が薄れてる　ひろ子
かげろうを追ってわいわい風の私語　碧
ピカソより可憐な妻を描いている　菜摘
生温い風には句読点がない　和子
風ぐるま今日のドラマが回り出す　昭枝
遠回りしたが見付けた花の道　起世子
私を鍛えてくれる向かい風　保州
共白髪ぬり絵のしばし年忘れ　悦男
朝の窓お元気ですかと千の風　眞智子
つらいこと柳に風と生き上手　義泰
春になればやさしい言葉紡ぐ風　あき子
上下左右どこから見てもピカソの絵　明子
大人には真似の出来ない園児の絵　康則
似顔絵がそっくり過ぎて不満顔　(松)純子
この自画像好きで墓場に持っていく　彦弘
速い球あるから生きる変化球　俊介

牧野芳光選

人生のバラバラ漫画あと少し　紀の治
バレンタイン棘を外したバラになる　紀子
鈴ひとつ買って小さな旅おわる　澄夫
底のない箱です愛の贈り物　かこ
早春の山を転がる四分音符　章子
若き日の日記本当に僕なのか　宣之
賞味期限舌と鼻とで決めている　美緒
悪知恵も背負って帰るランドセル　隆浩
補聴器で聞かなくてよい話聞く　香代
非正規の星屑らしき流れ星　和織

佳句地十選（5月号から）

出口セツ子選

後悔を一つ残して今日も暮れ　ふさゑ
停戦は見えず命の明日は見えず　千恵子
もう一度踏み出す靴を買いに行く　菜摘
血の赤で地球を染めるクレムリン　久仁雄
祈ること出来る十指にある温み　栄香
いい言葉心にそっとコピーする　治代
生き方はつまり死に方だと思う　拓治
正論の裏にかくれていた本音　(米)俶子
もう阿保でいようと決めて義母介護　后子
惚け爺も大統領も土になる　石花菜

ときめきの風へ素直に乗ってみる　和美
家康の言う通りだな生きるとは　妙子
細々と生きてきっちり税納め　剛
子に還る母へより添いわらべ唄　臣展
絵画展出したあの日を巻き戻す　八重子
生き方も十人十色わたし色　よしこ
生き抜くぞ鏡の中の我が笑顔　夢子
解らぬ絵個性的だとほめられる　澄夫
聞きたいとムンクの叫び耳澄ます　博美
何気ない所作の向こうに生きた道　桂子
春一番待ちわびている母の杖　舞
四季の風あって唱歌を口遊む　幸
年毎に休止符多くなる気力　千鶴

富柳会（富田林）**山野寿之報**

新米の教師に注ぐ熱視線　和子
老い二人学びの庭の泥団子　涼子
日の光日ごと春めきちょうが舞う　正義
老人会同じ話を今日も聞く　由夏
お出掛けにやっぱり一つ忘れ物　きみ子
語り部の夏に欠かせぬヒロシマ忌　寿之
春爛漫一気呵成の花筵　壽峰
入学の顔よりでかいランドセル　欣之
新米が研修終えて場を仕切る　高鶩
春風に心の鍵を外される　恵
新米になって人生やり直す　一文

愛しさのこぼれ桜に夢を見る　由子
ネクタイは解かずそっと衣紋掛け　武人
九条を入れた金庫の鍵が無い　隆充
BGM高めのカフェに遠慮気味　義明
強欲も清廉もある我が矛盾　圭
わたくしを生きて悔いなし散る桜　あかり
真夜中のラジオでルンバ愛踊る　勝矢
晩学の海の深さを知らす辞書　常男
この戦誰が益した武器の墓　和雪
ちょい軽く明日にしようと休肝日　正邦
ヴィヴァルディの春は七彩踊る音　章子

ふうもん吟社（鳥取）**山下凱柳報**

りゅうぐうが宇宙のえぼから帰還せり　隆浩
やっかいな草刈り鎌もえぼ次第　一平
古希過ぎたこのえぼに咲く花もあり　頼太
えぼを視て己の未来予測する　回春子
（えぼ＝因幡方言で先っぽ）
挨拶をしなきゃ笑顔は生まれまい　昌鼓
ご先祖がささやいたのか煙揺らぐ　金祥
耕した土の中にもいる命　宏章
拝啓で始まる手紙持て余す　菊江
寂しがりやの心を歌うハーモニカ　舞
千の風また柳友連れ去った　振作
約束が叶い靴音高くなる　哲子
立ち上がるときの大地があたたかい　拓治

そばに居てやさしい色で咲く桜　紫陽
美辞麗句並べて弔辞読み終える　稲作嶽
美辞麗句並べて競う披露宴　毅
並べてる基盤の上の息遣い　賢悟
日向ぼこ丸い背中は穏やかだ　美知江
赤白黄色並び音符は春描く　八千代
雨を聴く度に並べる愚痴その他　美ッ千
花金を待ってた頃がなつかしい　紘一
週末をタイムカードに縛られる　蛙鳴
週末は御無沙汰をした大掃除　(門)千代
週末はお休みですと返事する　紀美江
週末は度を越さぬ酒飲んでよい　蟹郎
週末は倍の速さで陽が沈む　みゆき
日曜の慈雨は終日クラシック　欣之
寒い日は湯気が恋しい鍋料理　節子
わが家が恋しくなったケアハウス　重忠
在りし日の恋しいあの娘今どこに　勲章
恋しさの裏表が怖い嫉妬心　茶人
あの山を昇れば亡母会えるかも　(久)千代
恋しくて亡父母と会話をする墓前　真理子
ふる里を捨ててふる里恋しがる　無限
夫逝き恋し恋しと八十路妻　亨
人生のえぼに待ってる青い鳥　凱柳

川柳塔鹿野みか月（鳥取）**福西茶子報**

元気出せ発破を掛ける妻の声　草文

金無心猫撫で声の我哀れ　ゆたか
齢経るごとに目標ハルカ遠ざかる　大　鮟
遥かだと仰いだ八十路今歩む　完　司
真面目です生一本の趣味の道　一　平
直角と四角は好きだが丸苦手　白　周
真面目だけでは心掴めぬようだ　孔美子
誘惑が真面目なドアをこじ開ける　すみれ
酒場には今宵も集う恋敵　恒
腰に手を彼女をリードダンス場　文　道
捜してもいつもの場所にないメガネ　静　恵
人間も磨きがないとただの人　弘　六
三度ずつ磨き元気な自前の歯　孝　子
九十六・二十五本の歯を磨く　重　忠
磨く歯がある幸せにふと気付く　宏　章
遥々と会いに来たよと孫二人　瑞　子
こぼれ種置かれた場所に根を下ろす　弘　子
戦場に散った命は愛のため　正　昭
生きている現場に僕の血は流れ　小　鹿
恥曝す場所は誰よりも踏んだ　茶　子
キッチンのいつもの場所が癒しの場　楓　花

南大阪川柳会　松岡　篤報

息を呑む絶景なれどすくむ脚　蟻日路
喜怒哀楽全て呑み込み終章へ　国　和
ラブレター呑み込みポストより赤く　昌　紀
百歳でそちらに行くと閻魔に予約　シマ子
アポなしの方は会えぬとお役人　いさお
手帳には医者の予約の印だけ　直　子
地獄なら空いてますよと閻魔さん　一　歩
天国の予約へ積みあげる善意　克　己
根回しを秘書に任せて泳ぎきる　常　男
国民はミサイル買えと言うてない　勝　弘
拝まれて丸投げされた後始末　大　子
旨い酒うまい料理はお任せで　志華子
任せなと言って懐探り合う　まゆみ
点滴に命任せる一滴　弘　子
任されてギョウザ百個を作ってる　蕉　子
寄り道が好きなタンポポ風任せ　力
人任せできない質で小商い　東　風
ポイントをうまくつかんで生きている　ルイ子
ポイントを上げた涙と薄化粧　千鶴子
チマチマとポイント溜める妻の趣味　柳右子
ポイントをついて弱点責めてくる　亜　成
自然体がチャームポイントですわたし　楓　楽
何事もコツ覚えればあとが楽　加お里
スマホって嫌いじゃ無くて使えない　篤
このごろはなんでもネットわからへん　峰　子
いらちにも大満足のまわりずし　柳　伸
狭き門お金次第で広くなり　実
訃報欄同じ持病の同い年　俊　雄
あの年の三月のこと忘れない　江

竹原川柳会（広島）　古田比呂子報

かぐや姫一度は見たい天の舞　節　生
菜の花が咲いて待ってる蝶の舞　慶　子
干大根煮ようか小雪舞う夕餉　弘　子
春野菜おいしくなあれと蝶が舞う　千代美
菩提寺の花びらてのひらに受けた　蘭　幸
白昼の死角を狙う詐欺が増え　宣　之
にんげんの愚行を笑う昼の月　昭　紀
コロナ減り春も近いしランチ会　比呂子
縁側でついひとりごと日向ぼこ　夢　香
昼の月浮かべ至福の露天風呂　栄　香
父母恋し故里の岬よ遠からじ　笑　子
夕焼は岬と海を混ぜて溶く　京　子
岬にも春のきざしか花遍路　敬　子
ちっぽけな悩みと笑うのは岬　白　狐
荒波に削がれ岬の顔になる　和　子
辛い時包んでくれた岬です　輝　恵
孫二十歳竜飛岬の先に立つ　団　風
岬からニッポンイチの陽が昇る　節　夫
春の声聞いてみようか散歩道　歩　美
張り替えた障子へ妻が降りてくる　幸　子
コロナ五類亡母のレモンに会いに行く　厚　子
お陰様いつもの席で法を聴く　初　音

余命わずか一日一刻大切に　貞子
ドーナツの丸を覗いてみな笑顔　史子
メイクしてむかう光の差す方へ　千枝
トマトたべたらぱっと目がひらくよ　小二　沙弥
人形とゆめの中でもあそびたい　小一　央

はびきの市民川柳会（大阪）藤原　大子報

風みどりぶらりふらりと大和川　憲彦
庭覆う緑を残し春はいく　一文
冬が去り緑が芽吹く散歩道　千鶴子
美しく緑の小さな冬の苔　専平
よもぎ餅春を胃からも楽しんで　庸郷
少しずつ緑の芽が出山笑う　フジ
青と黄を混ぜて緑を作る知恵　いさお
ピッケルを磨けば緑の山おもう　瑠美子
グリーン車でプチ贅沢な旅気分　ちづる
胸張って生きる大地の風みどり　みつこ
抹茶点て訃報の友を思い遣る　大子
緑消え黒一色のウクライナ　勝久
しあわせを感じる湯があふれる音　勝弘
溢れ出る情熱子どもアスリート　冬のト
里帰り笑顔溢れるジイとバア　さくら
溢れるほど金は要らない程々で　こみつ
溢れ出る嬉しさ余る孫八人　洋一
どの子にも溢れる愛を真心を　かつ美
今生きる溢れる程の愛を受け　ひとみ
少しずつ笑顔あふれる回復期　宏造
持ち駒が溢れていても負けは負け　一歩
湯の街に溢れる情緒下駄の音　まつお
あふれる思いを追伸に認める　扶美代
深い森溢れる命抱いている　泰子
母なればこそのよろこび乳の張る　理恵
ほどほどに枯れて溢れる人間味　久仁雄

長柳会（大阪）　大島ともこ報

何処までも知らん忘れたいつもの手　ともこ
のほほんと暮らせと医者が無理を言う　正美
ゆっくりと老いが近付く気配あり　ヒロ
昼寝つき檻のライオン大欠伸　由夏
のほほんと暮らすも良いが味気ない　幸子
筋金入りだぞビカドンも知る飢えも知る　直樹
ミサイルを恐れる子らの無表情　淳司
旅立つ日車窓に友のおどけ顔　純風
大谷のうなる決め球さすがプロ　克巳
さすがです高校球児夢与え　規之
趣味仲間競い合いつつ旬でいる　孝代
プロセスを辿ればみんな良い仲間　和子
まだ充分あると思っていた預金　隆彦
スマホ生活指が憶えて脳劣化　光弘
親切が忘れた頃に福を呼び　ふみ
苦楽を共信じて添うた老夫婦　澄子
好きだから小さな喧嘩してしまう　正博
カレンダー花丸増えて春が来た　福子
翔平の二刀流で締めくくる　靖博
腹八分案外入る残り二分　孝
里帰り母が内緒のポチ袋　たけし
捕えたが始末できずに飼うネズミ　くにお
三年間素顔見ぬまま卒業す　おくみ
姥桜恋し愛して咲いて散る　由子

倉吉川柳会（鳥取）　大羽　雄大報

一日も早い春待つウクライナ　龍枝
ばあさんが流行だよとミニスカート　紀美恵
当分は顔認証で行きましょう　鬼一
流行の疑似餌でためし釣りをする　重忠
ぽかぽか陽気私の頭もぽかぽか　風露
顔マスク化粧はぶいてマユは書く　さちこ
冬ごもり早目の夕食夜長い　恵子
春が来た畑の草が欠伸する　智恵子
真夜（しんや）中脳に渦巻く過去未来　日出子
小顔です大きい顔が出来ません　けいこ
イケメンを通し続けるのに疲れ　凱柳
流行語大賞年あらたまりポイッ　大鮟
流行を追って自分を見失う　麦青
夜になり酒が声かけ飲みに行く　道春
流行の服はないけど手作りで　由紀子

赤ちゃんはみんなアンパンマンの顔　完司
老人はついて行けない流行語　酔芙蓉
昼の月夜の輝き失せ朧　照彦
親の顔空気読んでる子は立派　雄大

川柳茶ばしら（愛知）　金子美千代報

年寄りによくある話あんた誰　遡行
二食分作って残す独居飯　まみ子
バイキング欲で取りすぎ残す罪　三樹夫
他人事でない頻繁な救急車　かつ子
手抜きしたつけ外すに外せないマスク　美千代

川柳ささやま（兵庫）　北澤　稠民報

遺伝子が今夜も酒を所望する　哲男
過去拭いてみたが汚れは落ちぬまま　稠民
遺失物届け出した後から出た財布　剛
スーツ着て社会人です孫娘　重男
お隣もふたり暮らしの過疎の村　良子
これでいい八十路暮らしの事足りて　美智子
四月馬鹿ウサギが跳ねた木の根っこ　哲夫
待っていたつばめに逢える青い空　すみえ
鏡の中老婆と同じ私居る　恵子
口笛で競演してるウグイス　純子
桜雨わたしも泣いていいですか　ひとみ
健足で歩きながらに夢描く　照代

ほたる川柳同好会（大阪）水野　黒兎報

BGMはせせらぎの音手術室　正子
遡上して子を成す魚のど根性　純子
道頓堀グリコが見てる初デート　蟻日路
川の字でたまに寝にくい夜もある　一弥
ネオン川で溺れかかった青春譜　宏造
温暖化きれいな川も狂わせる　勝弘
古都の夏川床料理舌つづみ　奈津子
美しい日本語を知る古い歌　契子
古ければ価値があるかと思いこむ　順子
古い物一つ減らすが我が日課　直子
半日は忘れておれる居ない妻　則彦
花の宴輪の真ん中に一升ビン　春代
春だからワインカラーでいくデート　黒兎

プラザ川柳（大阪）　藤塚　克三報

チャーター機でしゃもじ贈って誤解され　克三
近眼で接近しすぎ誤解呼ぶ　園子
泥棒がそ知らぬ顔でアッカンベー　政夫
マスク取れ吾子が泣きだす顔違う　靖子
京言葉ぶぶ漬け如何真に受けて　悦夫
病院でうそを連発良い結果　景子
物価高忍びず味見期限切れ　和代
平和の世いつしか忍び寄るまさか　一彌
二兆円これも借金マイナンバー　清乃

忍法を使いキーウに居た総理　弘光
掛け違い誤解そのまま友が逝き　正子
義理チョコに爺ちゃん心ときめかせ　淳司

川柳花の輪（大阪）　川本　信子報

春の陽射しに睡眠術をかけられる　和織
陽射し受け花一斉にこちら向く　順子
吉野山陽ざしに映えて山笑う　泰子
来春も待っていてねと桜散る　やすの
婆ちゃんがおしゃまな孫の口押さえ　正太郎
はらはらといつも息子に向く視線　亜成
はらはらとドキドキばかり子の舞台　笑子
負けそうになるとテレビに寄ってくる　博泉
地震国揺れてはらはら再稼働　信子

きゃらぼく川柳会（鳥取）後藤　宏之報

今日もまたヨイショヨイショと独り言　久直
押し売りも押し買いもある電話鳴る　俊久
蘭展のテレビで弾む婆三人　令位子
張り込んだ自分自身へバレンタイン　ひろし
夕食は鍋がいいねと雪が降る　紀の治
終章は等身大で舞いおさめ　恵子
大山さんに生かされました一世紀　千代
OBの会年金カラー蟹カニで　菜々
不可侵条約を夫婦でも結ぶ　宏之
少しづつ春の訪れ若芽食う　瑞枝

賞味期限舌と鼻とで決めている　美緒
雨音もポツポツポツと聞こえる日　美穂
青春のきらきら抱いて友が逝く　宣子
みかん食う猫背になってみかん食う　雨奇
いい言葉心にそっとコピーする　治代
喉元で言葉が消えるまぁいいか　多美子
川柳に行く日は早く起きている　日枝子

川柳さんだ（兵庫）　酒井　健二報

一斉に植え一斉に寿命ソメイヨシノ　英秋
西行より上手く詠みたい花見の句　徹
昔なら花見は梅のことでした　哲男
花粉症花見か昼寝か迷ってる　喜久子
都賀川の悲しみ忘れ児と花見　哲夫
無力でも死ぬわけいかん風を呼ぶ　厚子
勝ち組になれぬ仕組みができている　洋次郎
無力でも精いっぱいに空の下　ヨシヱ
自然災害人の無力を炙り出す　廣光
闇バイト若者達を使い捨て　玲子
善悪を木魚叩いて悟る人　敏夫
日当百万食指が動く私でも　洋一
悪さする時は生き生きしてる君　和郎
何故かしら悪い予感はよく当る　重男
天使にも悪女にもなる女性たち　祐康
噂では悪女にされているらしい　義徳
死刑だと汚名のままに半世紀　雅尚
春風がノックするので来た句会　利子
ノックアウトをさせたい奴が逝ってもた　勝弘
春の陽が萎んだ心ノックする　(高)千賀子
監督がノックで空振り甲子園　雄太郎
飛び立て息子躾糸切り離す　宏造
いつまでも子離れ出来ぬ親の性　重男
離れても瞼の裏に父と母　迪
シャチハタで結構ですと離婚状　野薫
まだ元気愉快に生きて旨い酒　一子
しっかりと夢をつかんだ春帽子　優子
ひまわりの迷路にもがくロシア兵　博
鶴彬ならばどう詠むウクライナ　おさむ
なあミケよそろそろ炬燵終おうか　耕治
余生とや大きな鍋はもう要らぬ　美津子
花の香を大地にこぼすにわか雨　修平
煮崩れをしない女とボタン鍋　万彩
今ここであなたを変える風が吹く　ひとみ
坊さんが愚痴っています家族葬　健二

川柳あまがさき（兵庫）　大浦　初音報

蕎麦運ぶ出前自転車見た昔　隆一
ドローンで運ぶ離島の医薬品　英坊
充電器有ったら良いな私用　楓華
皆のねがいプーチン投げるバンクシー　初音
ど忘れて思い出す事夢の中　佐和子
笑ってはいけない親子同じ顔　ゆきみ
すわ地震いの一番にタマを抱き　宗鉄
五七五上手くもならず飽きもせず　和夫
非常食無駄になれよと入れ替える　新録
ランドセル希望の音でリズミカル　雪菜
物価高なのに半分選挙せず　(入)修平
節分の豆鬼は逃げ壁の外　柳明
白壁にローランサンの複製画　照代
壁の花社交ダンスでお相手を　恵子
新築のきれいな壁が続いてる　眞理子
悪ガキの成長記す壁の傷　純
ウクライナ母国を守る人の壁　廣光
夏近し球児を迎ふ蔦の壁　正彦
Z世代軽々壁を飛び越える　久仁雄
だんだんと壁にもたれる長話　宏造
完璧より少し間抜けな人が好き　菊江
八十歳私の前に壁はない　厚江
句会にはジジババばかりと言う爺い　祐康
老老介護これもあの世へ第一歩　りこ
フルムーンはずかしながらペアルック　哲男
同じこと言うなと妻が怒ってる　健二
断捨離に決断力を試される　紀恵
弁当をもらい解散花の雨　耕治
総理殿ついでに行けば北の国　勝弘

川柳塔さかい（大阪）　内藤憲彦報

安心は妻が元気でよく笑う　さくら

核兵器持てば安心なんですか　ダン吉
元気な母とここに居る母子草　美津子
安心して子供の産める世であれと　里子
子が巣立ち穏やかな日々甘受する　志津子
安心はタダと思った平和呆け　萠
外食も安心出来ぬ悪ふざけ　佳子
あいさつはさくら情報この平和　じゅん子
味噌汁と味付け海苔で済ます昼　いさお
お背中にいい味出てる苦労人　憲彦
味わいが深い百寿の体験記　憲
濃い味は身体に悪いお献立　廣子
味加減妻は秤で母は舌　清
味見たか今夜のおかずの出来具合　光雄
ローカル線揺られて僕は凪いでゆく　恵子
お国自慢が顔を揃える道の駅　(米)俶子
ローカルの声が政治に届かない　玄也
ひとり旅時計を持たず風と居る　恭子
半玉は津軽訛のまだ抜けず　尚邦
病人になれぬボツンと一軒家　時雄
旅カバンひとつローカル線の駅　瑠美子
一瞬で少女に返る木の校舎　五月
さぬきうどんローカル脱し全国区　蕉子
あこがれた田舎暮らしの夢叶う　満作
日がな一日安心確かめ手を合わす　万紗子
ひと時の安心貰う平均値　ひろ子
ボラ跳ねる大阪湾に安堵する　和夫

母さんに任せばもつれ糸するり　みつこ
引力のおかげ万物みな立てる　ばっは
安心禁物ミサイルの降る時代　敏治
さらされて悔しくないか裸婦の像　進
逆らえば唇の端乱気流　満知子
サバ缶と黒ビール飲みらんららら　(江)勝弘
寂しさも悔いも未練もラッパ飲み　ひさ子
さくら吹く句会再会ランランラ　舞夢

川柳塔なら　大久保眞澄報

連勝はまぐれでないとスクワット　雅美
ヘボ将棋三連勝で孫泣かす　げんえい
連勝の雄叫び大空に響く　萠子
腕相撲父の連勝止めた春　良岩
あれやこれ岡田連勝行くぞ行く　隆一
にこにこと暮らす姿勢に負けは無し　さざえ
おひとりに馴れて男はもういらん　すみれ
からぶくろ鹿の顔からとってやる　晶子
ガラケーにやっと馴れたら次スマホ　優
飼い慣れた犬は仰向け高いびき　ゆきみ
キャッスレス馴れて預金が底を突く　和夫
全没に馴れてしまった不甲斐なさ　勝弘
見馴れれば妻も小百合に負けぬ美女　敬子
ゴム留めのズボンに馴れてよく食べる　行久
きっと勝つと雲の彼方へ往ったきり　恭昌
残された方が淋しいきっとそう　まさじ

日は昇る明日を掴む玉の汗　成子
来年もきっと見てねと散る桜　じゅん子
AIが地球を仕切る十年後　崇明
知らないで通せば済んだことなのに　千代
待ちましょうきっと怒りも冷めてくる　昌代
春光がきっと育む新たな芽　ふりこ
反抗期きっと自分が許せない　柾子
ライバルはきっと心のど真ん中　よう子
躓いても違う景色がきっとある　江里子
桜にも妬みや邪心きっとある　敬介
八咫烏待つ福島の事故現場　史郎
美しい笑顔だきっといい人だ　朝子
古里に帰り着けない流れ星　盛隆
タテ社会ヨコに歩いている迷子　すみえ
六道の辻でサイコロ振ってみる　保州
戦争の巨大迷路を出られない　誠
ほらあれよ迷子の言葉出てこない　薫
愛犬が迷子の父を連れ帰る　栄子
良心を迷子にさせる諭吉さん　楓楽

川柳de遊ぼう会（大阪）　石田孝純報

眼を閉じて横になったら朝になる　和男
憑きものは落ちただろうか粥の朝　(阪)恵子
習い事人に話せる三年目　康雄
やっとこさよいしょこらしょで老いの道　喜美子
読まぬ本人に薦める読書好き　幸徳

ネイルアート皺皺の手がポーズとる　(岡)恵　子
三年の左遷が僕の宝物　晋　一
痛み止め効いたか母の細い息　美智子
暇人にやっと届いた夕刊紙　爽　也
ありふれた朝になろうが開ける窓　雅　美
喜寿過ぎて免許返納皆安堵　はるみ
弁当のバランが仕切る昨日今日　えみこ
もしもでもピアノは弾けぬ金もなし　てるひこ
千円のランチおごられ五万貸す　よしみ
駅うどん出汁の匂いに誘われる　満知子
おいでおいでちあきなおみのしゃがれ声　のり子
不器用もいいもんだねと思う春　孝　純

六甲川柳会　糀谷　和郎報

一人ずつ呼ばれて消えてゆくのです　利恵子
泣くような感受性まだ残ってる　祐　一
愛おしいずるずる続く普通の日　次　郎
幸せはいつも隣りにある笑顔　千賀子
戦火の街見ててどうする術もなく　美恵子
ピーナツを食べ始めると止まらない　崇　史
お通しが旨すぎるので追加する　勝　弘
親孝行した気にさせる墓参り　健　二
雨模様あしたの花見どうしよう　宏
無実の罪晴らした姉の嬉し泣き　博
ごちそうさんそれに加えて美味かった　盛　夫
ずるずると延ばして欲しい我が寿命　義　明
つじつまが合うよう話足している　恭　子
どうする叩いて火あぶりパンにする　美津子
一事が万事明るい妻はありがたい　和　宏
夜泣きの児外であやして共に泣く　正　美
老いの春書き足す予定消す予定　哲　男
泣くだけで周り動かす赤ん坊　利　子
明日あることが嬉しい花吹雪　洋次郎
パステルカラー喜寿もまとって春の中　すみ子
もう二度と逢わないつもりだったのに　ひとみ
青い空ミモザの黄とでウクライナ　克　美
少しずつ小さくなったウインナー　道　子
素うどんを啜って父は国憂う　武　彦
コロナの霞よぎるが花見よく飲むね　弘
始めたらもう止められん白髪染め　隆　浩
入選に我が句を追加してほしい　忠　志
泣いて泣いて泣くのも供養泣きなさい　迪
盛り上がりビールの追加泣く幹事　光　久
潮時を探りながらも長電話　正　和
良い知らせ泣いたことなどつい忘れ　弘　華
たんぽぽが可憐に咲いて息吹き見る　憲　夫
春の朝お地蔵さまも眠そうで　美　穂
WBC鶏も祝ってケッコーと　洋　一
買い溜めたマスクどうするコロナ明け　狸　月

川柳塔すみよし(大阪)　田中ゆみ子報

音痴でも良いさ歌おうマスク取り　萠
酩酊に水九割を出すおかみ　佳　子
手術終え沈む夕日に手を合わす　さくら
遺伝子の中で消えない浮気虫　五　月
陽が沈む今日という日に感謝して　万紗子
銀色のタテガミ光る思い人　アヤ
レコード針飛んでしつこく繰り返す　とみ子
明日への元気をもらう西の空　智　子
リベンジを胸に沈めて時を待ち　俊　雄
大拍手腹がよじれる超音痴　行兵衛
五線譜は不要君へのラブソング　雅　美
復員兵軍歌嫌いの父でした　里　子
明日の無事沈む夕日に託す老い　福貴子
終焉を迎えるごとく陽が沈む　満　作
亡き義父のしつこく長いお説教　廣　子
妻いない時だけ歌うケセラセラ　憲　彦
大落暉次なる国へ輝きを　ばっは
世界中轟かせたい反戦歌　ふりこ
人間を浮き沈みしていく浄土　寿　之
やっとこさ蛍の光歌えます　志津子
歌が好きやっぱり美空ひばりです　芳　香
童心に返って文部省唱歌　いさお
飲み過ぎがなけりゃ金だが夫は銀　篤

大掃除捨てたい過去がねばりつく　宏造
オハコはね長渕剛の「乾杯」　勝弘
他人ならしつこく叱ったりしない　ゆみ子
トップではないが輝くいぶし銀　裕之
大声で歌えばストレス発散だ　陽一
たっぷりと貯めてる日本銀行券　まつお
スランプも得意な歌で乗り切れる　民子
ジャズ歌う最後は演歌の節になる　敏明
ヨーデルで牧場の空が晴れてくる　克己
花粉症しつこく僕を離さない　ひろ子
童謡を口ずさむ日は調子良い　公誠
春の陽気ついユーミンを口ずさむ　直子

西宮北口川柳会（兵庫）　緒方美津子報

うららかな水面静かに飛ぶ蜻蛉　隆一
下積みの苦労が光るいぶし銀　野鶴
験担ぎパンツも靴も左から　新録
ここに居るだってひとりが好きだもん　ひとみ
笑うって漢字笑顔に見えてくる　ゆきみ
キラキラの名前漢字は読めません　みよし
柩の母お鼻の横の泣き黒子　ばっは
阿呆の字が泣いたらあかん言っている　洋次郎
大きな顔やなあ慣れてない自撮り　千代美
思い切り咲いてぽつんと落ち椿　恵美子
美しい嘘に時時だまされる　千賀子
認知予防と漢字ドリルをくれた孫　真桜子
背中も口も丸くなったねお父さん　廣光
てにをはにこだわり森を見失う　武彦
追憶は老の美徳かなむあみだ　靖夫
人を待つポストが街角にぽつん　紀乃
子の帰省僕だけ一人浮いている　宗鉄
日日好日ひとを恨まず羨まず　和宏
マスクにも慣れたしぽつんにも慣れた　敏子
復興の漢字が跳ねる東北路　野薫
さかな偏寿司屋湯呑に教えられ　盛夫
妻の箸まだ捨てられぬ七回忌　宏造
元気ならポツンと独りも面白い　利子
まあいいかこだわりすてて手をつなぐ　敦子
頑張れば動いて感謝足と腰　迪
網棚にぽつんと白い包みあり　美津子
愛燦燦胸に響くよ漢字なら　緑

川柳塔まつえ吟社（島根）相見　柳歩報

山道の不動明王見てござる　知恵子
辛抱だ山から降りてくる風だ　柳歩
やすりかけ尖った山を笑わせる　とも子
プチ袋チョコがいいよと可愛い手　米估
嫁貰った次男までもが同居とは　あきら
どこにどう捨てよう釈迦の臍のゴマ　芳山
貰ってもお返しできぬオミクロン　徳利
アスリート等の戦い『0．1』　モナカ
箱根駅伝目のはなせないお正月　邦代
速いミサイル遅いJアラート　吹喜
激流がアッ！と地球を一回り　雪代
足早に通り抜ける十八歳　青帆
光速でウルトラマンはやって来い　小鹿
年々と歳取る早さ加速され　豊仙
仕事ぶり速くて良いが荒削り　ビル
風速50スフィンクスも失神す　美智子
制限速度下げて違反者募集中　弘充

豊中もくせい川柳会（大阪）初代　正彦報

悲喜交々あって金婚 桜餅　真理子
AIに代筆頼むラブレター　健二
やれやれと腰をおろした後に山　多美子
マスク取り深呼吸して空仰ぐ　晴子
駅へと向う人人の通う道　時子
老いて独り何事も無く日が暮れる　北舟
幸せな人が眺める花石榴　きらり
ひとり居に呉春 飽きない友である　(永)玲子
要介護それでも母さん居て欲しい　英三
ペット不可のマンション今日も売れ残る　公輔
オカリナを吹いて古里近づける　憲央
血の通うことばでドラマ蘇る　すゞ代
花粉去り次は猛暑か温暖化　敏昭
ふわり雲故郷の沙汰も絶えたまま　ヨシエ
作句へと通うカフェ店三つあり　義明
めぐり会い君より老けたと嘆き節　英旺

やれやれと思ったとたん目が覚めた　忠　子
小石蹴り湖面の月を笑わせる　(福)正　彦
受験番号嬉しなみだのヅカ娘　肇
ペットから元気と癒しもらってる　満　作
駅までは足がリズムを知っている　美津子
句読点乱れ真意が伝わらぬ　武　人
健三郎も龍一も逝っちゃった　勝　弘
新入生ママと下見の通学路　(岩)玲　子
心境は晴れのち曇り一時雨　いさお
いい日旅立ちやれやれしてるデスマスク　敏　治
まだ米寿これからねじを入れ直す　一　歩
やれやれが浮いて沈んで仕舞い風呂　眞　澄
痛みに手を当てると楽になる不思議　則　彦
泣きながら鳥の十字架子が立てる　黒　兎
赤ちゃんは笑顔を配る天使です　哲　男
やっと春ちょっとスキップしたくなる　(初)正　彦
日脚伸びやれやれ終る野良仕事　野　鶴
お互いをいたわり歩く犬と僕　ひとみ
生活の知恵を奪った全自動　洋　志

翠　洋　会(大阪)　原田すみ子報

復興へ重機が吠える天に地に　志華子
レンジに入れてそれきり忘れ二三日　桃　花
年賀状そこには友が生きている　義
自分史のドラマを少し化粧する　昭
花吹雪一夜限りの恋でした　富　子

「じゃあ又ね」それが最後になりました　理　恵
必ず帰るふるさとを出てそれっきり　希久子
デカイ音たてそれきりになる家電　弘　美
大風呂敷畳まず逝って負の遺産　和　夫
逆縁のあの子が逝った魔のカーブ　恭　昌
スーパーを散歩コースにいれている　定　生
好きな曲聞くと心が洗われる　廣　子
まず最初嬉しい話母さんに　行　久
曲折の日々に教わる人情味　大　子
母からのそれきりとなるありがとう　ふりこ
少子化で人間ロボが増えそうや　舞　夢
試してみるか初回限定五百円　眞　澄
行ってきます音信不通で便りなし　げんえい
母の葬儀静かに流れローレライ　江里子
インターネットリアルタイムの歓喜の輪　敬　子
爆弾を投げてそれきり黙秘する　蕉　子
おとりとは知らず偽物買わされる　恵美子
現代の時流に乗れぬアナログ派　満　作
正確な柱時計が半世紀　弘　子
成績アップしたらスマホを買うたげる　楓　楽
機械化も人が作った責がある　善　之
それきりと思うなリハビリの一歩　すみ子

川柳ねやがわ(大阪)　籠島　恵子報

卒業の息子に渡す白い地図　郁　夫
憲法よもっと輝けいま出番　一　歩

口五体こころ満足母の味　楓　楽
ばあちゃんが毎日開く電子辞書　かすみ
卒業の後も近況知らせ合う　ルイ子
うろついてはいない自宅がわからない　博
春うらら放浪癖が目を覚ます　朝　子
あの人は行き来してるが何の用　銀　杏
当てもなく自転車飛ばす思春期よ　順　子
徘徊を散歩してたとポリに言う　武　人
うろつく暇があれば寝るとする　勝　弘
安倍の霊がうろついている永田町　鈍　甲
輝いたあの日があって今がある　祥　昭
キラキラがまだある女傘寿です　美砂子
石ころをダイヤにしたい子の受験　泰　子
夕焼けに映えて水面の大落暉　壽　峰
輝いて見える選抜出てる子等　彰　一
仕事場でパパはキラキラしていたよ　弘　子
老いの目がキラリ輝く好奇心　和　織
待ジャパン輝く勝利たぐり寄せ　高　鷲
今一度美味しい店の灯が見たい　高　志
とれとれの大根もらいおでん煮る　千鶴子
満腹でおいしかったと言うておく　博　泉
食べっぷり見事で彼に決めました　千　賀
美味しいが賞味期限が切れている　銀　杏
弱肉強食おいしい命ありがとう　信　子
3年振り花より酒と行きますか　篤
春の陽へ万物が笑顔になれる　賢　子

美味しいと思い美味しくなる料理　欣之
春雷が夢の場面を塗り替える　あかり
動かねばひからびてゆく影法師　常男
僕だけの時間をカーテンで仕切る　亜成
誰にでも天国行きは無料です　秀雄
年に一度ソメイヨシノに恋をする　玲子
おっとりと構えていれば白寿まで　一文

あかつき川柳会（大阪）　磯島福貴子報

被災地に灯りをともすボランティア　忍
コンビニの灯り孤独を募らせる　寿子
優しさが灯になっている独居　栄子
妻淋しいか仏壇の灯が揺れる　鈍甲
彬の灯消してたまるか戦の世　ダン吉
千の火を灯し慰霊のレクイエム　壽峰
右へ右へと足並み揃う恐ろしさ　敏治
物価高うな丼竹か梅になり　勝久
人並の暮しが遠いまだ派遣　緑
母の日に並の花でも嬉しいよ　和美
本土並み棚上げのまま五十年　常男
異次元はいらない並の政策を　穴道
四捨五入すれば人並み良い余生　(長)敏子
晩年は梅漬け並の暮し向き　弘子
並並ならぬ精進あって翔タイム　紅絵
いざこざの地球心病む彗星　千代
亀さんはハレー彗星何度見た　佑治ゼミ
夢見てるから彗星のイヤリング　心平太
ドロップの缶に彗星貯めてます　しげ子
彗星よ君は太古の飛脚だね　和郎
彗星が煌めいたとき詩が生まれ　黒兎
ミラクルを時折神が用意する　克己
宝くじ誰かどこかで運を引く　正康
ミラクルはまずやらないと起らない　恵美子
明日は嘘つかぬ奇跡は絵空事　欣之
川柳で乱れた世相風刺する　珠子
六冠も彼にとっては通過点　いさお
始まった勝つも負けるもタイガース　万作
トマホーク一つ保育所二か所建つ　(近)正
画像から廃墟と化したウクライナ　浩子
軍拡の次は徴兵かも知れん　北朗
カジノより文化で元気だせなにわ　楓楽
マスコミは運賃値上げ取り上げず　一歩
巨星逝く反核唱え五十年　さんが
この星に生まれた事が奇蹟だね　福貴子

川柳藤井寺（大阪）　鈴木いさお報

書棚から大江作品出して読む　一歩
狂ってるのでない踊っているのです　亜成
葉ざくらはダンスしながら散っていゆく　瑠美子
久々のルンバ・マンボに足取られ　勝久
河内っ子ダンスと言えば盆おどり　ちづる
年重ね味わいが増す周五郎　みつこ
川柳で人の優しさ学んでる　さくら
苦手ですマイムマイムか踊れない　勝弘
芝浜の噺味わい深く聴く　かずお
寸胴の妻ムームーでフラダンス　ひろ子
民族の血をたぎらせるフラメンコ　俶子
学びました今は次々忘れます　喜代子
一刷毛の雲が気になる花筵　扶美代
雑談の中でもらったいいヒント　まつお
生きる術しっかり学ぶ鬼ごっこ　憲彦
学びやに躾強制いまはない　正義
失敗の数から学ぶ人の情　久仁雄
生涯学習広辞苑離さない　いさお

大山滝句座（鳥取）　新家完司報

遊園地子供探して迷う親　風露
迷い悩み財布を覗く物価高　由紀子
天才を掘れば夢中があらわれる　くにこ
迷ったら楽しい方を選びます　けいこ
疑問点ガリガリガリと掘ってみる　幸子
即断に後まで迷う胸の内　紫陽
夜桜の妖しの森に迷ってる　順子
先走り過ぎたか墓穴掘るはめに　美ッ千
タイミング良く昼に来るお邪魔虫　楓花
会いたいと思ったときに着信音　八千代
銀よりも金貨の方が魅力ある　久子
東、西、迷いサイコロ振ってみる　稀楽良

盆踊り炭坑節は踊れます　コスモス
危険への魅力は加速するばかり　芳山
才溢れ名人狙う聡太君　ゆたか
墓をどうしよう実家をどうしよう　正人
迷ってますどなたかポンと押しとくれ　雄大
泣き上戸笑い上戸が迷う春　麦青
あれこれと迷ってみても同じこと　小鹿
タイミング合わず手紙が渡せない　富隆
迷わずに農一筋に生きてきた　重忠
春先は天地返しの大仕事　規雄
ぶつかった拍子に好きになりました　完司

翠洋会(大阪)(前月分)原田すみ子報

広い野を駆けめぐりたいこの足で　廣子
ちっぽけな悩みと知った広い海　大子
家具のない部屋に一礼お引っ越し　桃花
手間かけて元に戻った模様替え　行久
焼きたてと聞くと欲しいと思うパン　弘美
身辺の整理をすませ広く住む　富子
盆暮の帰郷待ってる広い家　蕉子
今年こそ岡田に託す虎ファン　恭昌
壊れそうな夢を箪笥に仕舞い込む　昭
本当の言い訳誰かを困らせる　理恵
船箪笥座敷で栄華語り継ぐ　敬子
世界地図広げ旅する病床で　舞夢
大欠伸脳の空気を入れ替える　楓楽

言い訳を聞いてはくれぬetax　定生
価値観をひっくり返す嫁が来る　弘子
私の一日を知っているソファー　義
酒蔵めぐり皆の喉も桜色　ふりこ
水滴一つ音たて雨が止む夜明け　江里子
春夏秋冬同居しているタンス　眞澄

おじいさん昔六十今八十　げんえい
嫁入りのトラック家具を積んでない　善之
言い訳の前に白旗上げる夫　満作
マスク多忙次の相手はスギ花粉　和夫
ダイヤモンド富士待つ日本の平和　すみ子

新同人紹介

〒753-0048
山口市市駅通り2―6―26―806
兼崎徳子
―蘭幸・完司推薦

〒441-8016
豊橋市新栄町鳥畷95―6
西郷紀美代
―蘭幸・完司推薦

〒509-0114
各務原市緑苑中1―103
喜多村正儀
―蘭幸・完司推薦

〒586-0007
河内長野市松ヶ丘東町1807―15
坂野澄子
―楓楽・隆彦推薦

〒658-0001
神戸市東灘区森北町1-7-31-307
城戸誓子
―蘭幸・完司・真理子推薦

〒811-2502
福岡県糟屋郡久山町山田254―6
本田さくら
―蘭幸・完司・朱夏推薦

柳界展望

★第一回川柳みるふぃーゆ全国誌上大会。参加351口。同人・誌友成績。

特選　平井美智子
純粋に君を愛して春すみれ

特選　真島久美子
誰も見ていないところで風を切る

特選　中田　尚
オトナニモマホウヲカケルユウエンチ

特選　藤田　武人
後二合飲めば楷書になる手紙

特選　中嶋　常葉
歪むゴムマリを抱いているむらさき

ユーモア特選　真島久美子
バスタオル巻いて月夜を舞うつもり

ユーモア特選　石田　孝純
△があって成り立つ○と×

ユーモア特選　平井美智子
着こなした粋なうなじのサロンパス

★第16回「ふるさと川柳」受賞作品。参加者445名。566口。同人成績。

秀句　平井美智子
縁あって刀の鞘になりました

秀句　柳田かおる
わたくしの縁取りをするエンディング

秀句　柏原　夕胡
元気ですあなたと縁を切ってから

秀句　安藤　敏彦
逆縁の貌でのら猫やってくる

総合成績

優秀句一席　平井美智子

優秀句三席　柏原　夕胡

★令和4年度奈良新聞川柳年間賞。

大和柳壇

佳句　中堀　優
リハーサルなしで天国行けますか

佳句　長谷川崇明
生きる価値落ちた木の実が知っている

★第十一回広島県川柳協会誌上大会。参加者319名。同人成績。

特選　髙瀬　霜石
2000万ないと遠のく浮き袋

★第24回川柳展望全国大会。参加者113名。同人成績。

秀吟　新家　完司
この国はまだ美しいフキノトウ

秀吟　藤井　宏造
命短し輝け後期高齢者

★第43回ときせん賞

準ときせん賞　安藤　敏彦
大笑いするには涙まだたりぬ

▽**出版**△

○吉村郁久代氏が、『吉村郁久代詩集　めぐる季節』（A5判94頁、JUNPA BOOKS）を1月18日出版。12箇月の詩と俳句が日本語と英語で収録されている。

○新家完司さん（鳥取県）が、『良い川柳から学ぶ　秀句の条件』（A5判288頁、新葉館出版、1700円＋税）を4月22日出版。

▽**訂正とお詫び**△

五月号P45上段17行目、世の中と半周送れいいリズム→世の中と半周**遅**れいいリズム。P49上段後ろから5行目、救援物資たちまく届く支援の輪→救援物資**たちまち**届く支援の輪。P81下段3行目・P101上段3人目、酒井宏→**酒**井宏。P108上段8行目、宇都満智子→宇都満**知**子。P108中段1行目、稲葉両岸→稲葉**良岩**。P109上段1行目、中井萌→中井**萌**。P109上段10行目、わだかまいとろり煮込んで灰汁を抜く→**わだかまり**とろり煮込んで灰汁を抜く。

▽**新誌友紹介**△

大阪市　**森田　遊子**
紹介者　山田　葉子

▽**同人の住所変更**△

〒582-0018
柏原市大県1-5-36オリーブ柏原プラス305号
津村志華子

▽**常任理事会**△

5月8日。出席21名。①「第29回川柳塔まつり」進捗度②「第11回春の川柳塔まつり誌上大会」収支報告③「水煙抄」「檸檬抄」「番傘水府忌句会」選者の選出及び確認④同人・誌友の拡大⑤定例確認事項。

次回常任理事会6月7日（水）AM10～

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳 あまがさき	13日(火) 14時締切 帰る・スマホ（連記）・並 自由吟	会場　東園田町総合会館２F 阪急園田駅北口徒歩２分 〒661-0953 尼崎市東園田町3－49－5　藤井宏造
岸和田 川柳会	17日（土）14時締切 雨・化ける・いささか ペース	会場　岸和田市立福祉総合センター 南海電鉄岸和田駅東へ徒歩５分 〒596-0076 岸和田市野田町２-18-27　雪本珠子
川柳 たちばな	17日(土) 13時45分締切 印象吟・指（互選） 折句：あ・つ・い	会場　東園田町総合会館２F 阪急園田駅北口徒歩２分 〒661-0953 尼崎市東園田町3－49－5　藤井宏造
川柳塔 みちのく	17日(土) 17時締切 浅はか・打つ・ぽろぽろ	会場－未定 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛　TEL0172-36-8605
川柳 藤井寺	18日(日) 14時締切 パズル・向き合う	会場　パープルホール４F 〒583-0007 藤井寺市林5－8－20－303 鈴木いさお
南大阪 川柳会	19日(月) 14時40分締切 切札・さぼる・テンポ・雑詠	会場　大阪市立住まい情報センター　5F　研修室 メトロ谷町線・堺筋線「天神橋６丁目」駅③号出口 〒569-1116 高槻市白梅町5-15-1008　松岡　篤
豊中 もくせい 川柳会	19日(月) 14時締切 脈・返す・そぞろ・自由吟	会場　豊中市立中央公民館　3F 阪急宝塚線「曽根」駅　徒歩５分 〒569-0073 高槻市上本町5－26　初代正彦
川柳 ねやがわ	20日（火）13時締切 がむしゃら・空回り うっとしい・合図・自由吟	会場　寝屋川市産業振興センター 〒573-1104 枚方市楠葉丘１－9－13　藤村亜成
川柳 さんだ	20日(火) 13時30分締切 特例・悲しい・ショック 始める・自由吟	会場　キッピーモール　6F（JR三田駅前） 投句先 〒669-1322 三田市すずかけ台3-4-1 E棟804 村田　博
川柳塔 すみよし	24日(土) 14時締切 山・進む・しっかり	会場　住吉区民ホール集会室４(図書館棟２F) 〒580-0026 松原市天美我堂3－130－2－404 森松まつお
和歌山 三幸 川柳会	24日(土) 13時15分締切 雨・給料・時計	和歌山商工会議所　４階 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
はびきの 市民 川柳会	25日(日) 14時締切 水・集まる・むんむん・席題	会場　陵南の森公民館 近鉄南大阪線「高鷲」駅下車　北へ徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8　徳山みつこ
川柳 ふうもん 吟社	25日(日) 13時から 自由吟・やばい・改心 真っ青・席題	会場　県民ふれあい会館　4F　鳥取市扇町２１ 〒689-0202 鳥取市美萩野2－171－3　中村金祥

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所（06-6779-3490）へご連絡ください。
★上記は年初の予定。諸般の事情のため、詳細は各柳社にお問い合わせください。

6月各地句会案内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な　ら	1日(木) 14時締切 ちまた・つくづく・撒く	会場　奈良市中部公民館 近鉄奈良駅③番出口徒歩５分 奈良県磯城郡川西町結崎421-64　長谷川崇明
城　北 川柳会	3日(土) 開場13時　締切14時 大きい・桃源郷・本気・自由吟	会場　旭区老人福祉センター　3F メトロ谷町線「千林大宮」駅③番出口を左後側 投句先　〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14　江島谷勝弘
川　柳 とんだばやし 富柳会	3日(土) 14時締切 白夜・やんわり・自由吟・席題	会場　富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ 200 m 〒584-0066　富田林市錦織北1－14－6　中村　惠
倉　吉 川柳会	3日(土) 14時締切 漠然・缶・風・席題	会場　倉吉市明倫公民館 投句先　〒682-0722 東伯郡湯梨浜町はわい長瀬1028-1　天野道春
川柳塔 まつえ 吟　社	3日(土) 13時40分締切 素・坂・言葉・時間	会場　雑貨公民館 〒690-0012 松江市古志原7－19－19　中筋弘充
おりひめ☆ ひこぼし 川柳会	7日(水)消印有効 植木鉢・旅・田舎	投句先　〒573-0095 枚方市翠香園町2－7 『おりひめ☆ひこぼし川柳会』　藤田武人
あかつき 川柳会	9日(金) 涼・水玉・ロマン・時事吟	会場　大阪保育運動センター（新谷町第1ビル2F 203会議室） メトロ「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒543-0013 大阪市天王寺区３－６　木村ビル２階 あかつき川柳会
六　甲 川柳会	10日(土) 14時締切 席題・ルール・浅い・省く 自由吟	会場　灘区民センター　5階 E室 JR「六甲道」駅南隣　メイン六甲内 〒658-0083 神戸市東灘区魚崎中町２－12－５　敏森廣光
川柳塔 打　吹	10日(土) 13時30分締切 空気・深い・しとしと・席題	会場　倉吉市上灘町９　上灘コミュニティーセンター 〒682-0034 倉吉市大原637－3　牧野芳光 方 川柳塔打吹　事務局
川柳塔 わかやま 吟　社	11日(日) 14時10分締切 兼　題＝気軽・お礼・パンチ 課題吟＝番	会場　和歌山県JAビル１１階 兼　題　〒642-0024 海南市阪井652－14　小谷小雪 課題吟　〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 桒原道夫
西宮北口 川柳会	12日（月）13時30分締切 席題・階段・飛ぶ・上手い 自由吟	会場　西宮市立中央公民館　６F　講堂 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「プレラにしのみや」 〒663-8112 西宮市甲子園口北町27－4－602　梅澤盛夫
ほたる 川　柳 同好会	13日(火) 13時30分締切 酒・返す・とにかく	会場　豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール蛍池　蛍池駅前ビル　5F 〒561-0813 豊中市小曽根２－４－１　水野黒兎
川柳塔 さかい	13日（火）14時締切 くやしい・頂点 折句：え・り・か	会場　東洋ビル２F　（堺東駅北西改札口から2分） 欠席投句先 〒599-8122　堺市東区丈六77－4　齋藤さくら

編集後記

★3、4月の劇場通い。

★3月5日、春風亭一之輔独演会（SAYAKAホール）。27日、池袋演芸場昼席。コント赤信号「誤餐」（ザ・スズナリ）。29日、五代目江戸家猫八襲名披露（鈴本演芸場）。30日、末廣亭昼席。31日、若手落語会。主任・喬太郎（浅草演芸ホール）。

★4月1日、京山幸枝若独演会（木馬亭）。2日、「新・陰陽師」猿之助（歌舞伎座）。3日、「与話情浮名横櫛」仁左衛門・玉三郎。「連獅子」松緑・左近。（歌舞伎座）。10日、「曾根崎心中」（文楽劇場）。13日、「妹背山婦女庭訓（1部）」（文楽劇場）。14日、「妹背山婦女庭訓（2部）」（文楽劇場）。20日、劇団新感線「ミナト町純情オセロ」（WWホール）。21日、「TURUBEBANASHI」（ピロティホール）。26日、「垣根の魔女」久本雅美（松竹座）。28日、「春蝶・吉弥と一之輔 三人噺」（中之島中央公会堂）。

★ああ、楽し。（道夫）

♤私が川柳の世界に足を踏み入れたのは職を退いた十年程前です。技術系の私は趣味として囲碁をやって気分転換をしていました。しかし、囲碁の異名は手談とも言われるように言葉不要の世界。第二の人生を有意義に過ごすために、言葉の世界をも学んでみようと考えた時に「川柳」が浮かんできたのでした。実は私の叔父が川柳を楽しんでいたのを思い出したのです。

♤そこで、まずは勉強と考え朝日カルチャーセンターの川柳教室に通うことにしました。そうして楓楽先生に教えていただくことになり、同席していた川柳塔の先輩に誘われて塔の会員となりました。句会にも出席し始めましたが、やってみると句作は難しく、奥深い世界だなあと痛感する日々です。非力な新編集員ですが、頑張りますのでよろしくお願いします。（国和）

♥学生時代の親友が三重県菰野町という小さな町で中学教員をしていた。私は夏休みに彼女の間借り下宿に遊びに行って田舎暮らしを楽しんだ。

♥その菰野町に三重県の岡田文化財団がパラミタミュージアムを開設したのは20年前。今開催中の棟方志功展に一緒に行こうと誘われ、50年ぶりにその町を訪れる事になった。

♥鈴鹿山脈のセブンマウンテンに囲まれるように佇むその美術館は都会のそれとは違って素朴さを感じた。パラミタというのは仏教用語「波羅密多（はらみた）」からとったらしい。国際版画大賞を受賞した〈柳緑花紅頌（りゅうりょくかこうしょう）〉は愛らしく、同郷で親交深い編集者の山口繁太郎氏の京都の邸宅を訪れる度に描いた襖絵は迫力があった。

♥快晴の空に突き出すような鈴鹿の山々に見送られながら、友人との青春の片鱗を残す菰野町を後にした。（じゅん子）

ひとこと

川柳とツイッターと私

川柳塔のTwitter（ツイッター）の「中の人」の担当をさせて頂いております。主に川柳塔誌最新号の川柳塔鑑賞、水煙抄鑑賞、川柳塔誌電子化事業で川柳塔webサイトにアップしている句集の紹介等を行っています。

川柳塔のツイッターのフォロワー（応援して下さる人たち）の中には、私が記事にしたものに、「いいね」をつけて下さり、大変励みになっております。

私の使命は、川柳塔社をアピールすること、川柳界を盛り上げることだと思っています。これからも頑張ります。

ツイッターをされていない皆様も是非ツイッターに参加して下さい。宜しくお願い致します。

（藤井　智史）

川柳塔（同人）・水煙抄（誌友）投句用紙

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

きりとりせん

種目「　　」発表（8月号）

地名　　市都道府県

姓雅号

同人・誌友　マルで囲んでください。

投句先　〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

「川柳塔」への投句について

(1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。

(2) 愛染帖・檸檬抄・一路集・インスピレーション・ナビ（印象吟）への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。

(3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。

(4) 各欄への投句数および**投句締切期日の厳守**をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から14時までにお願いいたします。

檸　檬　抄　投　句　用　紙

「　順　」（6月15日締切）

8月号発表

永見　心咲 選 ――共選―― 江島谷勝弘 選

◎楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

きりとりせん

	B	A
地名 県府 市道都 姓雅号		

切らないで下さい

	B	A
地名 県府 市道都 姓雅号		

左右に同じ句を書いて下さい

個人用

残暑見舞広告　原稿台紙

きりとりせん

料金は払い込み用紙をご利用下さい。

1／9頁　1／6頁　1／3頁　2／3頁　1／2頁　1頁

（ご希望の大きさを○で囲んでください。）

原稿を貼布される方は、
この位置に貼り付けて下さい

6月20日締切

姓・雅号	住　所	電　話
	〒	（　　）　　—

川柳など掲載希望事項

送付先

〒543-0052　大阪市天王寺区大道1丁目14番17号　花野ビル201

川柳塔社

きりとりせん

川柳塔誌新規購読申込書

年　月　日

氏名	住所	電話	紹介者	
	〒　－	－　－		◯ 年　月から半年　5000円 ◯ 年　月から一年　9800円 該当の方に◯をつけて下さい

〒543-0052　大阪市天王寺区大道1丁目14番17号　花野ビル201

川柳塔社（電話　06-6779-3490）

振替　00980-4-298479

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい

本社6月句会

とき　6月7日(水)　13時開場・13時40分締切
ところ　アウィーナ大阪　4階　金剛の間
天王寺区石ケ辻町19―12　電06・6772・1441

おはなし「川柳と怪談」　松岡恭子氏
席題「　　」　江島谷勝弘選
兼題「あふれる」　近兼敦子選
「ドラマ」　宇都満知子選
「もろい」　平井美智子選
「焼く」　川端一歩選
「自由吟」　小島蘭幸選
（各題2句以内）

会費　1000円
投句料　1000円（切手不可）

作品募集

8月号発表（6月15日締切）

川柳塔（8句）　小島蘭幸選
水煙抄（8句）　木本朱夏選
愛染帖（2句）　新家完司選
檸檬抄（2句）「順」　江島谷勝弘　永見心咲　共選
インスピレーション・ナビ（2句）　大西泰世選
「コンビニ」　丹下凱夫選
一路集（2句）「脱ぐ」　大内せつ子選
初歩教室「積む」（3句）　水野黒兎担当

初歩教室「積む」は9月号発表

9月号

檸檬抄「記号」
一路集「合図」「含む」
初歩教室「道」

本社7月句会

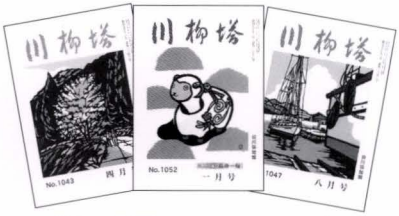
6日(木)　午後1時から
兼題「千」「キラキラ」「ずるい」「日本」「自由吟」

本社句会欠席投句のお薦め

＊幅4.5センチ×長さ25センチの句箋一枚に一句ずつを書き、裏面に題とお名前を記入のこと。
＊投句料1000円（切手不可）。
＊句会日の前々日までに事務所に必着のこと。

定価　八百円（送料100円）
半年分　五千円（送料共）
一年分　九千八百円（同）
二〇二三年（令和五年）六月一日発行
発行人　小島和幸
編集人　桒原道夫
印刷所　美研アート
〒543-0052
大阪市天王寺区大道一―一四―一七
花野ビル201号室
発行所　川柳塔社
電話（〇六）六七七九―三四九〇番
振替　〇〇九八〇―四―二九八四七九番

川柳・俳句・エッセイ・小説
新聞・広告・ポスター・伝票等
あなたの思いをかたちにします。



美研アート
〒531-0061 大阪市北区長柄西1-1-10
TEL (06) 4800―3018
FAX (06) 4800―3028
Eメール bikenart@ea.mbn.or.jp
ホームページ https://www.bikenart.com

令和五年　六月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻一一五三号　川柳塔　六月号
定価　八百円（送料　百円）

新家完司・著

秀句到達への
最短距離！

A5判ソフトカバー・288頁
定価（本体1,700円+税）
ISBN978-4-8237-1084-1

秀句の条件

良い川柳から学ぶ

良い川柳とは何か。

膨大な川柳作品と長年対峙してきた著者が古今東西の優れた句を掘り起こし、現代的なエッセンスを加えて導く、「知っておきたい名句」532句。

【注文は葉書かFAXにて。支払いは到着後で可。
〒689-2303 鳥取県東伯郡琴浦町徳万597 新家完司　FAX 0858－52－2449】

おりひめ☆ひこぼし川柳会
第３回（令和５年度）誌上大会のご案内

課題と選者（各題２句）

☆「凍　　る」☆　　雫石　隆子
☆「美しきもの」(共　選)☆　　平井美智子
☆「美しきもの」(共　選)☆　　真島久美子
☆「♪ ♫ ♪」(印象吟)☆　　米山明日香
☆「グラデーション」☆　　新家　完司
☆「　衣　」☆　　小島　蘭幸
☆「ヒーロー」☆　謝選　藤田　武人

投句締切　令和５年７月７日(金)　消印有効
大会誌は９月下旬発送
参加者全員に大会誌贈呈

締切まで残り１ヶ月です!!

投句要領　規定の用紙（コピー可）
または、便箋可

参加費　１０００円（切手不可・小為替等）
小中学生は無料
（無料枠に限りがありますので
事前に問い合わせて下さい）

投句先
〒573−0095　大阪府
枚方市翠香園町２−７
藤田　武人
TEL　072−395−5453
☆夫婦共働きですので問い合せの電話は
18時以降にお願いをしております。

雑誌 05703−6